横手湯田Ⅱ遺跡
西田Ⅱ遺跡

都市計画道路横手鶴光路線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

横手湯田Ⅱ遺跡
西田Ⅱ遺跡

都市計画道路横手鶴光路線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

北に赤城山を背負い、南には関東平野が広がる前橋の穀倉地帯。

冬は赤城おろしの北風が電線を鳴らして前橋台地の上を吹き過ぎます。北風に鍛えられた麦が大きなうねりをうっています。初夏には一面の田んぼとかわり、秋には黄金の穂が波うっています。

ここ前橋台地は古来よりの穀倉地帯であり現在もその例にもれません。しかしながら、都市化の波は少しずつこの地を変えようとしています。

横手湯田Ⅱ遺跡、西田Ⅱ遺跡はそんな穀倉地帯の上にあり、両遺跡は約1km離れており、東を端気川、西を利根川に挟まれた低地や微高地に位置しております。

本遺跡は都市計画道路横手鶴光路線の道路改良事業が実施されることとなり、発掘調査の必要性がでてきました。

そこで、山武考古学研究所に調査を依頼し発掘調査を行うこととなりました。調査の結果、横手湯田Ⅱ遺跡では、3面の遺構が確認されました。第1面は水田跡（As-B下1108年）、第2面では小区画の水田跡（Hr-FA下6C初頭）、第3面では溝（Hr-FA下水田跡に埋没した遺構）が発見されました。

西田Ⅱ遺跡では第1面は水田跡（As-B下1108年）で横手湯田Ⅱ遺跡と同じ、As-B下の水田の広がりがうかがわれます。

第2面は平安時代（9C～10C）の住居跡10軒と溝19条、土坑53基が発見されました。

群馬県埋蔵文化財調査事業団の調査結果と合わせ、周辺の古代のありさまを知る資料となると思います。前橋南部の古代の歴史解明の資料として活用いただければ、幸いと思います。

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長　中西誠一

例　言

1．本書は都市計画道路横手鶴光路線道路改良事業に伴い、記録保存のため事前調査された横手湯田Ⅱ遺跡、西田Ⅱ遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．両遺跡の所在地は横手湯田Ⅱ遺跡が、群馬県前橋市亀里町921他、西田Ⅱ遺跡が群馬県前橋市鶴光路町255-1他である。

3．発掘調査は前橋市埋蔵文化財発掘調査団から委託を受け山武考古学研究所が実施した。現地調査は前橋市埋蔵文化財発掘調査団の指導のもと山武考古学研究所員・高階敏昭が担当した。

4．調査期間は横手湯田Ⅱ遺跡が平成９年12月１日～平成10年３月25日、西田Ⅱ遺跡が平成９年12月１日～平成10年３月25日である。

5．調査面積は横手湯田Ⅱ遺跡が1,605m^2、西田Ⅱ遺跡が1,135m^{2}である。

6．本書の原稿執筆は序章第１節が宮内毅、他は高階が行った。

7．調査に際しては下記の諸機関にご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表するものである。
前橋市北関東自動車道対策室、前橋市教育委員会、㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

8．発掘調査で得られた出土遺物及び資料は、全て前橋市教育委員会文化財保護課収蔵庫に保管している。

凡　例

1．挿図中に使用した北は座標北である。

2．挿図に建設省国土地理院発行の1/2.5万地形図（前橋）と前橋市都市計画課発行の1/2,500原形図『75･76』を使用した。明治21年陸地測量部発行の地方迅速図を80％縮小したものを使用した。

3．遺跡の略称番号は横手湯田Ⅱ遺跡が９G-19、西田Ⅱ遺跡が９G-20である。

4．各遺構の略称は次のとおりである。H…住居跡　T…竪穴状遺構　D…土坑
W…溝状遺構　P…ピット　X…不明遺構　O…風倒木

5．本文に記載した遺構、遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。

横手湯田Ⅱ遺跡

遺構　溝状遺構…1/100　畦…1/100　遺跡全体図…1/200

遺物　土器・石器…原寸、1/3、1/4　鉄製品…1/3

西田Ⅱ遺跡

遺構　住居跡・竪穴状遺構・土坑・ピット…1/60　溝状遺構…1/80、1/100
カマド…1/20　遺跡全体図…1/200

遺物　土器・石器…1/3、1/4　石製品…原寸、1/3　鉄製品…1/3

6．使用したスクリーントーンは次のとおりである。

遺構中焼土…　施釉…　油煙…　内面黒色処理…

7．欠番について、発掘調査時に別遺構として番号を付したが整理作業の段階で同一遺構と判明した遺構、並びに現代の掘り込みと判明したものについては欠番とした。遺物注記番号は発掘時のものを使用しているため、以下に旧番号、新番号を記す。

横手湯田Ⅱ遺跡…W-15→W-13・畦-15

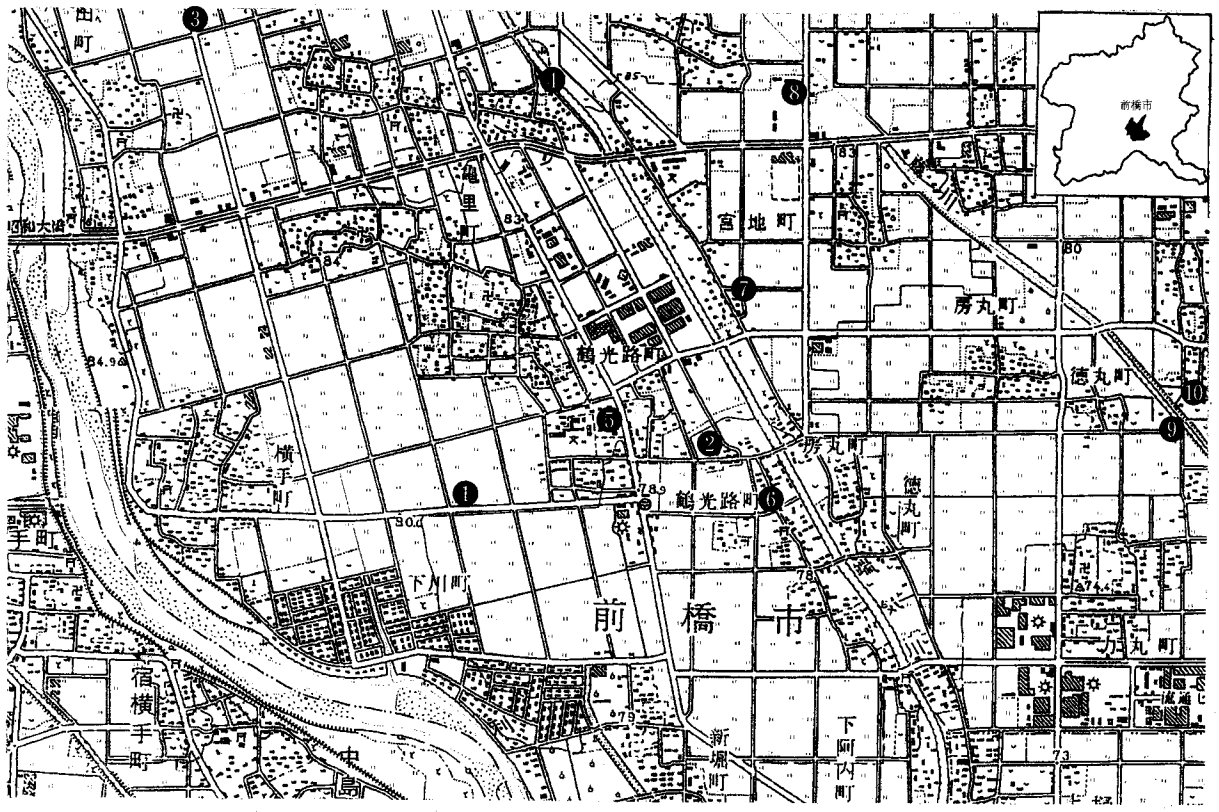
西田Ⅱ遺跡……W-10・W-11・W-12→W-７

目　　次

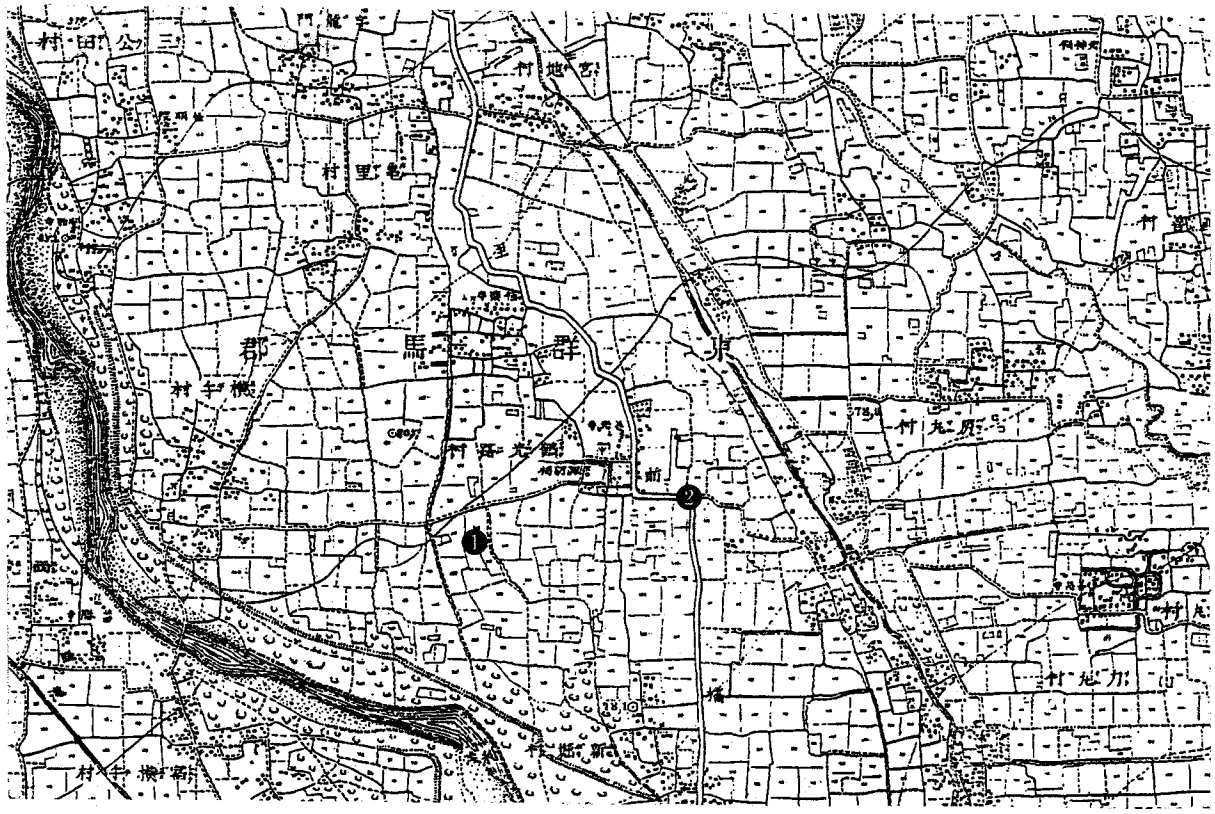
序・例言・凡例
序　章
第１節　調査に至る経緯……1
第２節　遺跡の位置と環境……1
第１項　遺跡の位置……1
第２項　歴史的環境……2
第１章　横手湯田Ⅱ遺跡……3
第１節　調査の方法……4
第２節　調査の経過（日誌抄）……4
第３節　標準堆積土層……4
第４節　遺構と遺物……6
第１項　中世水田跡……6
第２項　As-B 軽石下水田跡……6
第３項　Hr-FA 下水田跡……7
第４項　Hr-FA 下水田跡に埋没した遺構……7
第５節　まとめ……8
第２章　西田Ⅱ遺跡……15
第１節　調査の方法……16
第２節　調査の経過（日誌抄）……16
第３節　標準堆積土層……17
第４節　遺構と遺物……17
第１項　遺跡の概要……17
第２項　住居跡……18
第３項　竪穴状遺構……20
第４項　土坑……21
第５項　溝状遺構……21
第６項　ピット……22
第５節　まとめ……22

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡
第２図　遺跡の位置
第３図　横手湯田Ⅱ遺跡の調査区配置図……3
第４図　標準堆積土層図……5
第５図　横手湯田Ⅱ遺跡全体図……（折り込み）
第６図　１～６号溝状遺構、１～３号畦実測図…9
第７図　７号溝状遺構、４～10号畦実測図……10
第８図　８～15・17号溝状遺構実測図……11
第９図　16・18～20・24号溝状遺構、11～14号畦実測図……12
第10図　21・22・25号溝状遺構、16～19号畦、Hr-FA 下水田跡１号畦実測図……13
第11図　Hr-FA下水田跡に埋没した１号溝状遺構・不明遺構・遺構外出土遺物実測図……14
第12図　西田Ⅱ遺跡の調査区配置図……15
第13図　標準堆積土層図……17
第14図　西田Ⅱ遺跡全体図……（折り込み）
第15図　１～４号住居跡実測図……27
第16図　６～８号住居跡、17・48・49号土坑実測図……28
第17図　５・９・10号住居跡実測図……29
第18図　１～５号竪穴状遺構実測図……30
第19図　１～14号土坑実測図……31
第20図　15～27号土坑実測図……32
第21図　28～42号土坑実測図……33
第22図　43～53号土坑、１～５号ピット実測図…34
第23図　１～６号溝状遺構実測図……35
第24図　８・９・13号溝状遺構実測図……36
第25図　７・14～16号溝状遺構実測図……37
第26図　17～19号溝状遺構実測図……38
第27図　１～５号住居跡出土遺物実測図……39
第28図　５～８号住居跡、５号竪穴状遺構出土遺物実測図……40
第29図　24・25・29・37号土坑、ピット及び溝状遺構出土遺物実測図……41
第30図　溝状遺構及び遺構外出土遺物実測図……42



第１図　遺跡の位置と周辺遺跡（国土地理院２万５千分の１前橋）



第２図　遺跡の位置（明治21年陸地測量部発行地方迅速図倉賀野２万５千分の１）

周辺遺跡　①横手湯田Ⅱ遺跡　②西田Ⅱ遺跡　③公田池尻遺跡　④川曲遺跡　⑤下川淵小学校北遺跡
⑥西田遺跡　⑦宮地中田遺跡　⑧東田遺跡　⑨徳丸仲田Ⅱ遺跡　⑩西善尺司Ⅱ遺跡

序　　章

第１節　調査に至る経緯

北関東自動車道に関わる埋蔵文化財発掘調査は、群馬県埋蔵文化財調査事業団により平成７年度から行われている。本市においても、本線北側に都市計画道路横手鶴光路線の建設を予定しており、本線同様、埋蔵文化財包蔵地での工事に際しては事前の発掘調査が必要となった。

このため、平成９年10月27日付で前橋市長　萩原弥惣治より前橋市教育委員会あてに都市計画道路横手鶴光路線道路改良事業に伴う本発掘調査の依頼がなされた。前橋市教育委員会が組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団はこれを受諾し、11月18日両者の間で本発掘調査の委託契約が締結された。

その後、前橋市埋蔵文化財発掘調査団は本発掘調査の委託契約を12月１日付で山武考古学研究所と締結し、発掘調査は前橋市埋蔵文化財発掘調査団の指導のもと、平成10年３月25日までの調査期間で実施した。

第２節　遺跡の位置と環境

第１項　遺跡の位置（第１・２図）

横手湯田Ⅱ・西田Ⅱ遺跡の所在する亀里町・鶴光路町は前橋市の南部にあって、JR 前橋駅の南東約７km に位置する。両遺跡はそれぞれ東方約１km と約150m に端気川が流れている。両遺跡地の北約１km には県道27号高崎駒形線が東西に走り、これと交差する県道前橋・玉村線が両遺跡地の近隣を南北に横断する。両町の周辺は田園地帯が広がる中、住宅地が点在し周辺には横手、宮地、徳丸、新堀等の町並みが形成されている。近年都市のドーナツ化現象により周辺は宅地化や大型店舗、工業団地の建設が相継ぐ。

両遺跡が立地する前橋台地は、前橋市街地を北端に南方向一帯に広がる沖積平野で、前橋泥流堆積物層が形成された洪積世後期の約24,000年前から、利根川に浸食されずに沖積化が進んだ地域である。この泥流層には凝灰角礫岩を含み、浅間山の噴火によるものと推定されている。同層は前橋、高崎、伊勢崎を中心とする県南一帯に広がる扇状地形上に、厚さ10～15m も堆積している。それは岩神の飛石やお艶が岩の巨岩が物語っているように、想像に絶する大規模な噴火活動があったことを示している。

前橋台地上には利根川を始め幾つかの中小河川が南北に流れ、小規模ながら氾濫原を各所に形成している。台地の東側を流れる利根川は榛名山東南裾野の末端を浸食する形で南流し、前橋市大手町付近～玉村町五料付近の約14km は、この台地を貫流している。この利根川は過去に３回流路を変えている。前橋泥流堆積物層が堆積した後の約24,000年前の利根川は総社町辺りから新前橋～染谷川、滝川付近を流れ井野川に注いでいた。その後、約17,000年前に榛名山で発生した泥流により埋め立てられ、赤城南西麓縁の広瀬川低地帯にその流路を変更している。前橋市街地の東北部を南北に流れる桃ノ木川や市街地を流れる広瀬川は、かつての利根川本流の残存河川で、旧利根川流路（広瀬川低地帯）と前橋台地の境を流れる馬場川と広瀬川を結ぶラインは、約３m の河崖を形成している。本遺跡は、現利根川と旧利根川（広瀬川低地帯）に挟まれた前橋台地上を流れる端気川右岸の後背湿地に横手湯田Ⅱ遺跡、微高地上に西田Ⅱ遺跡が立地している。

端気川は古代、前橋台地北部の湿地帯を源に持つ自然流路の河川で台地中央部を南北に流れていた。この水源を活用し台地上では古墳時代から徐々に水田開発が行われてきたが、奈良時代以降の条里制地割りの時

期には耕地の大規模な再開発計画が行われた。豊富な水資源を手に入れるため、端気川と旧利根川（広瀬川低地帯）を灌漑用水で結び台地上に豊富な水を提供した。このことは、前橋台地における農地開拓と端気川とが古代より密接に関わっていたことを示している。前橋台地上にはこの他にも藤川等幾つかの水路が認められる。

前橋台地における条里制地割りは現在の道路区画からも読み取れ、端気川の台地への流入地点を基点にしてほぼ碁盤目状に配置されており、現在の道路と当時の条里制地割りはほぼ一致する。前橋台地での条里制地割りによる耕作の再開発が同一の企画でなされていたと言える。このように本遺跡は、前橋台地のほぼ中央に位置し、条里制地割り施行以来、端気川が運んでくる豊富な水資源により、安定した人間生活を営むことができる一大穀倉地帯を作り上げた河川周辺に位置する。

第２項　歴史的環境

旧利根川流路にあたる広瀬川低地帯と現利根川に挟まれる地域に限定した前橋台地では、周辺の丘陵地と異なり水成ローム層が厚く蓄積し一面湿地帯を形成している。縄文時代以前は縄文時代草創期の僅かな資料を除き、台地上ではほとんど発見されておらず、人々の生活に適した環境ではなかったものと想定されている。その後、縄文時代まで水成ロームの堆積が続くが台地北端部に縄文中期と思われる住居跡と、台地南端部に晩期の遺物が発見されている程度で、この地域には殆ど生活痕が見られない。

弥生時代に入っても環境の変化は訪れず、人々を寄せつけぬ環境の厳しさは依然続いていたようで、台地の北端部に樽式土器を持つ遺跡が発見されたのみで、それ以外、当時の様子をうかがい知ることはできない。このように、弥生時代においても縄文時代同様、人々はこの広大な沖積平野に安住の地を求めることはなかったようである。

古墳時代になると、浅間Ｃ軽石（As-C 軽石）が降下した４Ｃ前後から本地域にも遺跡が発見された。旧利根川（広瀬川低地帯）が作り上げた自然堤防縁辺部と台地北端部に集中して集落跡が見られ、その後背湿地に農業生産の場所を求めているものと想定される。本遺跡が立地する台地中央部にも微高地上に下川淵小学校北遺跡や、石田川式土器を多量に廃棄した溝や掘立柱建物跡が検出されている徳丸仲田Ⅱ遺跡が発見される。

石田川期の集落跡が集中する旧利根川（広瀬川低地帯）の微高地にはそれと同時期である４Ｃ後半頃の築造と言われている前橋天神山古墳（前方後円墳）、八幡山古墳（前方後方墳）等が存在し、県内で出現した古墳の中では最も古い部類に属し、その規模も当該期では最大級である。以後この微高地上には、一大集落が展開されていたようで、古墳の終焉を迎える７Ｃ末までに前橋二子山古墳、両家二子山古墳、山王金冠塚古墳等140以上の古墳が継続して造営されていく。

本遺跡の立地する台地中央部において６Ｃ初頭に降下した榛名渋川テフラ（Hr-FA）と６Ｃ中葉に降下した榛名伊香保テフラ（Hr-FP）に伴う泥流に埋もれた水田跡が端気川の後背湿地で発見されているものの、同時期の集落は現在のところ調査事例がない。その後、８Ｃ以降律令制が導入されると前橋市元総社町付近に国府が造営されることとなる。それと時を同じくして前橋台地上には条里制地割りが施行され、台地の大規模開発により豊饒の地域へと変貌した。周辺では平安時代後期の1108年に降下した浅間Ｂ軽石(As-B 軽石)下から条里制地割りを想起させる宮地仲田遺跡、西田遺跡等が本遺跡地に近接して発見されている。

第１章　横手湯田Ⅱ遺跡

第３図　横手湯田Ⅱ遺跡の調査区配置図（１：3,000）

第1節　調査の方法

遺跡は隣接する㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団の調査結果から、中世水田跡、As-B 軽石下水田跡、Hr-FA 下水田跡、Hr-FA 下水田跡に埋没した溝状遺構、不明遺構の存在が予想される。調査は中世水田跡の上面まで機械力で掘り下げた後、人力で同層の掘り下げを行い遺構の検出作業に取りかかった。その後各遺構面の上面まで機械力で掘り下げて、人力による遺構の検出作業に取りかかった。

各調査区ごとにトレンチを設け遺構が存在するかを確認すると共に、土層の堆積状態を観察した。

遺構の全体測量図は航空測量を行い、水準点は公共水準を用いた。個別の遺構は埋没状態の観察、記録を行い、畦、溝状遺構のセクション図、エレベーション図を1/20縮尺で作成した。

写真撮影は随時行い、白黒35mm、カラースライド35mm、カラー35mm の3種類を使用した。

第2節　調査の経過（日誌抄）

調査は、平成9年12月1日から平成10年3月25日まで実施した。

12月期　H 区の表土除去から作業を開始する。標準堆積土層で中世水田跡、As-B 軽石下水田跡、Hr-FA 下水田跡、Hr-FA 下水田跡に埋没した溝状遺構、不明遺構を確認した。上層の中世水田跡の検出作業から開始した。その後 As-B 軽石下水田跡の調査を開始し水田面及び溝状遺構、畦を検出する。

1月期　G 区の表土除去作業を行う。標準堆積土層で中世水田跡、As-B 軽石下水田跡を確認した。中世水田跡の検出作業を行う。その後 As-B 軽石下水田跡の調査を行い水田面、溝状遺構、畦を検出する。K 区の表土除去作業を開始する。標準堆積土層で As-B 軽石下水田跡と Hr-FA 下水田跡を確認する。As-B 軽石下水田跡の調査から開始した。

2月期　各調査区の As-B 軽石下水田跡の検出作業を行い、随時実測作業に取りかかった。各調査区の As-B 軽石下水田跡の調査を終了（H 区は全ての調査を終了）する。G、K 区の Hr-FA 下水田面の表土除去作業を行い、水田面の検出作業を開始する。畦が1本検出された。

3月期　K 区の Hr-FA 下水田跡の検出作業を開始するが畦、溝状遺構は確認できなかった。G 区の Hr-FA 下水田の調査を終了する。G 区の Hr-FA 下水田面跡に埋没した遺構を調査する為表土除去を行う。溝状遺構と不明遺構を検出する。プレハブ、トイレ、発掘機材等を撤去して全ての調査を終了する。

第3節　標準堆積土層

標準堆積土層は各調査区で異なるため、調査区の堆積状況については、第4図の通りである。

G　区

利根川の洪水層で覆われた黒色土層（層厚2cm）が、調査区の中央から東側にかけて堆積している。As-B 軽石を大量に含む中世の水田面（Ⅳ層）である。As-B 軽石層（Ⅴ層）は、現地表面下約50cm の位置で検出され、層厚は8cm 前後である。遺存状態は良好である。Hr-FA（Ⅶ層）は、東側で観察できたが断続的に残りが悪い。下層から黒色粘質土の Hr-FA 下水田面（Ⅷ層）を確認した。

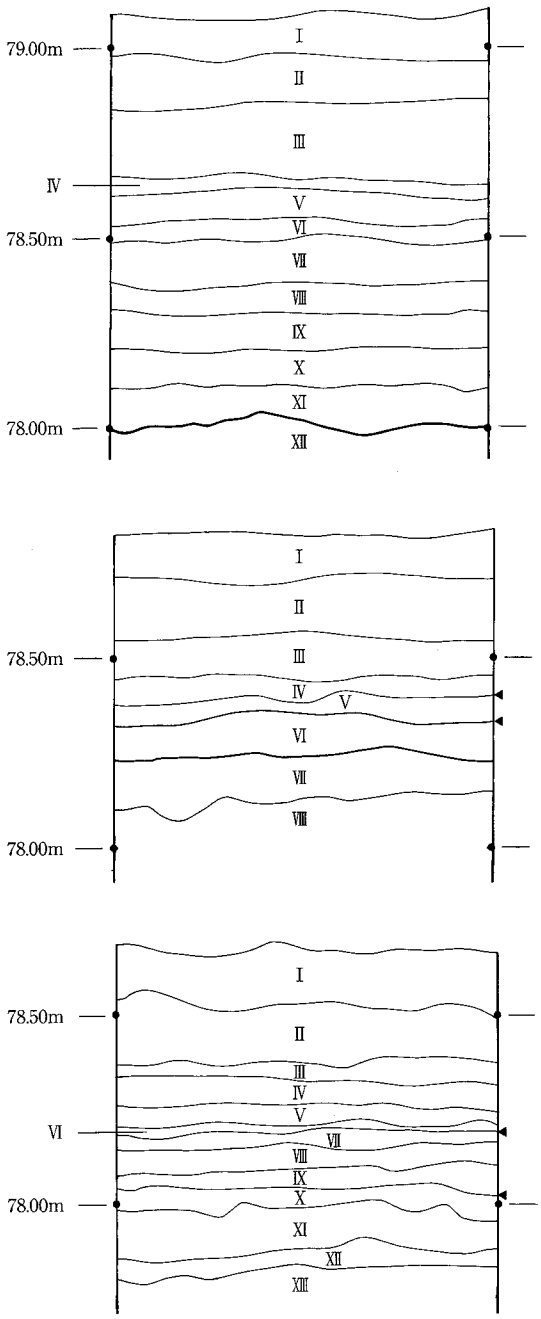
H　区

As-B 軽石層（Ⅳ層）は、現地表面下約40cm で検出され層厚は6cm 前後である。遺存状態は西側から中

央にかけて良好であるが、東側は削平されているため、殆ど堆積は見られなかった。As-B 軽石層（Ⅳ層）よりも下層には Hr-FA・Hr-FP・As-C 軽石に伴う水田跡は確認されなかった。

K　区

As-B 軽石層（Ⅷ層）は、現地表面下約50cm で検出され、層厚は 6 cm 前後である。遺存状態は G 区同様良好であった。Hr-FA 層（Ⅸ層）は、灰褐色土でブロック状の堆積を確認した。下層からは黒色粘質土の Hr-FA 下水田面を確認した。その下層の As-C 軽石に伴う水田跡は確認できなかった。



G区　標準堆積土層
Ⅰ層　暗褐色土層　耕作土　締まり、粘性なし
Ⅱ層　暗褐色土層　旧耕作土　締まり、粘性やや有り
Ⅲ層　褐色土層　砂質土を含む、鉄分を僅かに含む　締まりあり、粘性なし
Ⅳ層　黒褐色土層　中世水田　As－B 軽石を多量に含む
Ⅴ層　暗褐色土層　As-B 軽石純層
Ⅵ層　黒色土層　As-B 軽石下水田　締まり、粘性有り
Ⅶ層　灰黄褐色土層　Hr-FA 軽石をブロック状に若干含む　鉄分を若干含む　締まり、粘性有り
Ⅷ層　黒色土層　Hr-FA 下水田　鉄分を僅かに含む　締まり、粘性有り
Ⅸ層　褐灰色土層　鉄分をやや多く含む　締まり、粘性有り
Ⅹ層　褐灰色土層　下層の暗灰砂質土をやや多く含む
Ⅺ層　暗灰色土層　砂質土を多く含む
Ⅻ層　灰白色土層

H区　標準堆積土層
Ⅰ層　暗褐色土層　耕作土　締まり、粘性なし
Ⅱ層　暗褐色土層　旧耕作土　締まり、粘性やや有り
Ⅲ層　暗褐色土層　As-B 軽石を若干含む　締まりあり、粘性有り
Ⅳ層　褐色土層　鉄分を若干含む
Ⅴ層　褐色土層　As-B 軽石下水田　締まり、粘性有り
Ⅵ層　黒色土層　As-B 軽石下水田　締まり、粘性有り　鉄分を若干含む
Ⅶ層　灰黄褐色土層　鉄分をやや多く含む　締まり、粘性有り
Ⅷ層　褐灰色土層

K区　標準堆積土層
Ⅰ層　暗褐色土層　耕作土　締まり、粘性なし
Ⅱ層　暗褐色土層　旧耕作土　締まり、粘性やや有り
Ⅲ層　暗褐色土層　As-B 軽石を僅かに含む　締まり、粘性やや有り
Ⅳ層　褐色土層　As-B 軽石をやや多く含む
Ⅴ層　褐色土層　As-B 軽石を多量に含む
Ⅵ層　褐色土層　As-B 軽石純層
Ⅶ層　黒色土層　As-B 軽石下水田　締まり、粘性有り
Ⅷ層　黒褐色土層
Ⅸ層　黒褐色土層　Hr-FA 軽石をブロック状に若干含む　鉄分を若干含む　締まり、粘性有り
Ⅹ層　黒色土層　Hr-FA 下水田　鉄分を若干含む　締まり、粘性有り
Ⅺ層　灰黄褐色土層　鉄分をやや多く含む　締まり、粘性有り
Ⅻ層　褐灰色土層
ⅩⅢ層　灰白色土層

第 4 図　標準堆積土層図

第４節　遺構と遺物

第１項　中世水田跡（第４・11図、表１）

本遺跡は利根川から東へ１kmの低地帯に位置し、調査区内の標準堆積土層断面に於いて、旧耕作土下に厚く堆積した利根川の洪水層と、これに覆われた中世水田跡が確認されている。この中世水田跡は、利根川が広瀬川低地帯から現流路に姿を変えた16C頃の洪水により埋没した水田で、周辺の後背湿地ではいくつかの同様な中世水田跡が調査されている。

調査区は西側からＧ区・Ｈ区・Ｋ区からなり、利根川に近いＧ区・Ｈ区で該期の水田を確認することができたが、Ｋ区からは確認することができなかった。

中世水田跡は褐色の鉄分を含む砂質土（Ⅲ層）によって被覆されたAs-B軽石を含む黒色粘質土面をもって捉えられている。Ｇ区の場合、残存状態の良いところで４cm程度、悪いところでは２cm程で調査区の中央やや西側から東端までのほぼ全域で水田が確認できるが、断続的で残りは悪く面的に畦・溝状遺構等の確認は行えていない。

Ｈ区も遺存状態はＧ区同様悪く、残りの良いところで５cm程度、悪い所で２cm程で調査区の西端から約1/3程度まで断面での確認は行えているものの、それ以東に水田の存在を確認することはできなかった。よって、畦・溝状遺構等についてもＧ区同様面的には検出されなかった。

このようにＧ区、Ｈ区ともに水田の存在は断面に於いて確認できたものの、洪水や後世の削平により水田の残存状態は非常に悪く、平面的に水田を捉えることは困難であった。

遺物はＧ区より内耳土鍋・擂鉢及び北宋銭『至和元寶』（1054年初鋳）等が僅かながら出土している。

第２項　As-B軽石下水田跡

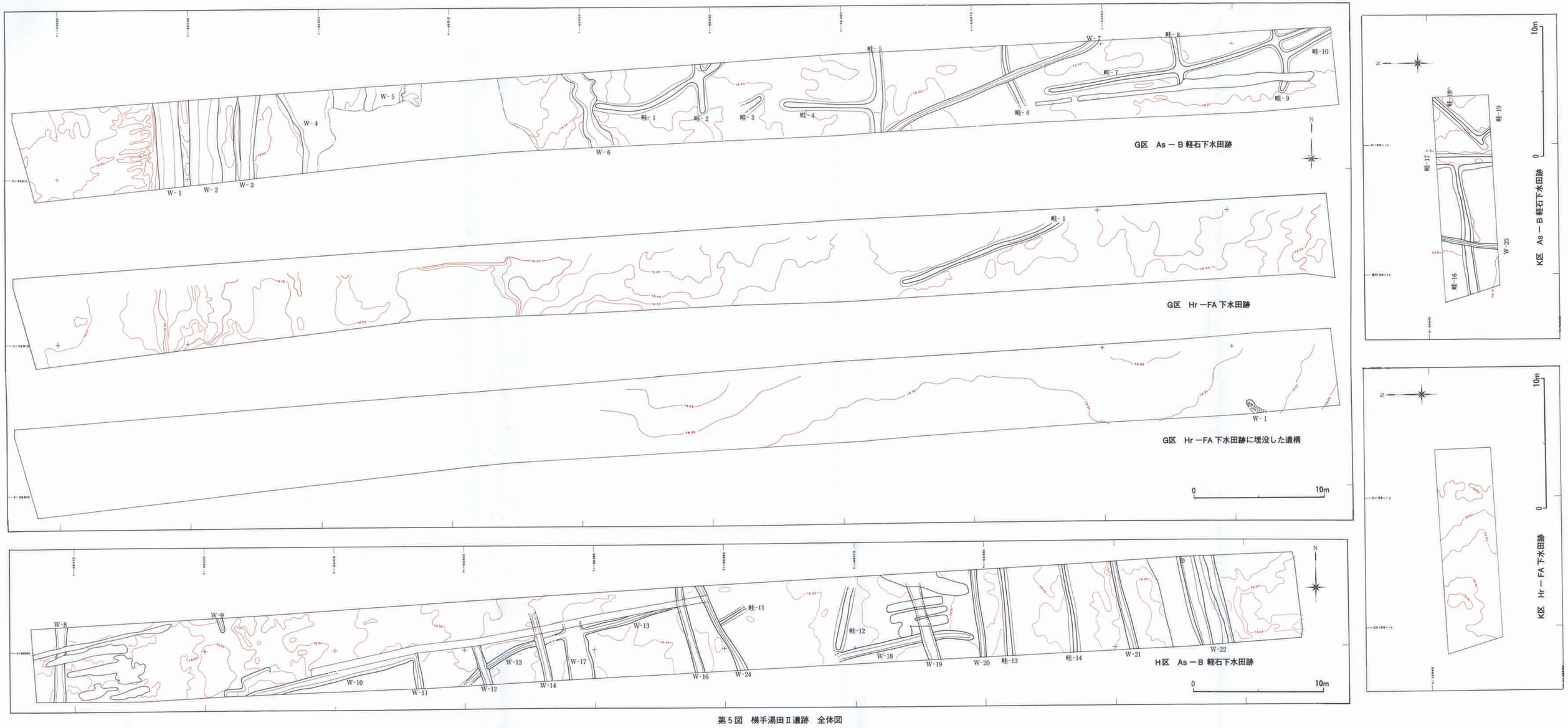
Ｇ　区（第５～７図）

本区のほぼ全面からAs-B軽石に埋没水田跡が検出された。調査区の中央やや西側部分は圃場整備前の河川跡が南北に走っており、水田面を破壊していた。また、東側にも現在の暗渠と思われる攪乱が東西に走っていた。畦は南北に走る幅60cmのものが５条、東西に走る幅70cmのものが５条検出され、いずれも調査区の中央から東側の水田面で確認されている。畦の高まりは遺存状態の良い所でも３cm程度で部分的に不明瞭な所もある。基本的に水田面と畦は黒色粘質土（Ⅵ層）であるが、東側で検出された水田面と畦は褐色粘質土（Ⅴ層）でその下層に黒色粘質土が堆積していた。水田面の標高は約78.55～78.80mあり北西から南東に緩やかに下る。水口は確認できなかったが、溝状遺構は調査区西側で５条、中央で１条確認されたが殆どAs-B軽石を埋土にもたないことから、水田跡より先行する時期のものと思われる。同時期に存在していたと思われるものは７号溝状遺構のみで、東西の畦とほぼ平行して走っている状況で検出された。後世に作られた溝状遺構は検出されなかった。また、足跡は人と思われるものがいくつか確認されているが、歩行の様子が把握できるものは検出できなかった。

遺物は土師器等の小破片が出土しているが本水田跡に伴う遺物は皆無であった。

Ｈ　区（第５・８～10図）

本区のほぼ全面からAs-B軽石に埋没した水田跡が検出された。Ｇ区同様、調査区西側は圃場整備前に存在していた農道跡や現在の暗渠等により水田面が破壊されていた。畦は調査区中央付近で検出され、南北に走る幅50～70cmのものが３条、東西に走る幅60cmのものが１条確認されている。畦の高さはわずかであっ



第５図　横手湯田Ⅱ遺跡　全体図

た。水田面は調査区全面にわたり黒色の粘質土（Ⅵ層）であるが、東側はＧ区同様上面に褐色粘質土が堆積していた。水田面の標高は約78.25～78.60mであり北西から南東に緩やかに下る。水口は確認できなかったが、溝状遺構は南北に走るものが10条、東西に走るものが３条確認された。これらの溝状遺構の殆どは砂質土とAs-B軽石の流れ込みを埋土に持つことからAs-B軽石下水田跡より後出的なものと思われる。

調査区西側を南北に走る８号溝状遺構は、As-B軽石純層を埋土に持つことから本水田跡に伴うものと思われる。一方、９号溝状遺構はAs-B軽石純層を切り込んで作られているため後世のものと思われる。

足跡は人と思われるものがいくつか確認されているが、歩行状況が把握できるものは検出されなかった。

遺物は土師器等の小破片が出土しているが本水田跡に伴う遺物は皆無であった。

Ｋ　区（第５・10図）

本区のほぼ全面から浅間Ｂ軽石層に埋没した水田跡が検出された。畦は調査区中央付近で南北に走る幅60cmのものが２条、東西に走る幅40cmのものが１条、幅90cmのものが１条検出されたが、高まりはわずかであった。水田面の標高は約78.05～78.20mであり北西から南東に緩やかに下る。水口は確認できなかったが溝状遺構は南北に走るものが1条確認され、As-B軽石層を切り込んでいたため本水田跡より後出的なものと思われる。足跡は人と思われるものがいくつか確認されているが、歩行状態の様子が把握できるものは検出されなかった。遺物については出土しなかった。

第３項　Hr-FA下水田跡

Ｇ　区（第５・10図）

Hr-FA下水田面は調査区中央から東側にかけて検出された。畦は調査区中央よりやや東側で東西に走る幅60cmのものが１条検出されたのみであった。高まりはわずかで遺存状態の良い所で４cm程度である。水田面の標高は約78.40～78.20mであり北西から南東に緩やかに下る。水口・溝状遺構については確認できなかった。遺物については皆無であった。

Ｈ　区

Hr-FA下水田面は調査区全面にわたり検出されなかった。

Ｋ　区（第５図）

Hr-FA下水田面は調査区全面で検出されたが、畦・溝状遺構等は一切検出できなかった。水田面は全体として平坦であるが南東方向に向かって緩やかに下る状況にあった。水口・足跡は確認できなかった。

遺物は出土しなかった。

第４項　Hr-FA下水田跡に埋没した遺構

Ｇ　区（第11図）

Hr-FA下水田跡の下層から溝状遺構１条（１号）・不明遺構２条（１・２号）が検出された。１号溝状遺構は調査区の東側でほぼ南北に走る状況で検出されている。幅55cm、深さ45cm程度で調査区の中央やや南側から掘り込まれ、南に向かって構築されていたようであるが、調査区が狭長のため長さ170cm程度確認できたに過ぎず、溝の全貌を明らかにすることはできなかった。出土遺物は皆無で白灰色土層を切り抜いて作られており、形状はＵ字状を呈していた。この溝状遺構の埋土は、最上部に後世のFA下水田土壌と同一の黒褐色粘土層と鉄分がやや多く含まれていることから、６Ｃ初頭以前の遺構と思われる。

不明遺構は調査区の中央と東側で共に調査区南壁の土層断面にて確認した。１号不明遺構は幅は70cm、

掘り込み60cmで1号溝状遺構同様断面形はU字状を呈している。上層にはHr-FA下水田土壌が堆積しており、当時の耕作によるものであろうか、不明遺構の埋土最上部にはFA下水田土壌が若干含まれる。遺物等の出土は皆無である。土層断面のみの遺構確認でプランについては不明であったため不明遺構とした。

2号不明遺構はHr-FA下水田跡の下から掘り込まれており、1号溝状遺構に上部を切りこまれた状況で、調査区南壁の土層断面で確認された。この遺構はHr-FA下水田面に覆われた遺構で、幅は110cm、掘り込みは90cmで白灰色土を切り込む状況で構築されていた。断面形状はV字状で底面が尖った薬研状をしており、最下部に黒色粘質土が堆積していた。プランは調査区南壁際で急速に立ち上がる。調査区南壁以南については調査対象区外であるためプランを確認することが不可能であった。

遺物等の出土は見られないことから遺構の性格を摑むことは困難であった。Hr-FA下水田面下であることから6C初頭以前の遺構と思われる。

第5節　まとめ

今回の調査で検出された水田は洪水層に覆われた中世水田跡、As-B軽石下水田跡、Hr-FA下水田跡、Hr-FA下水田跡に埋もれた溝状遺構、不明遺構である。

As-B軽石下水田跡は8C以降の律令制に基づく条里制地割りの影響を受けて1町（109m）方格の面積（1坪）を構成する大畦畔と交差する坪交点、条里交点からなる。本遺跡は調査区が狭長なため大畦畔等条里を想起させる遺構は検出されなかった。しかし、検出された畦がほぼ東西と南北に走っていること、お互いの畦が直交している部分も見受けられることを考慮すると条里制地割りの影響を少なからず受けているものと想定される。本遺跡が立地する前橋台地は端気川の影響で条里制地割り以降一大穀倉地帯へと変貌を遂げた地域であることは、周辺の鶴光路練引遺跡、西田遺跡、宮地中田遺跡等数多くのAs-B軽石下水田跡が検出されていることからも頷ける。

中世水田跡は利根川が変路した16C以降の洪水により埋没した水田で、上層には褐色の洪水層が厚く堆積していた。本遺跡は利根川の東約1kmに位置し、中世の洪水層に覆われた水田が比較的利根川に近いG区とH区から検出され、最も離れているK区からは検出されなかった。このことから洪水層の影響を受ける利根川沿岸では遺存状態こそ良くないが当時の水田耕作をうかがい知ることができたが、K区のように影響の少ない地域は、後世の鋤込み等により削平されていたため検出することができなかった。

今回の発掘調査は、調査範囲が限られていたため遺構の全貌を明らかにすることはできなかったものの、古代より中世にわたる時期に、前橋台地上の後背湿地に於いて広範囲におよぶ水田耕作が営まれていたことを追認する事となった。

表1　横手湯田Ⅱ遺跡・遺物観察表

遺構	遺物番号	器種	口径・器高・底径(cm)	遺存率	器形及び成・整形の特徴	①粘土②色調③焼成	出土位置
遺構外出土遺物	第11図1	石鏃	2.8・1.6・0.4・1.86g	完形	チャート製。		
	第11図2	土師器高坏	……・……・……	脚部のみ	脚部内面に絞り目。	①角閃、長石 ②明赤褐 ③酸化	
	第11図3	軟質陶器鉢	28.6 ……・……	破片		①砂粒 ②にぶい黄橙 ③酸化	
	第11図4	軟質陶器内耳鍋	26.2 ……・……	破片		①砂粒 ②灰白 ③還元	
	第11図5	すり鉢	……・……・……	破片		①砂粒 ②灰黄褐 ③還元	
	第11図6	銭貨銅		完存	至和元寶（順読）、初鋳造年1054年、北宋		

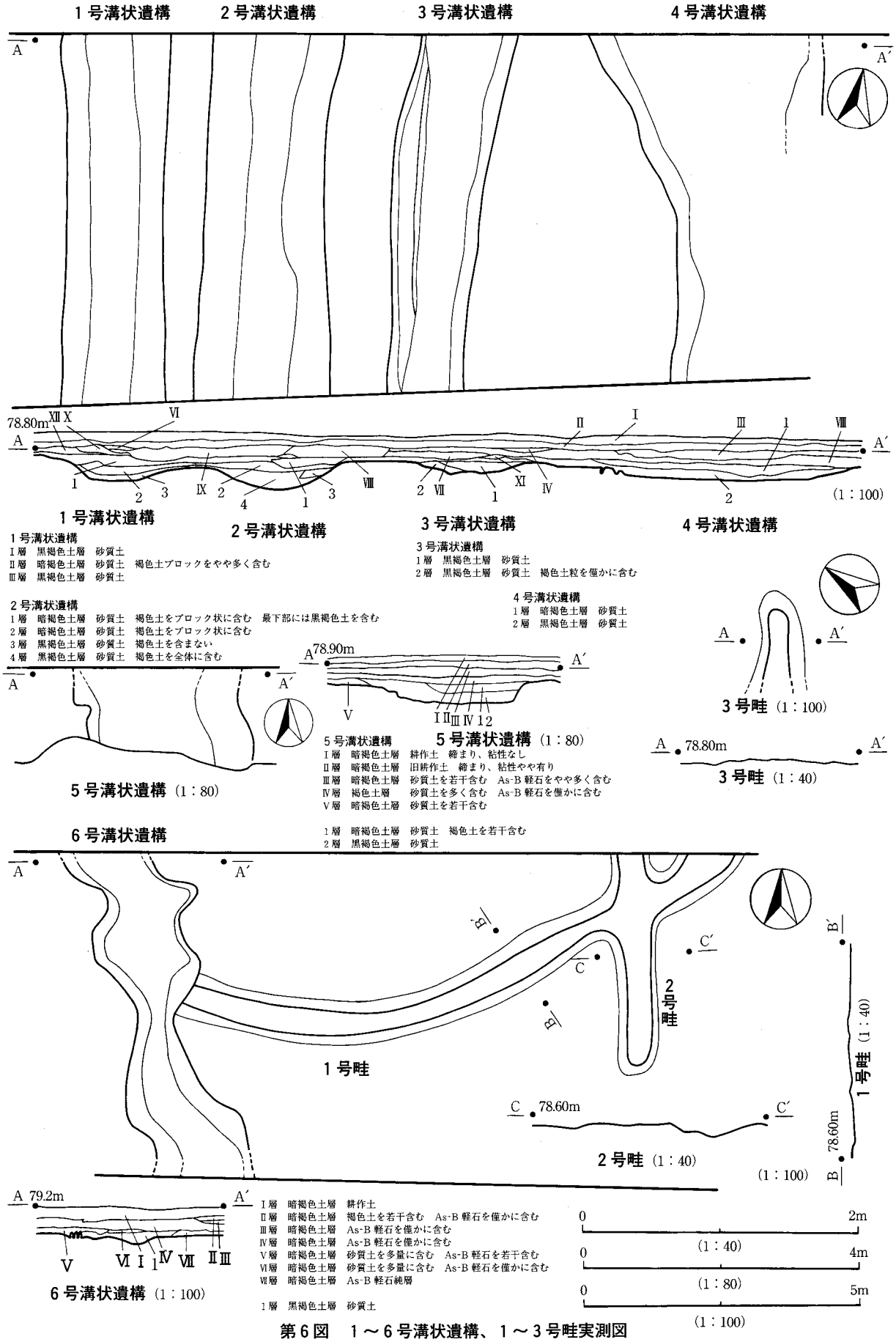
参考文献

1．梅沢重昭ほか1987　『日本の古代遺跡16　群馬県東部』

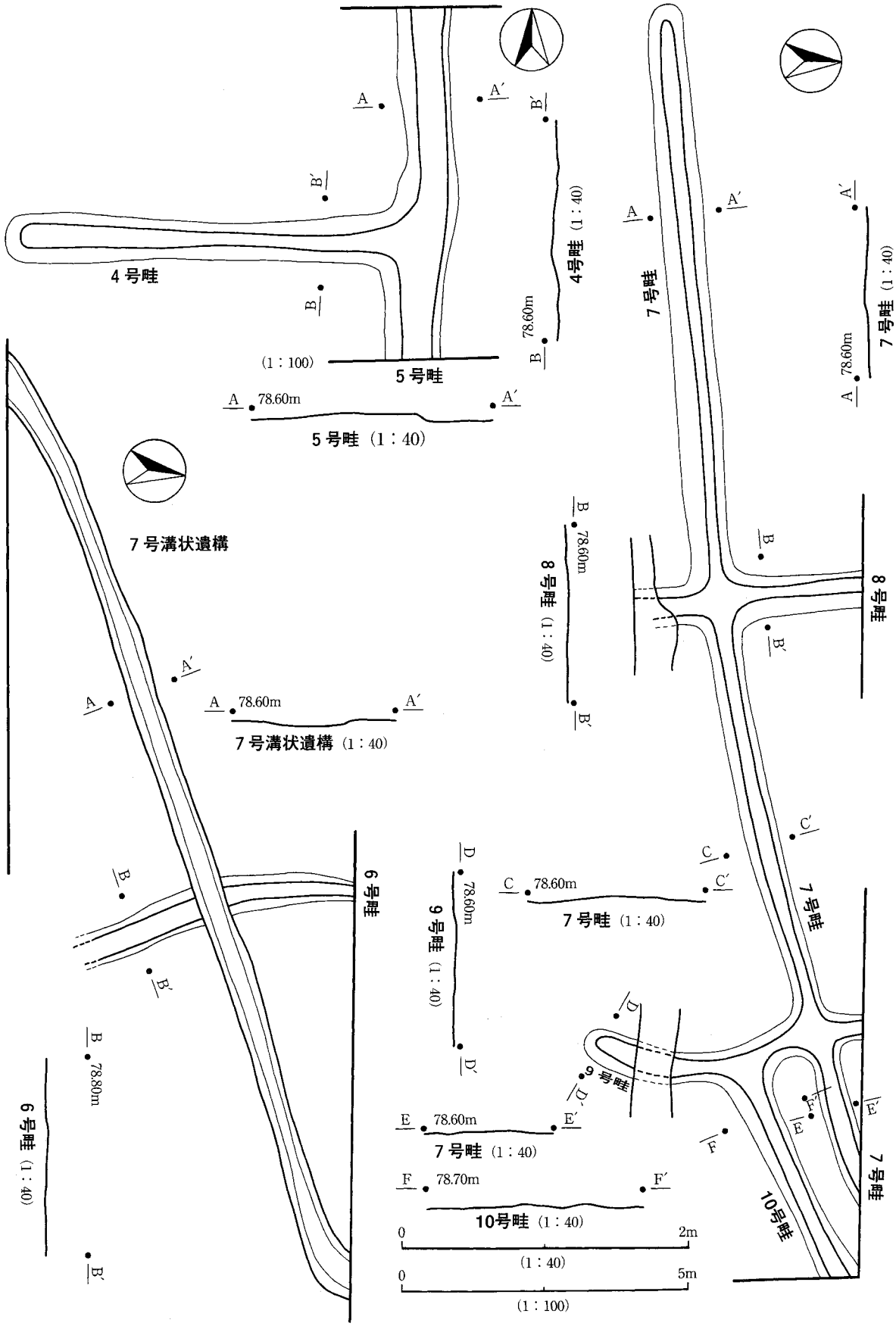
2．『群馬県史』通史編1・2

3．前橋市埋蔵文化財発掘調査団1996『西田遺跡』

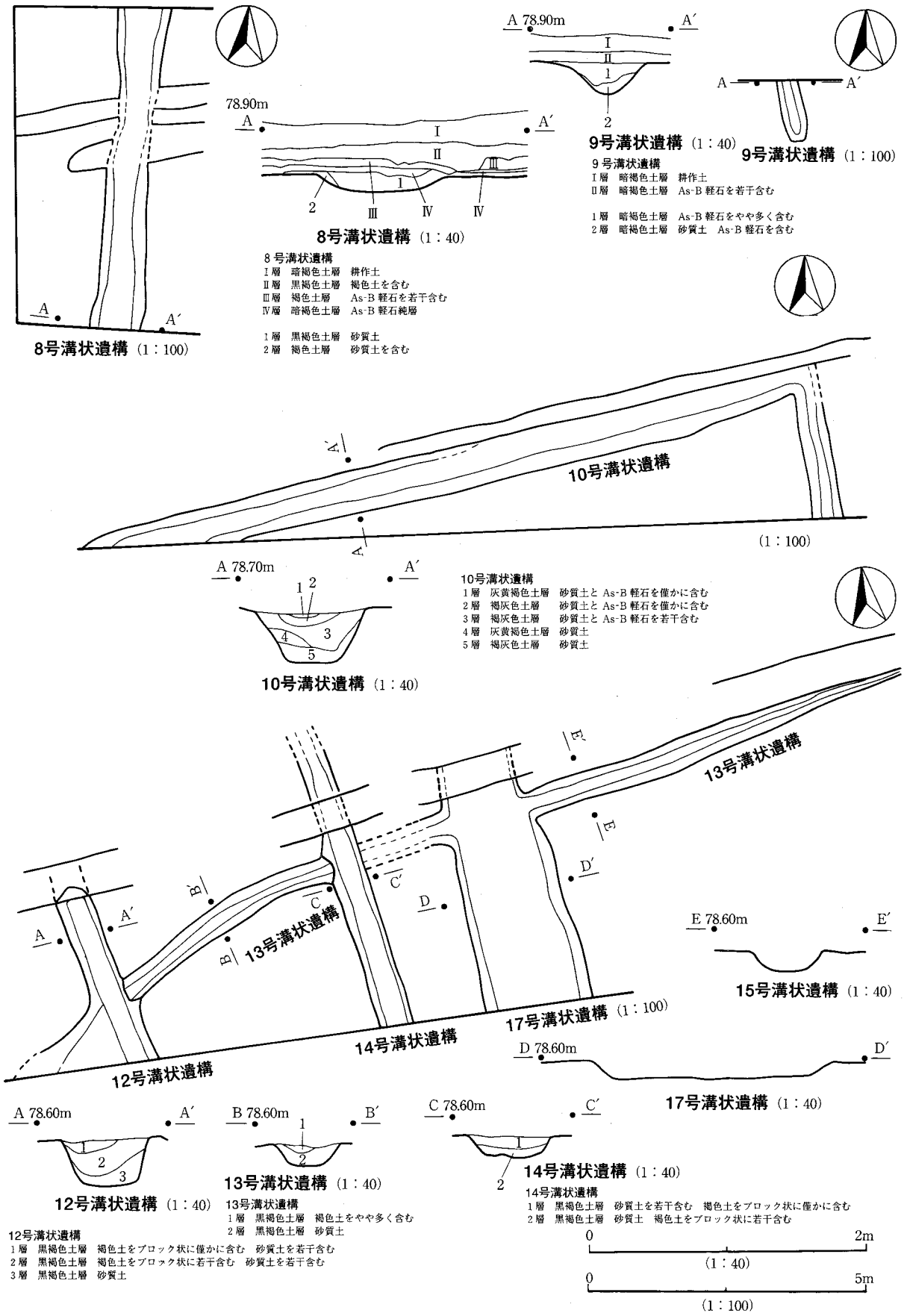
4．前橋市埋蔵文化財発掘調査団1996『宮地中田遺跡』



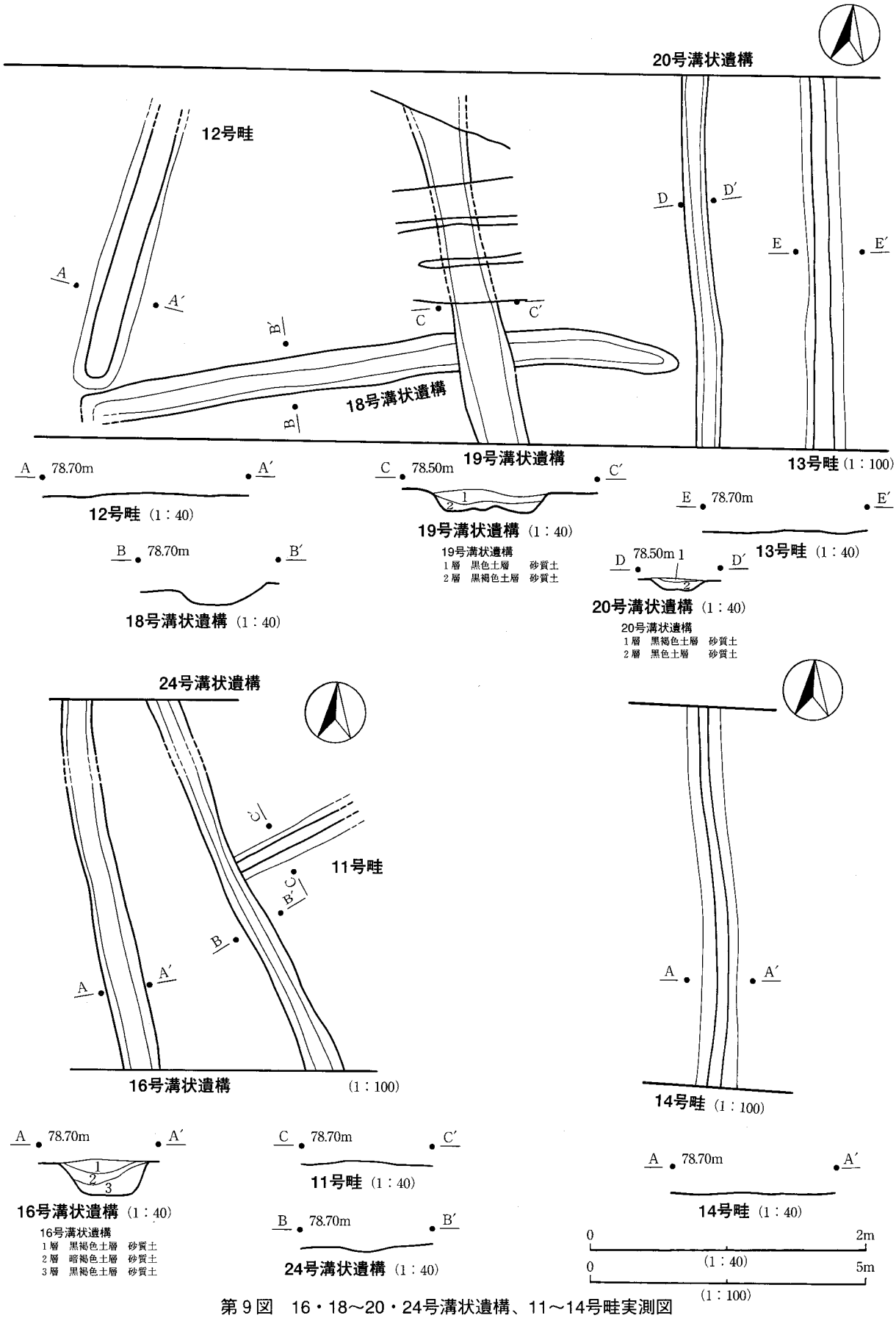
第6図　1～6号溝状遺構、1～3号畦実測図



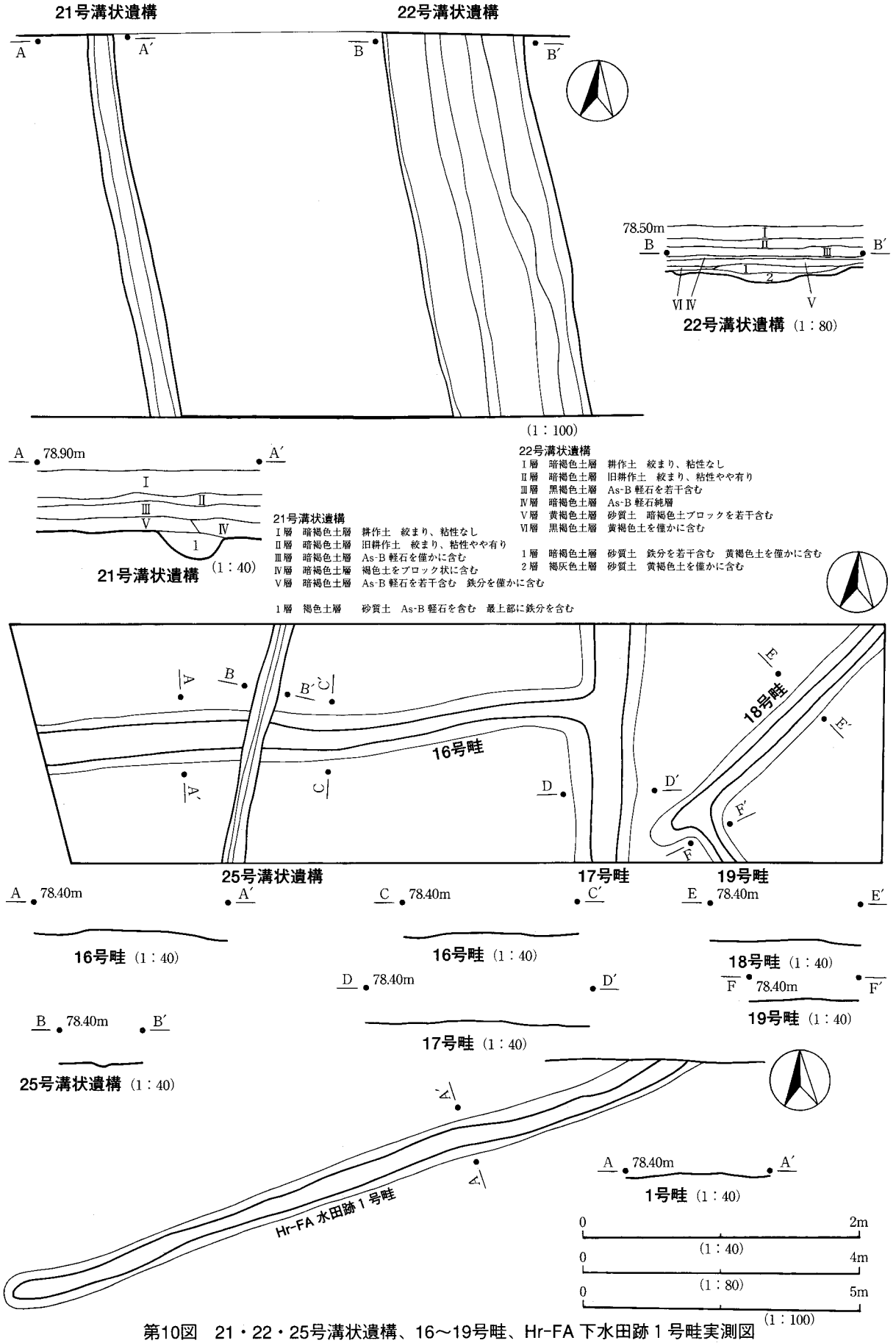
第７図　７号溝状遺構、４～10号畦実測図



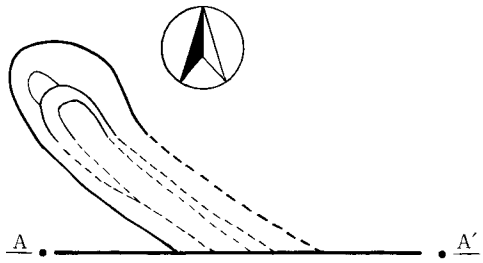
第８図　８～15・17号溝状遺構実測図



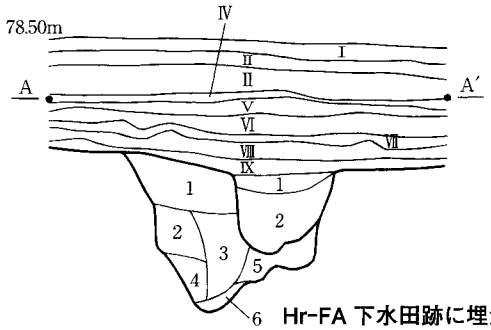
第９図　16・18～20・24号溝状遺構、11～14号畦実測図



第10図　21・22・25号溝状遺構、16～19号畦、Hr-FA 下水田跡1号畦実測図

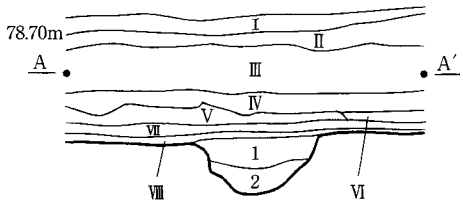


1号溝状遺構



Hr-FA 下水田跡に埋没した不明遺構
Hr-FA 下水田跡に埋没した溝状遺構

2号不明遺構
1層　灰褐色土層　鉄分を多量に含む　締まり、粘性有り
2層　灰褐色土層　鉄分を僅かに含む　締まり、粘性有り
3層　灰褐色土層　鉄分を若干含む　締まり、粘性有り
4層　灰褐色土層　シルトを僅かに含む　締まり、粘性有り
5層　黒色土層　シルトを若干含む　締まり、粘性有り
6層　黒色土層　締まり、粘性有り



Hr-FA 下水田跡に埋没した不明遺構

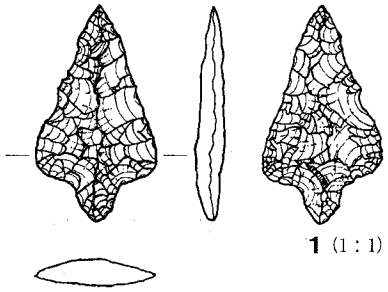
1号溝状遺構
Ⅰ層　暗褐色土層　耕作土　締まり、粘性なし
Ⅱ層　暗褐色土層　旧耕作土　締まり、粘性やや有り
Ⅲ層　黄褐色土層　As-B 軽石を多量に含む　最上部は旧耕作土が混入
Ⅳ層　褐色土層　As-B 軽石を多量に含む
Ⅴ層　暗褐色土層　As-B 軽石二次堆積
Ⅵ層　灰褐色土層　As-B 軽石純層
Ⅶ層　黒色土層　As-B 軽石下水田　締まり、粘性有り
Ⅷ層　灰黄褐色土層　Hr-FA 軽石を含む　鉄分を含む
Ⅸ層　黒褐色土層　Hr-FA 下水田　締まり、粘性有り

1層　黒褐色土層　鉄分を含む
2層　黒色土層　最上部に鉄分を含む

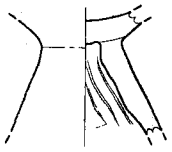
1号不明遺構
Ⅰ層　暗褐色土層　耕作土　締まり、粘性なし
Ⅱ層　暗褐色土層　旧耕作土　締まり、粘性やや有り
Ⅲ層　黄褐色土層　As-B 軽石を多量に含む　最上部は旧耕作土が混入
Ⅳ層　褐色土層　As-B 軽石純層
Ⅴ層　黒色土層　As-B 軽石下水田　締まり、粘性有り
Ⅵ層　褐色土層　As-B 軽石純層
Ⅶ層　褐灰色土層　Hr-FA 軽石を含む　鉄分を含む
Ⅷ層　黒色土層　Hr-FA 下水田　締まり、粘性有り

1層　灰黄褐色土層　鉄分をやや多く含む
2層　黒色土層　最上部に灰黄褐色土を若干含む

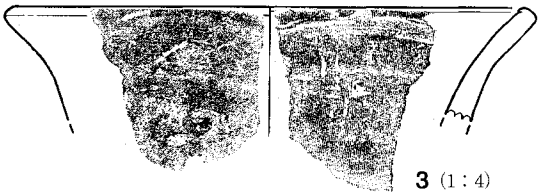
0　2m
(1：40)



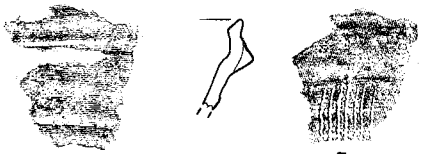
1 (1：1)



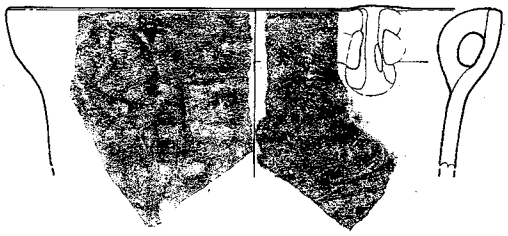
2



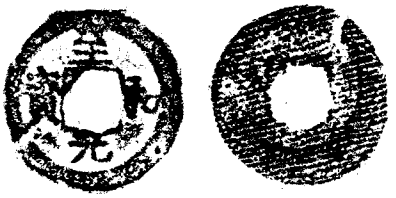
3 (1：4)



5



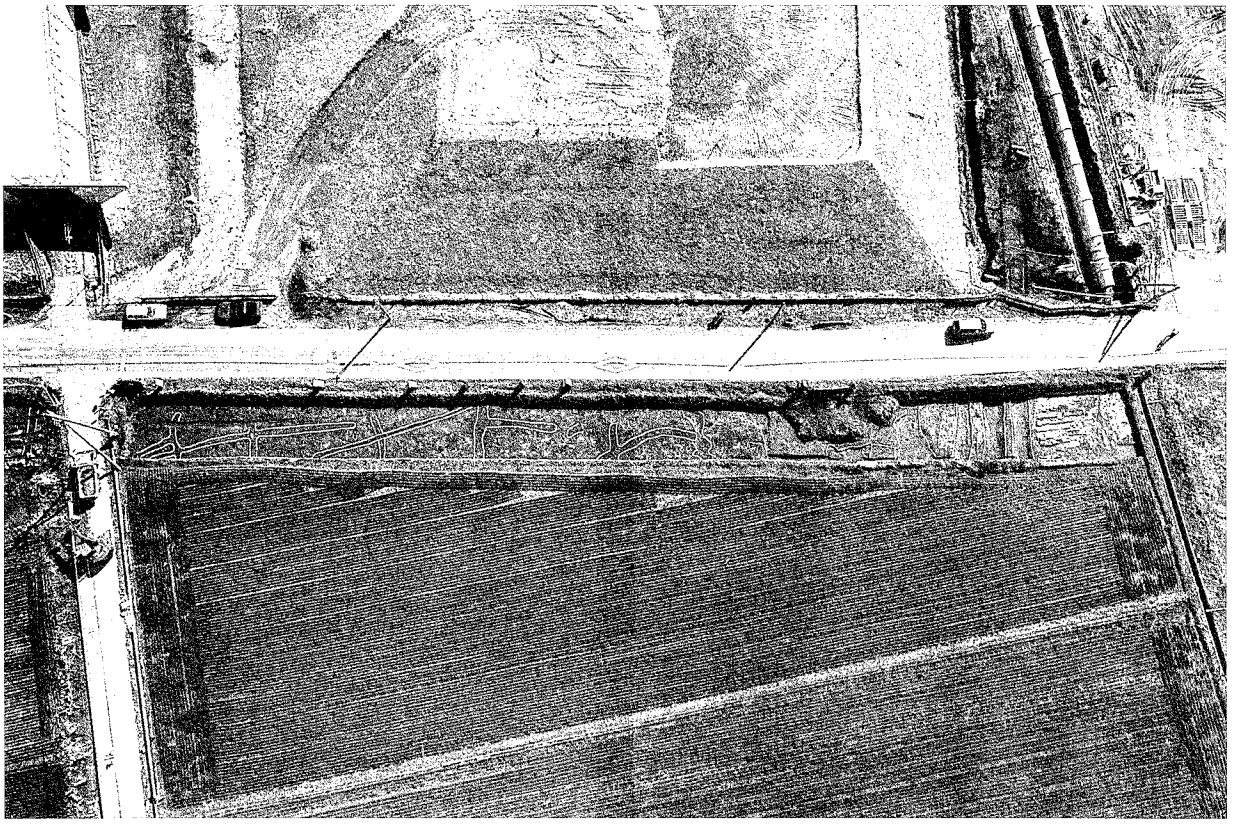
4 (1：4)



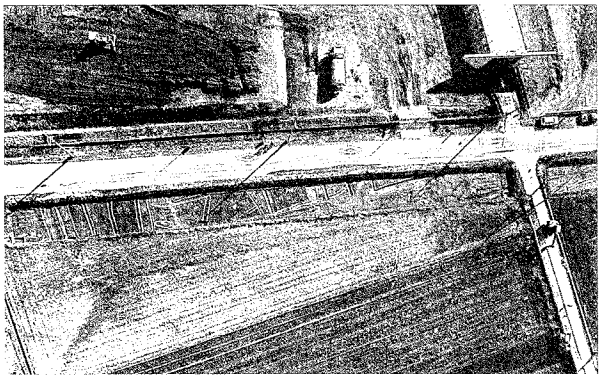
6 (1：1)

0　10cm
(1：3)

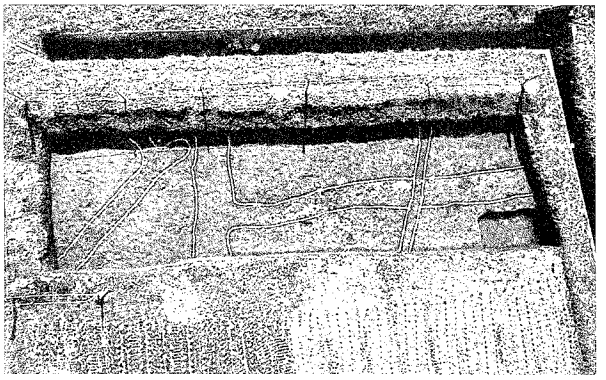
第11図　Hr-FA下水田跡に埋没した1号溝状遺構、不明遺構、遺構外出土遺物実測図



1．G区　As－B軽石下水田跡全景（上方から望む）

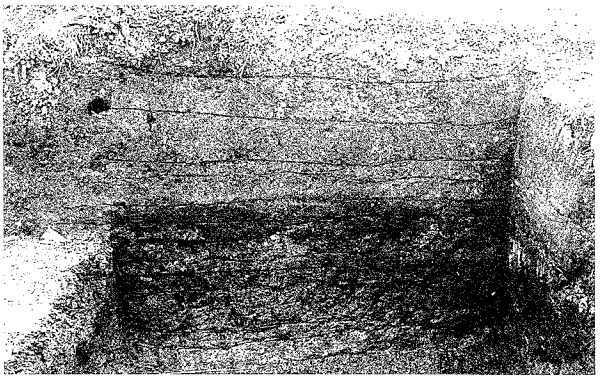


2．H区　As－B軽石下水田跡全景（上方から望む）



3．K区　As－B軽石下水田跡全景（上方から望む）

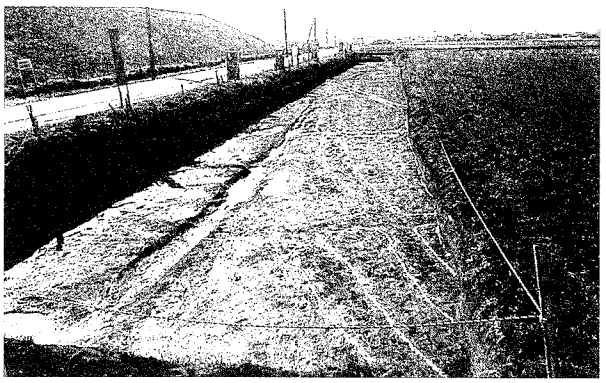
4．H区　標準堆積土層（南から望む）



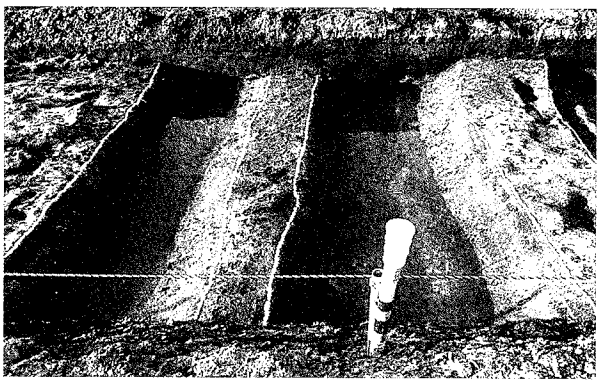
5．K区　標準堆積土層（南から望む）

横手湯田Ⅱ遺跡

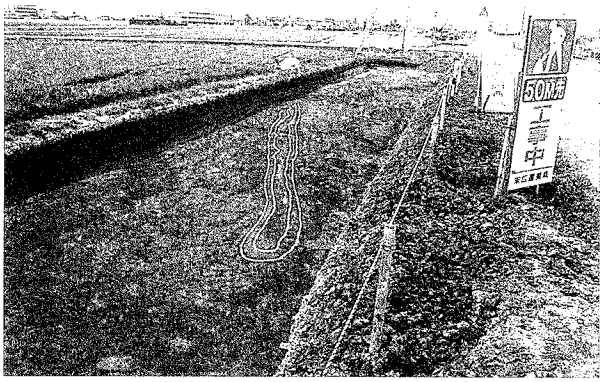
図版2　遺構・遺物写真



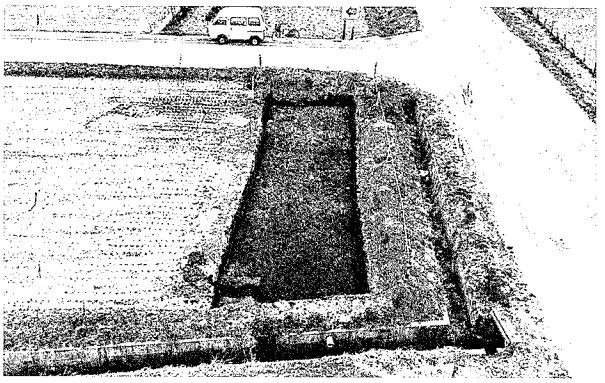
1．G区　As−B軽石下水田跡畦検出状況（南から望む）



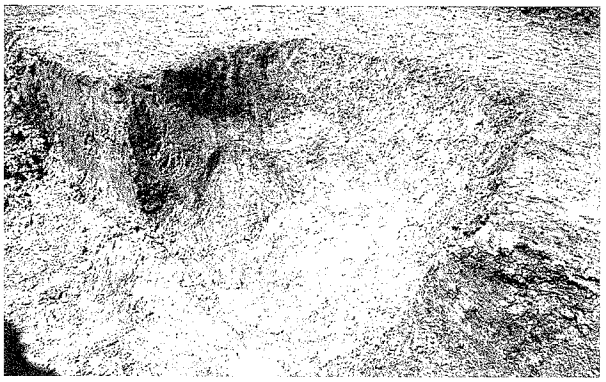
2．G区　As−B軽石下水田跡1号・2号溝状遺構全景（南から望む）



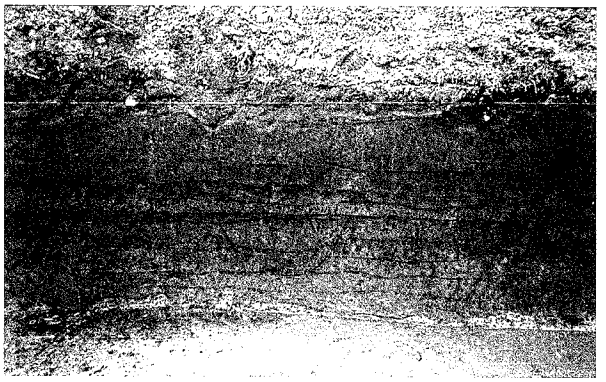
3．G区　Hr−FA下水田跡畦検出状況（西から望む）



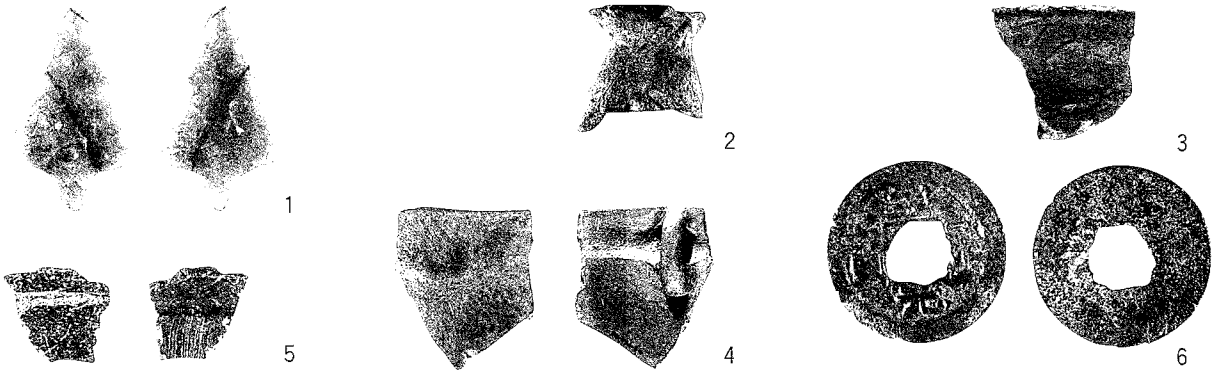
4．K区　Hr−FA下水田跡全景（西から望む）



5．G区　Hr−FA下水田跡に埋れた1号溝状遺構全景（南から望む）

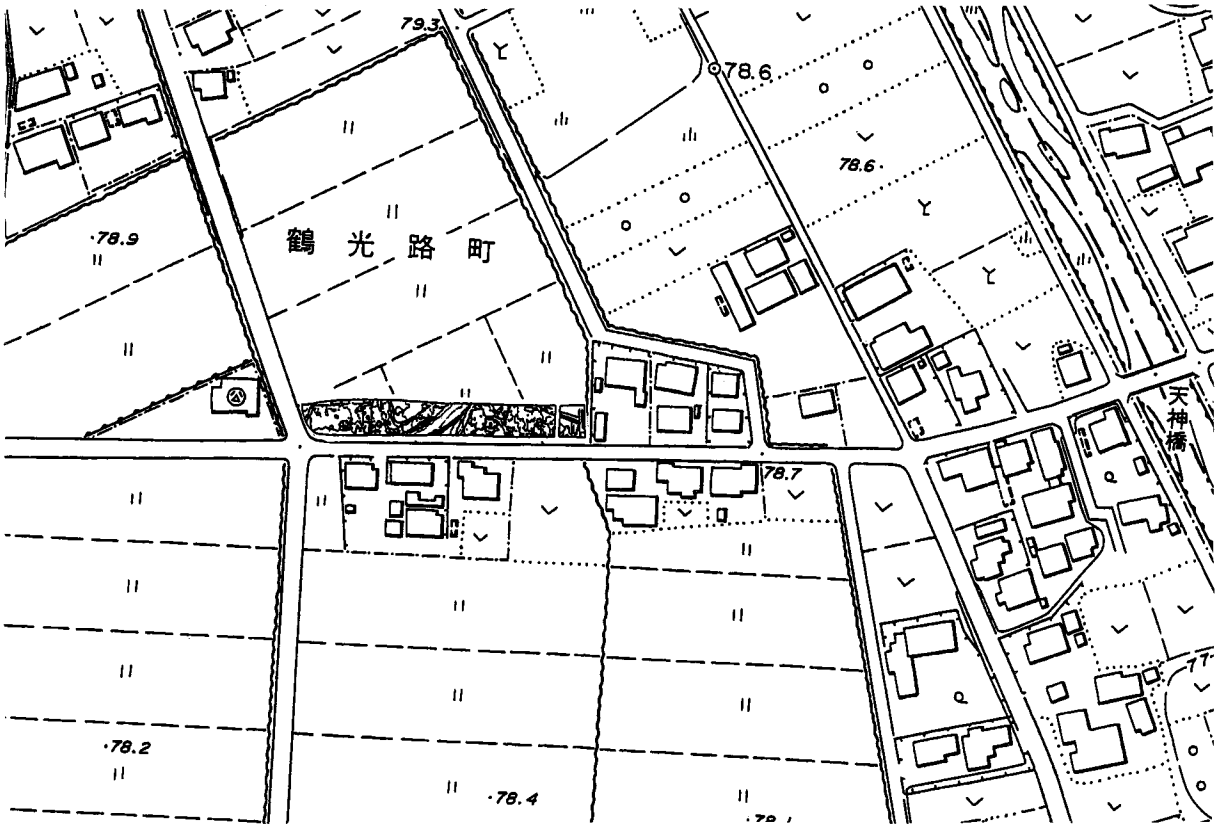


6．G区　Hr−FA下水田跡に埋れた1号不明遺構土層断面（北から望む）



7．遺構外出土遺物

第2章　西田Ⅱ遺跡



第12図　西田Ⅱ遺跡の調査区配置図（1：2,500）

第1節　調査の方法

遺跡は隣接する群馬県埋蔵文化財調査事業団の調査経過から、As-B下水田跡、平安時代の住居跡、As-C下水田跡が予測されていた。調査はAs-B軽石層の上面まで機械力によって掘り下げた後、人力で同層の掘り下げを行い、遺構の検出作業に取りかかった。その後、ローム層まで機械力で掘り下げて遺構の検出作業に取りかかった。尚、As-C下水田跡は面的に捉えることができなかった。

調査区の西端と東端にトレンチを設けAs-B下水田跡の下層に遺構が存在するかを確認すると共に、土層の堆積状態を観察した。

遺構の全体測量は航空測量を行い水準点は公共水準を用いた。個別の遺構は埋没状態の観察、記録を行ない、住居跡、竪穴状遺構、溝状遺構、土坑、ピットのセクション図、エレベーション図を1/20縮尺で作成した。

写真撮影は随時行い、白黒35mm、カラースライド35mm、カラー35mmの3種類を使用して行った。

第2節　調査の経過（日誌抄）

調査は、平成9年12月1日から平成10年3月25日まで実施した。

12月期

近隣が住宅地であるため、調査を開始するにあたり作業員の駐車場、事務所、トイレ、残土置場等の設定場所について検討した。また、調査区が民家の南側全面に及ぶこともあり生活通路を確保することも検討課題にしなければならなかった。さらに、作業員の駐車場については隣接する鶴光路公民館の空地を利用させて頂くこととした。事務所、トイレ、残土置場及び生活道路の確保については調査区を切り返すことで対応した。

調査はまず安全対策作業と平行して事務所、トイレを調査区内に設置することから始めた。その後、重機による表土除去作業を行い西側部分の調査から開始する。西側に設けた土層断面で層序を観察したところB軽石がわずかに堆積した下層から黒色土層のAs-B下水田跡と思われる層を確認する。ただちに検出作業に取りかかる。

1月期

As-B下水田跡と思われる遺構の検出作業を行うが、畦・溝等は確認できない。今期は2回にわたって大雪に見舞われ、調査は予定より大幅に遅れた。

2月期

As-B下水田跡を検出する中、南北に走る大型の溝を調査区の中央で検出する。また、As-B下水田跡の検出作業中から多量の土器片や焼土が調査区全面にわたり検出される。集落跡の可能性があるため、再度表土除去を行い遺構確認が可能であったローム層まで掘りさげて再調査を行う。

3月期

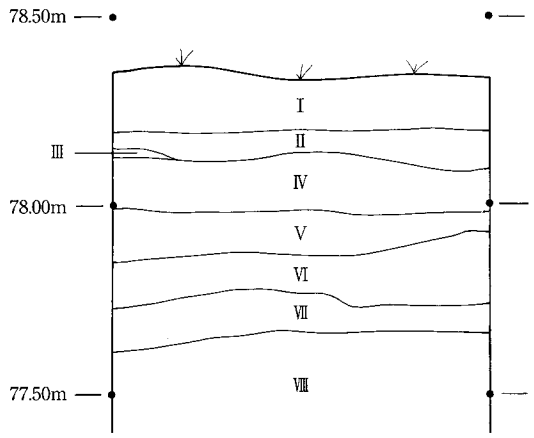
遺構検出作業を行った結果、住居跡10軒、竪穴状遺構5基、溝状遺構19条、土坑53基、柱穴72個を検出した。切り返し前の調査区について調査を終了する。引き続き切り返し後の表土除去を開始する。ローム層まで掘りさげて遺構を確認し検出作業に取りかかる。

3月25日埋め戻しを行い全ての調査を終了する。

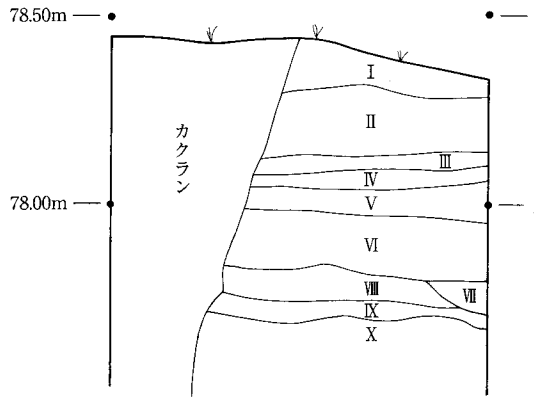
第３節　標準堆積土層

本遺跡は前橋台地の東端に位置している。この前橋台地は約２～2.5万年前の浅間山の火山活動によってつくられた岩屑や泥流物で形成されており、その後の榛名山、浅間山の噴火による軽石、火山灰が堆積し現在に至っている。本遺跡内の層序は場所により堆積状況が若干異なるが、基本的には下記の通りである。

遺構は、現耕作面から30cm のところに As-B 軽石下水田跡が、その下層から平安時代の集落跡が検出された。また調査区東端の土層断面から Hr-FA 下水田跡が検出されたが平面的に水田を捉えることはできなかった。



西側トレンチ
Ⅰ層 暗褐色土層　耕作土　絞まり、粘性なし
Ⅱ層 暗褐色土層　旧耕作土　絞まり、粘性ややあり
Ⅲ層 暗褐色土層　As-B 軽石純層
Ⅳ層 黒色土層　As-B 下水田耕作土層　絞まり、粘性あり
Ⅴ層 暗褐色土層　焼土、炭化物、鉄分を若干含む
Ⅵ層 褐灰色土層　鉄分を含む。
Ⅶ層 褐灰色土層
Ⅷ層 灰褐色シルト層



東側トレンチ
Ⅰ層 黒褐色土層 撹　乱
Ⅱ層 黒褐色土層 撹　乱
Ⅲ層 暗褐色土層 As-B 軽石をやや含む　鉄分を含む
Ⅳ層 暗褐色土層 As-B 軽石を多量に含む　鉄分を含む
Ⅴ層 黒色土層　As-B 下の水田耕作土　絞まり、粘性あり
Ⅵ層 褐色土層　軽石を僅かに含む　絞まり、粘性あり
Ⅶ層 黒色土層　水田耕作土　絞まり、粘性あり
Ⅷ層 暗褐色土層
Ⅸ層 暗褐色土層
Ⅹ層 灰黄褐色土層

第13図　標準堆積土層図

第４節　遺構と遺物

第１項　遺跡の概要

本遺跡では As-B 軽石下及びⅦ層上面で水田跡と思われる遺構と、ローム層上面で平安時代の集落が検出された。

第13図の標準堆積土層図で示した、西側地区のⅢ層及び東側地区のⅣ層で、As-B 軽石の堆積が確認されている。いずれも後世の鋤込み等による耕作で攪拌されていた。このために、面的に水田を検出することは不可能であったが、断続的にごくわずかに堆積したＢ軽石を取り除くとⅣ層の黒色土壌が現れる。この黒

色土層上面は極めて起伏が大きく、畦・溝状遺構等の水田跡に伴う施設についても検出されていない。さらに、掘り下げを進めて行く過程で、西側トレンチで示したⅤ層中には、9C後半～10C前半の土器片が西側地区の全面にわたり多量に出土した。以上のことを勘案すると、本遺跡はAs-B軽石降下時に水田跡として機能していた可能性は薄いものと判断される。一方で、やや粘性が不足するもののⅣ層の確認より、10C前半以降As-B軽石降下前までの間に水田として活用されていた可能性も否定できない。

Ⅶ層で確認された水田跡と思われる遺構は、調査区の東端トレンチで僅かに確認されたものである。黒色の粘質土が、粒径2mm程度の白色の軽石をわずかに含む黒褐色土によって覆われていた。(この軽石についてはAs-C軽石の可能性があるが未確認である。) 同遺構の範囲を確認するため、調査区内に東西・南北のトレンチを掘り確認を行ったが、水田跡と思われる土層の広がりは確認できなかった。遺構は調査区以東(調査区外) に広がっている可能性がある。

Ⅳ層の調査終了後ローム層上面まで掘り下げを行ったところ、平安時代の住居跡10軒、竪穴状遺構5基、土坑53基、溝状遺構19条、小ピット72基が全面にわたり検出された。出土した遺物には土師器、須恵器、灰釉陶器等の土器類と土錘等の土製品、砥石、敲き石、紡錘車等の石製品、刀子、釘、その他の鉄製品がある。

遺構は後世の攪乱により削平された部分が多く、全体的に掘り込みも浅く遺存状態は良好とは言えない。

第2項　住居跡

1号住居跡（第15・27図、表5、図版4－4、8）

本住居跡は、C・D－3・4グリッド内に位置する。他の遺構による攪乱が皆無でさらに、検出された住居跡の中で最も残存状況の良好な住居跡であるが、遺構の確認面はⅤ層上面であり残存状況が不良だったため、カマドを含む埋土を分層することはできなかった。平面形は隅丸の矩形で、規模は3.0m×2.5m、残存深度は10cm程度で、主軸方位はN96°Eである。

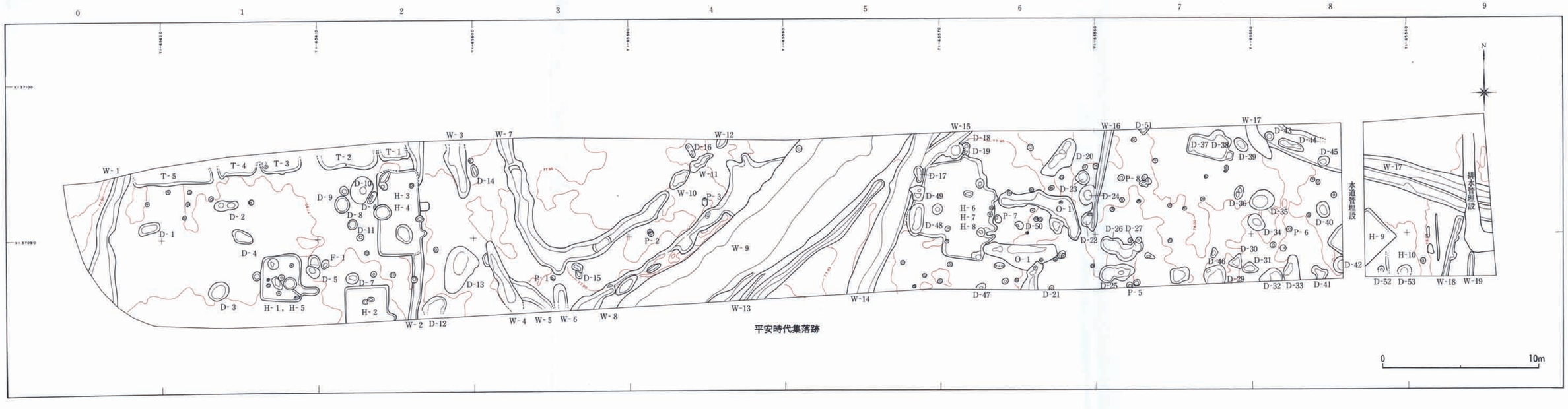
カマドは東壁の南東コーナー寄りに偏在し平面形は舌状を呈する。燃焼部床面は顕著であるが煙り出し部の焼土及び構造については不明瞭であった。袖の構築材は認められず、使用した痕跡をとどめていない状況である。貯蔵穴と思われる遺構は南東コーナー部に検出されたが、楕円形の浅い掘り込みで遺物は出土しなかった。住居跡の掘り方と思われる面で大小9本のピットを検出したが共に掘り込みが非常に浅く、用途を決定づけるだけの遺物出土も見られないことから使用目的を紐解くことはできなかった。

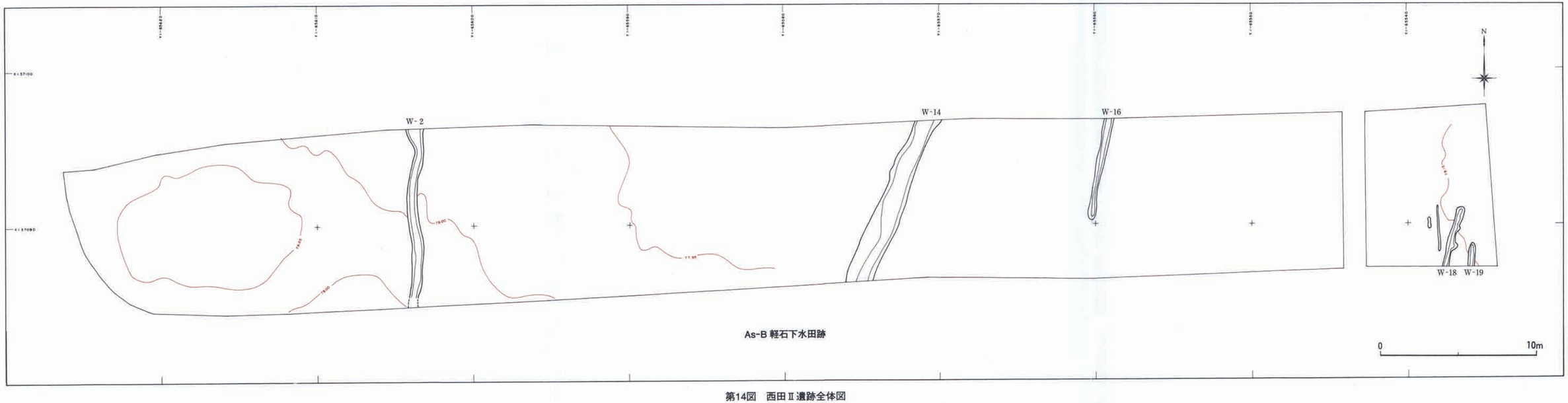
遺物については床面付近からわずかに出土しただけで、住居跡の時期の想定に直接働きかける遺物は少ないが、出土した須恵器高台坏等の特徴から9C後半と思われる。

2号住居跡（第15・27図、表5、図版4－5、8）

本住居跡はD－4・5グリッド内に位置する。住居跡南側は調査区南壁により遮断され検出できなかった。また、形態は北東、北西隅部が隅丸を呈していることから南東、南西隅についても隅丸状を呈しているものと思われる。規模は西壁沿いで2.29＋α m、東壁沿いで2.3＋α mで掘り込みは後世の削平によって深い所で7cm程度であり、主軸方位はN88°Eである。床面はほぼ平坦で掘り方を含めピットが2本検出された。住居跡の埋土は残存状況が悪く最下層部分しか検出されていないため、人為的に埋没したものなのか自然埋土であるかは判別することができなかった。

カマドは東壁の南寄りに偏在して設置されている。平面形は舌状で燃焼部底面がわずかに残っている程度で、その上面に甕の破片が潰された状況で検出された。この住居跡の時期を示している可能性が高く9C後半代が想定される。





第14図　西田Ⅱ遺跡全体図

3・4号住居跡（第15・27図、表5、図版4－6、8）

本住居跡はB－5・6、C－5・6グリッド内に位置する。3、4号住居跡は重複しており新旧関係については、セクションベルトを設け埋土の切り合い関係で確認を試みたが、1・2号住居跡と同様掘り込みが極端に浅く最下層のみしか確認できなかったため、新旧を見分けることができなかった。また床面についても削平されている為、高低差を検出することができなかった。さらに住居跡東壁沿いには後世の攪乱と思われる溝が南北に走り住居跡の床面を破壊している。このような状況のため3号住居跡の北壁、4号住居跡の南壁の位置を確認することはできないが、カマドの位置から両住居跡は中央やや南側で切り合っているものと思われる。また、形状は南西、北西隅部の形状からすれば隅丸方形と考えられるが、全体が方形なのか長方形なのかは不明である。ピットは両住居で5本検出したが規則性が見られないことから柱穴とは考えにくい。

カマドは上記でも述べた通り後世の攪乱により、3号住居跡はカマドの焚き口及び燃焼部が完全に削平されている。また、4号住居跡のカマドの焚き口部分は破壊を受けていたが、燃焼部は底面に焼土が僅かに検出された。また、両カマドとも底面近くまで削平されていたため煙道部の構造、袖部の補強材等の確認はできなかった。

遺物については、4号住居跡は型作り成形を施した土師器や須恵器坏の特長から9C後半のものと思われる。

5号住居跡（第17・27・28図、表5、図版4－6～8、8）

本住居跡は、C－3・4グリッド内に位置する。1号住居跡の確認面であるV層の直上をほぼ床面とするような状況でカマド跡が検出された。ほぼ1号住居跡の中央の覆土中で確認されている。カマド、遺物とも本遺跡では最も遺存状態が良く、遺物出土量は本遺構の中で最大である。本住居跡を覆っていたAs-B下水田跡の検出作業を行っている最中に偶然発見された遺構である。水田面検出作業の段階で本住居跡が埋没していると思われる付近及びその周辺からは数多くの土器片が出土していた。形状はAs-B軽石下水田跡の耕作等の影響によりほぼ床面まで削平されていたため住居跡の立上がり部分を確認することはできなかった。よって隣接する住居跡と同様の隅丸方形なのか長方形であるのかは不明である。明らかであることは1号住居跡よりも後出に構築された住居跡と言う事である。

カマド跡は残存状況から見て東壁側に設置されていたと思われ袖側壁は東西方向に走る。袖部の構築材には川原石を使用し、やや内傾させた状態で据えつけられていたと思われ、両袖にそれぞれ2個ずつ検出された。燃焼部の中央付近からは側面と上端面を加工して作った支脚石がほぼ直立する状態で検出されており、床面と思われる焼土、灰の堆積層から約2/5程度埋設した状態で確認されている。焼土は燃焼部から焚き口にかけて一面に広がり、その下層に灰が堆積している。特に灰は燃焼部奥と焚き口の堆積が顕著であった。

出土した遺物は、胴部中位に鍔を持つ特殊な甑が燃焼部の中央よりやや右袖側で出土している。また、燃焼部奥では器面を薄く削り、燃焼効率を向上させた土師質の甕が検出されている。さらに焚き口の周辺では須恵器高台坏が数点検出されている。

出土した遺物の特徴から本住居跡は10C前半のものと考えられる。

6・7・8号住居跡（第16・28図、表5、図版5－1・2、8・9）

本住居跡の位置はB・C－14・15グリッド内である。6・7・8号住居跡が重なり合う状況で検出されている。新旧関係は7号住居跡が最も新しく6、8号住居跡がそれに先行している状況である。調査当初の平面確認の段階では切り合い関係を確認することができず調査を進めて行く中、セクションベルトを設け土層断面で確認することとした。その中で7号住居跡については輪郭を確認することができたが、6・8号住居跡は輪郭すら判別できない状況であった。

形状はそれぞれの残存隅部が隅丸状を呈していることから隅丸方形と考えられる。規模は7号住居跡が南北側で3.4m、東西側で2.8m、8号住居跡は東西側で3.6mであるが南北側は不明である。これは、東西側の南壁が7号住居跡に切られていることと、6号住居跡の埋土を壁として築いているため確認できなかったことに起因する。6号住居跡の東西側は南壁東方を7号住居跡に切られているため確認はできなかったが、カマドの位置関係から4.5mと想定した。南北側は8号住居跡に切られていたため不明である。

貼床面はそれぞれの住居跡で確認されている。7号住居跡は東西、南北のセクションで検出されロームを混入させて踏み固められており床一面に広がっていた可能性が高い。6号住居跡の平面は南西部分が残存し床を貼った形跡が確認できた。やはり7号住居跡同様、ロームを混入させて踏み固めていた。8号住居跡は南北、東西セクションで検出できた南東部は7号住居跡に切られているため不明であった。床面は各住居跡ともほぼ同一レベルで形成されていた。

遺物は6・7号住居跡ではわずかであったが、8号住居跡はカマドを中心に数多くの土器片が出土し、その内容は灰釉陶器、須恵器高台坏、紡錘車、土錘等である。

出土遺物より8号住居跡は10C前半頃の所産と思われる。また、6号住居跡は9C後半頃、後出的な7号住居跡を10C前半頃に位置付けた。

9号住居跡（第17図、図版5－3・4）

本住居跡はC－20・21・D－21グリッド内に位置する。水道管が埋設されていたため住居跡のほぼ中央部分については調査を行うことができなかった。また、南東部の床面は後世の削平により殆ど掘り込みは確認できなかった。形状は北、西側が隅丸であることから隅丸方形の住居跡と思われる。規模は北東壁で2.54m、北西壁で3.4mで方位はN134°Eを測り他の住居跡と比較して主軸がずれている。

カマドは後世の攪乱により底面まで削平されており、燃焼部の焼土等は一切検出できなかった。

遺物はカマド内及び住居床面共に一切確認できなかったため、時期については判然としない。

10号住居跡（第17図、図版5－4）

本住居跡はC・D－21・22グリッド内に位置する。後世の削平により殆ど住居跡の掘り込みは確認できず9号住居跡よりもその影響が大きく西壁が約1m程残存している程度で大半が失われていた。また壁の残存状況は良好な所で8cmである。このように平面形状は殆ど確認できない状況であるカマドと思われる焼土跡が西壁から東方向に向かって2.7mの位置で確認されていることを考慮すると東カマドを持つ方形または長方形の住居跡である可能性が高く、隣接する9号住居跡と重複しているものと思われる。四隅の形状は判別できない状況であった。ピット等は住居内と思われる位置から2本検出されているが、遺物の出土等はまったく見られないことから用途について明らかにすることができなかった。

時期については9号住居跡同様、判然としない。

第3項　竪穴状遺構（第18図、表2、図版5－5～8、6－1、9）

今回の調査で5基検出された。遺構の大半が調査対象区域外であったため、全貌を摑むことができなかった。遺構は5基とも隣接する1～4号住居跡と同様、主軸方向をほぼ北方に向け東西方向に整列していた。発見当初住居跡との見方を強めていたが、検出作業を進めて行く過程でそれを裏付ける情報を得ることができなかったため竪穴状遺構とした。各遺構の概要については一覧表（表2）に記載したが、詳細については以下のとおりである。

位置は5基ともA－0～A－2グリッドまでの東西に細長い空間に収まる。1号と2号は重複しており、

それ以外の竪穴状遺構は狭いながらも間隔を保って検出された。３号竪穴状遺構は南西隅にピット状の掘り込みを検出したが用途については不明であった。１・２・４・５号からは検出されなかった。形状は前述のとおり、大半が調査区外であるため判然としないが、一辺が全て検出できた東西側の立ち上がりを見る限りではそれぞれ隅丸方形または長方形を呈しているものと思われる。埋土は５号以外は、全て単層で住居跡のように貼床等の踏み固めた形跡は認められなかったものの、焼土・炭化物を含んでいることから住居跡のようにカマド施設が存在していた可能性が考えられる。

遺物については１・４号からは一切検出されなかったが、３・５号からは出土量こそ少ないが須恵器の坏・甕、土師器甕等が検出されている。それに対し２号は９Ｃ後半を思わせる薄手の土師器甕を筆頭に土師器坏や須恵器坏、甕等が出土しており、その数は他の竪穴状遺構と比較すると圧倒的に多い。

第４項　土　坑（第19～22・29図、表３、図版６－２～５、９）

今回の調査では53基の土坑が検出された。その中には住居跡の柱穴や貯蔵穴と考えられるものもあり、集落廃絶後、水田開墾時に削り取られた可能性が高い。土坑は規則性を持たずに調査区全面にわたって検出されている。規模は長径、短径とも１ｍ前後、深さは削平されているため20cm 前後のものが多かった。

遺物が検出されたのは53基中11基のみで、大半の土坑は帰属時期を想定することができなかった。その中で際立って深い掘り込みをもつ24・34号土坑は最下部からは石田川式のＳ字状口縁台付甕の土器片等が検出された。また25号土坑からは８号住居跡と同形態の土錘が出土している。

尚、ここでは特徴的な24・34号のみの記述に留めすべてを一覧表（表３）に記載した。

24号土坑（第20・29図、表３、図版６－２、９）

調査区中央の６・７・８号住居跡の東側で検出された。規模は1.30m×1.04m＋αで東端は16号溝状遺構に切られていた。深さは0.76m で灰白色土を切り込んで作られていた。平面形状はほぼ円形で断面で見るとＹ字状を呈しており底面は平坦であった。最下層（４層）からは古墳時代前期の石田川式土器（Ｓ字状口縁台付甕の破片）が多数出土し、その中には口頸部内側に横位のハケ目が施してあり、Ｓ字状口縁台付甕の中でも先出的な要素を持つ。遺物より石田川期の遺構と思われる。

34号土坑（第21図、表３）

調査区東側の９号住居跡の西側で検出された。規模は1.18m×0.99m で、深さは0.88m と24号土坑同様掘り込みが深く灰白色土を切り込んで作られている。平面形状は円形で底面はほぼ平坦である。最下部からは古墳時代前期の石田川式土器（Ｓ字状口縁台付甕の破片）が出土した。24号土坑と類似点が多い。

第５項　溝状遺構（第23～26・29・30図、表４、図版６－６～８、７－１～７、10）

住居跡とほぼ同時期と思われる平安時代後期の溝状遺構から、旧耕作土を埋土に持つ近世の溝状遺構まで多様性に富む。今回の調査で検出された溝状遺構は19条で、東西に走る17号溝状遺構以外は全て南北に流れていた。なお、ここでは特徴的な９・17号を記述することとし、すべてを一覧表（表４）に記載した。

９号溝状遺構（第24・30図、表４、図版７－２～６、10）

調査区のほぼ中央を南北（N31°E）に流れる状況で検出された。規模は上幅が5.2m、下幅が2.0m、深さは0.85m を測る。長さは調査区が狭長なため17m を検出するに止まった。断面形状は台形を呈し、底部はほぼ平坦で両側の傾斜角度は20°前後と緩やかであった。溝状遺構の底面は南西端部に対し北西端部は20cm 程高い。よって本遺構は北東～南西に向かって緩やかに流れていたものと思われる。土層断面を見ると底面に

は砂質土が30cm 程度堆積しており水流があったことを物語っている。

遺物は最下層に位置する４層から５～15cm 程の礫と９Ｃ後半～10C 前半にかけて多量の土器片、馬歯が出土している。検出された土器片は、住居跡から出土した遺物と年代観が一致することから同時期に存在していた可能性が考えられ、溝状遺構と住居跡が密接に関わり合っていたことが推量される。

本遺構の東約150m には条里制地割り施行後、前橋台地を穀倉地帯へと変貌させた端気川が南北方向（N31°E）に走っている。本遺構を北東方向にそのまま延長させるならば約250m 先で端気川と鋭角に交わることから、本溝状遺構は端気川から分岐させた用水路である可能性が高いと考えられる。

17号溝状遺構（第26・30図、表４、図版７－７、10）

調査区の東側を東西（N74°E）に流れる。規模は上幅が1.8m、下幅が1.3m、深さは0.20m を測る。調査区内では全長15.7m を確認している。断面形状について西方はＵ字状を呈しているが東に行くにつれてＷ形となり溝の中央付近が僅かに高まった形状に変わる。底面には砂質土が厚く堆積し流水があったことを裏付けている。その上層に As-B 軽石の２次堆積と思われる層序が確認されたことから As-B 軽石降下後、間もないうちに溝としての機能を失ったものと思われる。

第６項　ピット（第22・29図、図版７－８、９）

調査区全面で72穴のピットが検出された。規模は長径、短径とも30cm 前後のものが多く、深さは深いものでも30cm 程度であった。まず掘立柱建物跡についての検討を行って見たが、規則性を確認することはできなかった。また４・５号ピットのように底部から須恵器坏の完形品が検出されていることから、住居跡に付随する遺構の可能性が考えられたが、後世の水田開墾時による削平でそれを確認する手立ては失われていた。９号溝状遺構の右岸土手部分からは溝状遺構側に傾けて掘り込まれたピットが検出された。地山面に対する傾斜角度は１号が28°、２号が31°、３号が39°で護岸用杭の可能性が考えられる。

第５節　まとめ

旧利根川流路（広瀬川低地帯）と、現利根川に挟まれた広大な後背湿地に本遺跡は立地している。この地域は旧石器、縄文時代から弥生時代頃までの間、周辺河川に伴う洪水等の影響で湿地帯が形成され人々が生活するには厳しい環境のようであった。

古墳時代は前段階の時代から比較すれば、人々が生活していた痕跡が過去の発掘調査からうかがい知ることができる。石田川期には、後閑団地遺跡、東田遺跡、徳丸仲田遺跡等で集落が確認されている。続く和泉期の遺構は未確認であるが、鬼高期で後閑Ⅱ遺跡、川曲遺跡で集落等が確認されている。広域に人間生活が営まれていたことを裏付けるには情報量に乏しい。

奈良時代になると本地域の北端部、南端部を中心に遺跡の分布が見られる。北端部は現利根川の自然堤防縁辺部を中心に後閑団地遺跡、後閑Ⅱ遺跡が、南端部は旧利根川流路（広瀬川低地帯）の自然堤防縁辺部に神人村Ⅱ遺跡、柄田添遺跡の集落等が誕生する。この集落は８Ｃ以降の律令制に基づく条里制地割り以降平安時代にかけて集落を展開させていく。

本遺跡で特筆すべき点は、住居跡と９号溝状遺構さらに As-B 軽石下水田跡との関わり合いである。

調査区の中央には９号溝状遺構が南北に走る。住居跡はその西側で５軒、東側で５軒それぞれ検出されている。これらの住居跡は９号住居跡を除き主軸方向をすべて北に向けており、出土している遺物を見ても

10C を前後する時期に収まることから、ほぼ同時期に存在していた住居跡と思われる。9号溝状遺構はそれらの住居跡を分断するかのように構築されており、溝底面には、かつて豊富な流水があったことを物語るかのように砂質土（3・4層）が30cm 前後堆積していた。この砂質土中には住居跡と同一時期（10C を前後する時期）のものと思われる土器片が多量に含まれ、さらに礫と馬歯が加わり土器片と折り重なるような状況で検出された。これらの遺物は溝の底面全域ではなく、南西端の限られた場所で検出されていることから、ある一定の場所で何らかの祭祀が住居跡で生活していた人々の手により行われていたとも考えられる。

構築年代については、住居跡と9号溝状遺構が互いに切り合っていないため、新旧関係を明らかにすることはできないが、いずれにしてもさほど時間差を持たずに構築され、ほぼ同時期に機能していたものと思われる。

その後、この溝は急速に機能を失ったようで流水があったと思われる砂質層の上層には、黒色粘性土（1・2層）が60cm 程度堆積し完全に溝を埋めつくしていた。この層には住居跡に伴う10C 前後の遺物はおろか、後出する時代の遺物等も一切含まれていないことから、住居跡が廃絶したと思われる10C 前半には流水を失い、以後完全に埋没してしまったものと思われる。

このことから、住居跡と9号溝状遺構が殆ど同時期に存在し廃絶していった過程が読み取れ、人々が生活していく上で密接に関わっていたものと推量される。

As-B 軽石下水田跡は、10C 前半頃に廃絶した住居跡、溝状遺構が完全に埋没した後に開墾されたものと思われる。通常、溝状遺構は水田跡に伴う施設との見方が一般的である。また、端気川から取水している可能性が高いことなどから条里制地割りとの関係も否定できない。しかし、9号溝状遺構の堆積土層をみるとⅢ層の As-B 軽石純層の下層に位置するⅤ層が水田耕作土に当たり、この時、溝はすでに完全に埋没している。このことから、As-B 軽石下水田跡は9号溝状遺構よりも後出と言うことになる。さらにⅥ層の堆積を待たなければならないことから、溝が埋没してから水田跡の開墾が始まるまでにはある一定の時間が経過しているものと思われる。

この As-B 軽石下水田跡は起伏が激しく粘性に欠け、畦、溝状遺構等の水田跡に関わる施設については皆無で、プラスチック、ビニール等の現代遺物の混入が見られた。Ⅲ層の上層（Ⅱ層）には旧耕作土が堆積していることからも、近現代の水田耕作により本水田跡が破壊されてしまった可能性が高く、当時の面影を復元することはできなかった。

周辺遺跡には鶴光路練引遺跡、西田遺跡、宮地中田遺跡等、条里制地割りに基づいて作られたと思われる当時の水田跡が軒を並べて検出されており、旧利根川（広瀬川低地帯）が作り上げた後背湿地に、本水田跡が一面に広がっていたことを想起させる。

今回の調査で検出された住居跡と溝状遺構さらに水田跡との関係から、周辺にも同様の集落跡、水田跡が展開しているものと思われる。今後、周辺遺跡を調査する事により本遺跡との関わり合いが明らかにされる事を期待したい。

参考文献

梅沢重昭ほか　1987　『日本の古代遺跡16　群馬県東部』

『群馬県史』通史編1・2

前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1996『西田遺跡』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1996『宮地中田遺跡』

表2　竪穴状遺構一覧表

遺構名	位　置	規模（m）東西	南　北	壁　高	主軸方向	遺物出土状況
T－1	A 2	2.00	1.01+α	0.26	N85° E	遺物なし
T－2	A 2	3.83	1.48+α	0.34	N85° E	薄手の土師器甕、須恵器の坏と甕、土師器の坏。
T－3	A 1	2.48	1.30+α	0.26	N86° E	ピットを南西隅に検出。須恵器坏、甕　土錘。
T－4	A 1	2.52	1.29+α	0.16	N86° E	遺物なし
T－5	A 0	5.10	1.51+α	0.31	N88° E	須恵器坏、甕、蓋。土師器甕。

表3　土坑一覧表

遺構名	位置	形　状	規模(cm)長径×短径×深さ	備　　考
D－1	A 0	楕円形	1.38× 0.72 ×0.17	遺物出土なし
D－2	A 1	楕円形	1.58× 0.66 ×0.17	遺物出土なし
D－3	B 1	円　形	1.23× 1.23 ×0.29	遺物出土なし
D－4	A 1	楕円形	1.42× 0.84 ×0.18	遺物出土なし
D－5	B 1	楕円形	1.44× 0.88 ×0.18	遺物出土なし
D－6	A 2	楕円形	0.90× 0.40 ×0.12	遺物出土なし
D－7	B 2	円　形	0.86× 0.80 ×0.20	遺物出土なし
D－8	A 2	円　形	1.08× 0.96 ×0.10	遺物出土なし
D－9	A 2	円　形	0.52× 0.52 ×0.07	遺物出土なし
D－10	A 2	楕円形	1.82× 1.38 ×0.24	遺物出土なし
D－11	A 2	円　形	0.60× 0.60 ×0.11	遺物出土なし
D－12	B 2	楕円形	1.54+α × 1.22 ×0.27	遺物出土なし
D－13	B 2	楕円形	3.08× 1.84 ×0.40	須恵器の坏、土師器の甕が出土
D－14	A 2	楕円形	0.84× 0.44 ×0.07	遺物出土なし
D－15	B 3	楕円形	0.96× 0.76 ×0.15	遺物出土なし
D－16	A 4	楕円形	0.92× 0.32 ×0.19	遺物出土なし
D－17	A 5	楕円形	1.14× 0.56 ×0.16	遺物出土なし
D－18	A 6	円　形	0.99× 0.90 ×0.16	遺物出土なし
D－19	A 6	円　形	0.40× 0.52 ×0.24	遺物出土なし
D－20	A 6	楕円形	2.98× 1.22 ×0.55	遺物出土なし
D－21	B 6	楕円形	1.12×1.82+α ×0.58	遺物出土なし
D－22	A 6	楕円形	0.96× 0.72 ×0.18	遺物出土なし
D－23	A 6	円　形	0.96× 0.89 ×0.10	遺物出土なし
D－24	A 6	円　形	1.30×1.04+α ×0.76	最下部にS字口縁台付甕出土、最上部に須恵器坏出土
D－25	B 7	楕円形	2.26× 1.12 ×0.25	須恵器の坏、土師器の甕、坏、土製品の土錘が出土
D－26	B 7	楕円形	2.35× 0.98 ×0.19	遺物出土なし
D－27	B 7	楕円形	0.74×0.70+α ×0.08	須恵器の甕、土師器の甕、坏が出土
D－28	B 7	楕円形	1.28× 0.96 ×0.16	遺物出土なし
D－29	B 7	楕円形	1.42×1.22+α ×0.23	須恵器の坏、土師器の甕、坏が出土
D－30	B 7	楕円形	0.92× 0.78 ×0.12	遺物出土なし
D－31	B 7	楕円形	1.04× 0.70 ×0.08	遺物出土なし
D－32	B 8	楕円形	1.50× 0.86 ×0.21	遺物出土なし
D－33	B 8	楕円形	1.56× 1.00 ×0.25	須恵器の甕、坏、土師器の甕、坏が出土
D－34	A 7	楕円形	1.18× 0.99 ×0.88	石田川期のS字口縁台付甕と高坏を出土
D－35	A 7	円　形	1.56× 1.40 ×0.23	須恵器の甕、坏、土師器の台付甕が出土
D－36	A 7	楕円形	0.94× 0.50 ×0.10	遺物出土なし
D－37	A 7	隅丸長方形	3.02× 1.28 ×0.38	須恵器の甕、坏、土師器の甕、坏が出土
D－38	A 7	楕円形	1.50× 0.55 ×0.26	遺物出土なし
D－39	A 7	楕円形	0.96× 0.64 ×0.23	須恵器の甕、甑、坏、土師器の甕、台付甕、坏が出土
D－40	A 8	楕円形	1.08× 0.79 ×0.11	遺物出土なし
D－41	B 8	楕円形	1.02×0.62+α ×0.88	遺物出土なし
D－42	B 8	円　形	1.04×0.66+α ×0.10	遺物出土なし
D－43	A 8	円　形	0.54× 0.60 ×0.14	遺物出土なし
D－44	A 8	楕円形	1.64× 0.54 ×0.14	遺物出土なし
D－45	A 8	楕円形	0.70× 0.60 ×0.34	遺物出土なし
D－46	B 7	楕円形	0.70× 0.36 ×0.19	遺物出土なし
D－47	B 6	楕円形	0.60×0.36+α ×0.25	須恵器の甕、坏、土師器の甕が出土
D－48	A 5	楕円形	1.96× 1.04 ×0.22	遺物出土なし
D－49	A 5	楕円形	1.00× 0.92 ×0.57	遺物出土なし
D－50	A 6	楕円形	0.54× 0.36 ×0.14	遺物出土なし
D－51	A 7	楕円形	0.24+α ×0.20+α ×0.08	遺物出土なし
D－52	B 8	楕円形	0.68+α × 0.38 ×0.26	遺物出土なし
D－53	B 8	楕円形	0.96+α × 0.76 ×0.41	遺物出土なし

表4　溝状遺構一覧表

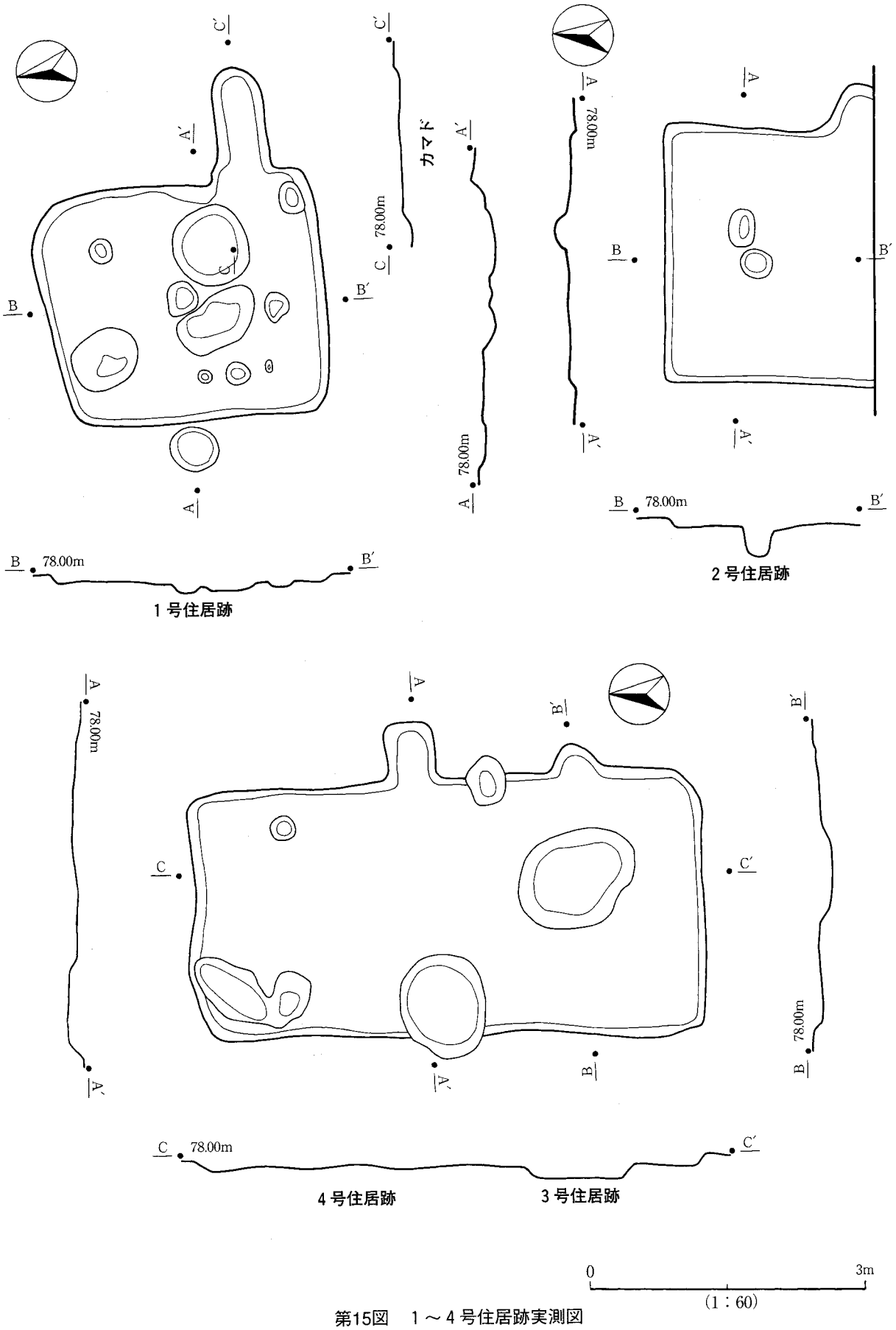
遺構名	位　置	方　位	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)	長さ(m)	備　　考
W－1	A 0	N15° E	1.70	1.12	0.33	7.60+α	
W－2	A 2	N 2° E	0.56	0.29	0.19	11.36+α	H－3、4の東側を切り込む。近世
W－3	A 2	N10° W	1.42	0.86	0.39	3.60+α	
W－4	B 3	N23° W	1.12	0.54	0.58	5.10+α	W－5と交わる。
W－5	B 3	N66° W	1.04	0.76	0.18	2.70+α	W－4、6と交わる。
W－6	B 3	N 0° E	0.86	0.45	0.35	1.70+α	W－5と交わる。
W－7	A 3	N49° E	1.08	0.60	0.50	22.70+α	U字状で北西方は土坑状に断続する。
W－8	A 4	N51° E	0.96	0.56	0.15	15.00+α	W－9の右岸に隣接して平行に走る。
W－9	A 4	N51° W	5.20	2.00	0.85	17.00+α	底面に礫、土器片、馬歯が多量に出土。
W－10	A 4						
W－11	A 4						
W－12	A 4						
W－13	A 5	N48° E	0.76	0.20	0.20	11.30+α	W－9の左岸に隣接して平行に走る。
W－14	A 5	N24° E	1.68	1.20	0.21	11.10+α	W－15と交わる。近世の溝
W－15	A 5	N51° E	0.82	0.55	0.21	3.10+α	D－18に切られる。W－15と交わる
W－16	A 6	N12° E	0.50	0.25	0.13	6.60+α	D－22、24を切り込む。近世の溝
W－17	A 8	N74° E	1.80	1.30	0.20	15.70+α	東側にD－43、44、45がある。
W－18	A 9	N15° E	0.40	0.12	0.08	4.00+α	近世の溝
W－19	B 9	N 6° E	0.38	0.18	0.07	1.50+α	近世の溝

表5　西田Ⅱ遺跡・遺物観察表

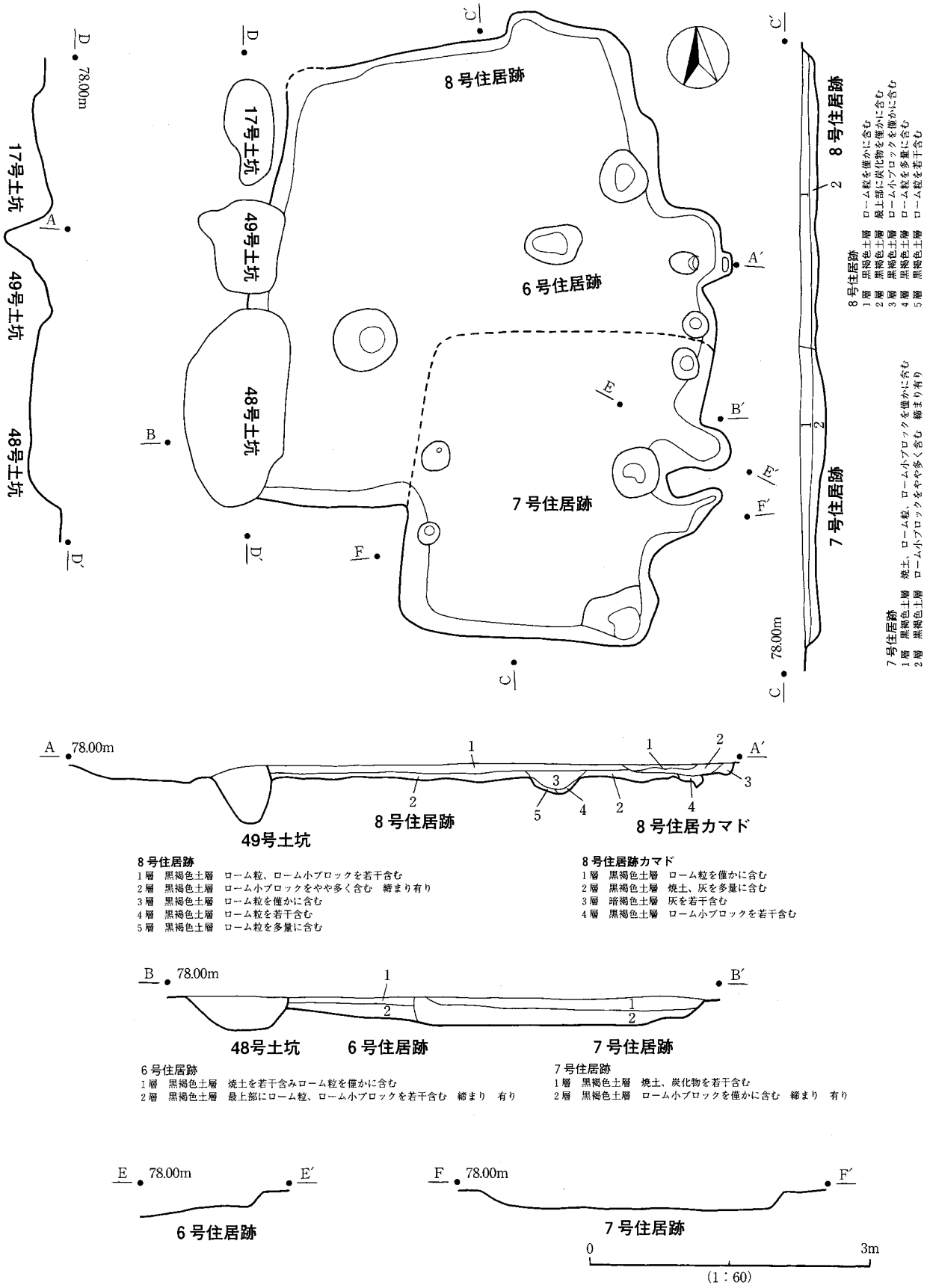
遺構	遺物番号	器種	口径・器高・底径（cm）	遺存率	器形及び成・整形の特徴	①胎土②色調③焼成	出土位置
1号住居跡	第27図1	須恵器坏	14.5・5.0・6.3	ほぼ完形	右回転糸切り離し。油煙あり。	①砂粒、角閃、長石　②灰白　③還元	埋没土
	第27図2	須恵器坏	13.3・2.9・5.6	1/2	右回転糸切り離し無調整。	①砂粒、　②灰白　③還元	埋没土
	第27図3	土師器坏	13.8 ……・……	1/3	型作り成形。底面のみ篦削り調整。	①砂粒、石英、長石、輝石　②にぶい黄橙　③酸化	埋没土
2号住居跡	第27図4	土師器甕	17.1 ……・……	破　片	口唇部内面剥落。	①砂粒　②橙　③酸化	埋没土
	第27図5	須恵器坏	12.9・……・……	破　片	ロクロ成形。	①砂粒　②灰白　③還元	埋没土
3住	第27図6	須恵器坏	13.4・……・……	1/4	ロクロ成形。	①黒色粒　②灰　③還元	カマド
4号住居跡	第27図7	須恵器坏	13.4・3.6 5.0	1/3	右回転糸切り離し無調整。	①長石、片岩　②灰　③還元	埋没土
	第27図8	土師器坏	12.4・3.4・6.7	2/3	型作り成形。体部下端から底面にかけて篦削り調整。	①長石、砂粒　②橙　③酸化	カマド
5号住居跡	第27図9	土師器甕	……・……・……	2/5	外面肩部横位篦削り、胴部にかけ縦位に篦削り、内面部横位篦撫で調整。	①長石、角閃　②橙　③酸化	埋没土
	第27図10	土師器甕	21.6・……・……	1/5	コ字状口縁。外面部は横位篦削り、内面部横位篦撫で調整。	①長石、角閃　②にぶい橙　③酸化	埋没土
	第27図11	須恵器羽釜	21.4・……・……	破　片	ロクロ成形。口縁部内面の肥厚がない。	①砂粒、長石　②灰白　③還元	埋没土
	第27図12	須恵器甕	……・……・15.2	破　片	底部及び下端を篦削り調整。	①英石、長石　②灰白　③還元	埋没土
	第27図13	須恵器甑	27.8・28.2 17.9	3/5	大型で、薄い鍔とくの字に外反する脚及び底部筒抜けの特徴を持つ。脚部に簀の子受けの小孔が4孔。	①長石、片石　②淡黄　③還元	埋没土
	第27図14	須恵器鉢	22.0・7.7・10.2	2/5	底部回転糸切り離し無調整。内面黒色処理。	①砂粒、片岩　②灰白　③還元	埋没土
	第28図15	須恵器坏	13.5・5.2・4.4	ほぼ完形	高台部を欠損。左回転糸切り離し後、高台貼り付け。体部外面刷圧痕あり。	①石英、長石　②灰白　③還元	埋没土
	第28図16	須恵器坏	14.4・4.8・6.8	2/5	右回転糸切り離し後、高台貼り付け。	①砂粒、長石　②灰白　③還元	埋没土
6号住居跡	第28図17	須恵器羽釜	……・……・……	破　片	口縁部やや内傾。	①砂粒、長石　②にぶい黄橙　③還元	埋没土
	第28図18	灰釉陶器・坏	……・……・……	破　片	口唇部短く外反。	①緻密　②灰白　③還元	埋没土
7号住居跡	第28図19	土師器台付甕	……・……・9.6	脚部のみ	台付甕の脚部。	①砂粒、片岩　②にぶい褐　③酸化	埋没土
	第28図20	灰釉陶器・坏	15.4・……・……	1/4	体部は緩やかに張り、口唇部は短く外反。つけがけ。東濃系大原2号窯式か。	①緻密　②灰白　③還元	埋没土
	第28図21	須恵器坏	……・……・6.4	2/5	左回転糸切り離し無調整。内面部油煙あり。	①長石、黒色粒　②灰　③還元	埋没土
	第28図22	鉄製品棒状品	11.9・0.70 0.7	両端欠損	角棒状で両端を欠損する。		埋没土
	第28図23	鉄製品刀子	12.4・1.55 0.35	ほぼ完形	両関で刃部の先端を欠損する。刃部は研減りが著しい。		埋没土
8号住居跡	第28図24	灰釉陶器・坏	14.7・4.8・6.6	1/5	体部は緩やかに張り、口唇部は短く外反。三日月高台でつけがけ。光ヶ丘1号窯式か。	①緻密　②灰白　③還元	埋没土
	第28図25	灰釉陶器・坏	……・……・8.4	1/5	体部は緩やかに張り、三日月高台でつけがけ。光ヶ丘1号窯式か。	①緻密　②灰色　③還元	埋没土
	第28図26	須恵器坏	13.9・4.7・6.1	3/4	右回転糸切り離し無調整。	①砂粒　②灰白　③還元	埋没土
	第28図27	須恵器坏	……・……・7.4	2/5 底部のみ	左回転糸切り離し後、高台貼り付け。	①片岩、長石　②にぶい黄橙　③還元	埋没土
	第28図28	須恵器坏	……・……・6.3	2/5 底部のみ	回転糸切り離し後、高台貼り付け。	①長石、砂粒　②黄灰　③還元	埋没土
	第28図29	須恵器皿	13.6・3.2・5.9	2/5	右回転糸切り離し後、高台貼り付け。	①片岩、長石、砂粒　②橙　③還元	埋没土
	第28図30	須恵器土錘	……・4.3・	完　形	棒に粘土を巻きつけて成形した後に両端を篦切って仕上げ。	①片岩、長石、角閃	埋没土
	第28図31	鉄製品環状品	4.2・4.5・0.5・16.5g	ほぼ完形	断面円形の環状品。		埋没土
	第28図32	鉄製品刀子	5.3・1.1・0.4・11.8g	身部欠損	関はなく、茎部残る。		埋没土
	第28図33	鉄製品円盤状品	5.5・6.3・0.4		鉄製紡錘車の紡輪か？		埋没土
	第28図34	石製品紡錘車	4.3・3.6・1.4	完　形	蛇紋岩製。		埋没土
	第28図35	凝灰岩砥石	……・0.4・3.5	一端を欠損	4面が砥面となる仕上げ砥である。上部に孔がある。		埋没土

表6　西田Ⅱ遺跡・遺物観察表

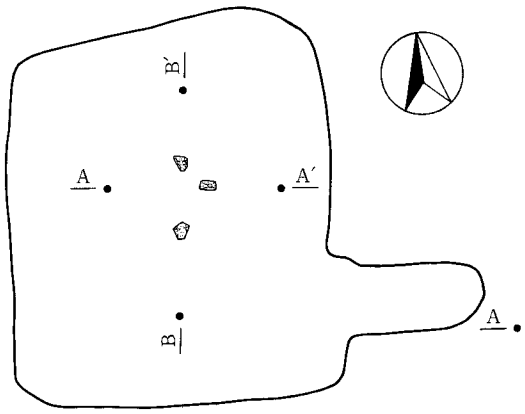
遺構	遺物番号	器種	口径・器高・底径（cm）	遺存率	器形及び成・整形の特徴	①胎土②色調③焼成	出土位置
5号竪穴	第28図 36	須恵器 坏	……・…… 6.7	2/5	右回転糸切り離し後、高台貼り付け。	①砂粒、長石、石英　②灰白 ③還元	埋没土
24号土坑	第29図 37	土師器 甕	16.0　・…… ……	口縁部破片	S字状口縁。胴部刷毛目調整。石田川式。	①細砂粒を含む　②褐　③酸化	埋没土
	第29図 38	土師器 甕	……・…… ……	破　片	胴部外面刷毛目。石田川式。	①細砂粒を含む　②褐　③酸化	埋没土
	第29図 39	土師器 壺	14.8　・…… ……	口縁部のみ	口辺部のみ残存し、外面は縦位の刷毛目調整。内面は横位の刷毛目調整後、磨き。	①長石、砂粒　②橙　③酸化	埋没土
	第29図 40	須恵器 坏	14.4　・5.6 7.6	底部のみ	右回転糸切り離し後、高台貼り付け。	①角閃、砂粒　②灰褐　③還元	埋没土
25号土坑	第29図 41	須恵器 坏	13.3・4.8 5.6	2/5	右回転糸切り離し無調整。	①砂粒、長石　②灰白　③還元	カマド
	第29図 42	土錘	内径　0.3 長さ　4.0	完　形	棒に巻きつけて成形後、両端に篦切り落としして調整。	①砂粒　②浅黄　③還元	埋没土
	第29図 43	安山岩 砥石	11.0・7.1・ 6.6	一部欠損	荒砥で4面が砥面。		カマド
29号土坑	第29図 44	土師器 坏	13.4・3.2・ 9.0	破　片	型作り成形。体部下半から底部にかけて篦削り調整。	①角閃、砂粒　②橙　③酸化	埋没土
37号土坑	第29図 45	須恵器 坏	14.7・5.0・ 7.7	口縁部破片	右回転糸切り離し後、高台貼り付け。	①砂粒、長石　②灰白　③還元	埋没土
P－4	第29図 46	須恵器 坏	14.2・4.9・ 7.7	完　形	右回転糸切り離し後、高台貼り付け。	①砂粒、石英、長石　②灰白 ③還元	埋没土
	第29図 47	須恵器 坏	13.8・4.8・ 6.3	完　形	右回転糸切り離し後、高台貼り付け。	①砂粒、長石　②灰黄　③還元	埋没土
	第29図 48	須恵器 坏	14.2・4.9・ 6.2	1/4	右回転糸切り離し後、高台貼り付け。	①石英、長石、雲母　②灰白 ③還元	埋没土
P－5	第29図 49	須恵器 坏	12.7・3.8・ 5.1	4/5	右回転糸切り離し無調整。	①砂粒、長石、石英　②灰白 ③還元	埋没土
W－1	第29図 50	須恵器 坏	……・…… 6.9	底部のみ	右回転糸切り離し後、高台貼り付け。	①砂粒、長石　②灰白　③還元	埋没土
W－2	第29図 51	土師器 坏	13.7・6.3・ 6.6	1/3	口縁部やや外反し、体部から底部にかけての外面を篦削り調整。	①砂粒、石英、長石　②橙 ③酸化	埋没土
W－5	第29図 52	土師器 坏	14.2・4.9・ 6.2	ほぼ完形	体部外面篦削り調整。石田川式。	①角閃、石英、長石　②にぶい橙 ③酸化	埋没土
W－7	第30図 53	須恵器 瓶	……・…… ……	破　片	長頸か。	①砂粒、長石　②灰黄　③還元	埋没土
	第30図 54	須恵器 坏	……・…… 6.6	底部のみ	右回転糸切り離し後、高台貼り付け。	①片岩、長石　②暗灰　③還元	埋没土
W－9	第30図 55	土師器 甕	18.7・…… ……	破　片	胴部外面は篦削り、胴部内は篦撫でそれぞれ調整。	①角閃、石英、長石　②橙 ③酸化	埋没土
	第30図 56	灰釉陶器 瓶	……・…… ……	破　片	胴部は緩やかな張りをもつ。	①緻密　②灰白　③還元	埋没土
	第30図 57	灰釉陶器 坏	……・…… 8.0	底部破片	三日月高台。	①緻密　②灰黄　③還元	埋没土
	第30図 58	須恵器 坏	14.2・4.9・ 6.2	1/2	右回転糸切り離し後、高台貼り付け。	①砂粒、石英、長石　②灰 ③還元	埋没土
	第30図 59	凝灰岩 砥石	7.7・3.4・ 3.1・170g	一端欠損	研ぎ面は1面だけ、あとの3面は石材の切り出し痕がそのまま残る。	①凝灰岩、砥沢石	埋没土
	写真図版 10－64	馬歯					埋没土
W－13	第30図 60	灰釉陶器 皿	……・…… 7.2	底部破片	体部は緩やかに張る。台形状高台。	①緻密　②灰白　③還元	埋没土
W－14	第30図 61	鉄製品 鏨	8.1・2.4・ 2.0・65.9g	完存	断面四角形。		埋没土
W－15	第30図 62	須恵器 坏	……・…… ……	底部破片	右回転糸切り離し後、高台貼り付け。	①石英、長石　②灰白　③還元	埋没土
W－17	第30図 63	土師器 甕	15.2・…… ……	1/5	S字状口縁。胴部外面刷毛目調整。	①砂粒　②橙　③酸化	埋没土
遺構外出土遺物	第30図 65	灰釉陶器 皿	7.0・2.9・ 6.7	2/5	体部は緩やかに張り、口唇部は短く外反。台形状高台で刷毛がけ。	①緻密　②灰　③還元	
	第30図 66	須恵器 蓋	……・……・ ……	3/5	天井部回転篦削り後、つまみ貼り付け。	①砂粒、長石　②灰白　③還元	
	第30図 67	須恵器 坏	13.4・3.5・ 7.0・	1/3	回転糸切り無調整。	①砂粒、長石、石英　②灰 ③還元	
	第30図 68	土師器 坏	12.1・3.7・ 5.4	2/3	体部及び底部外面を粗い手持ち篦削り調整。	①角閃、長石　②明赤褐　③酸化	
	第30図 69	土師器 坏	11.8・3.7・ 6.0	3/4	型作り成形。篦削り調整はない。	①角閃　②にぶい橙　③酸化元	



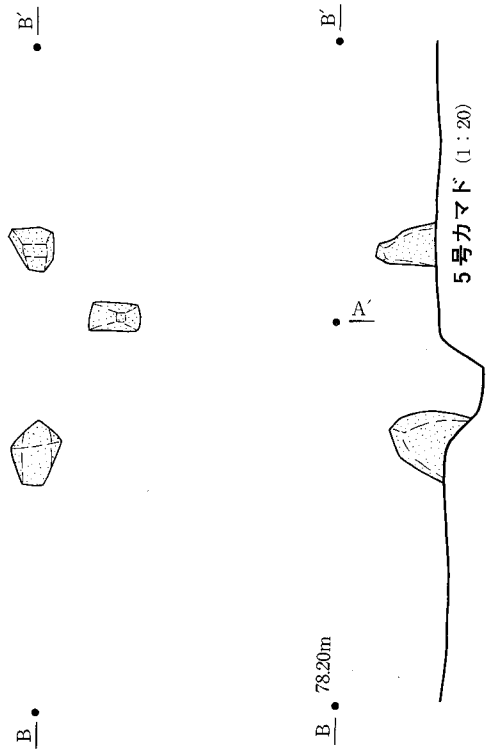
第15図　1～4号住居跡実測図



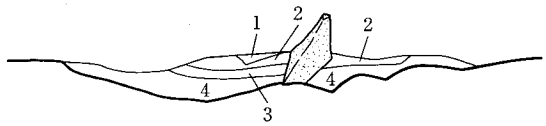
第16図　6～8号住居跡、17・48・49号土坑実測図



5号住居跡

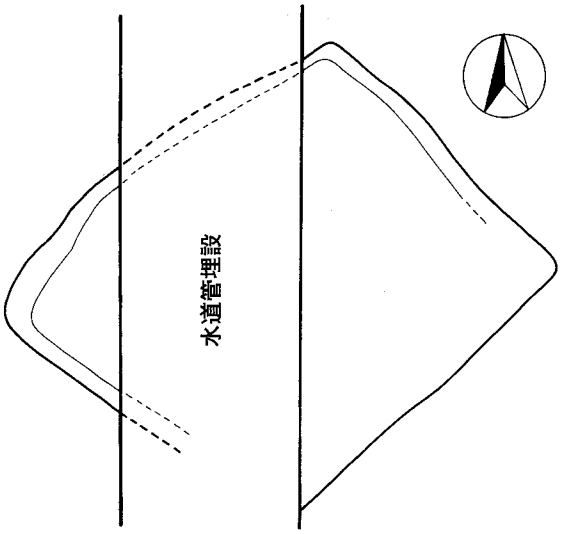


5号カマド（1：20）

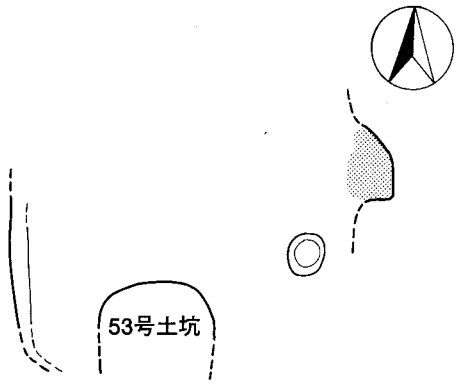


5号住居跡カマド（1：20）

5号住居跡カマド
1層　赤褐色土層　焼土を多量に含む
2層　褐灰色土層　灰を多量に含む
3層　褐灰色土層　灰を多量に含み焼土を僅かに含む
4層　褐灰色土層　灰、焼土をやや多く含む



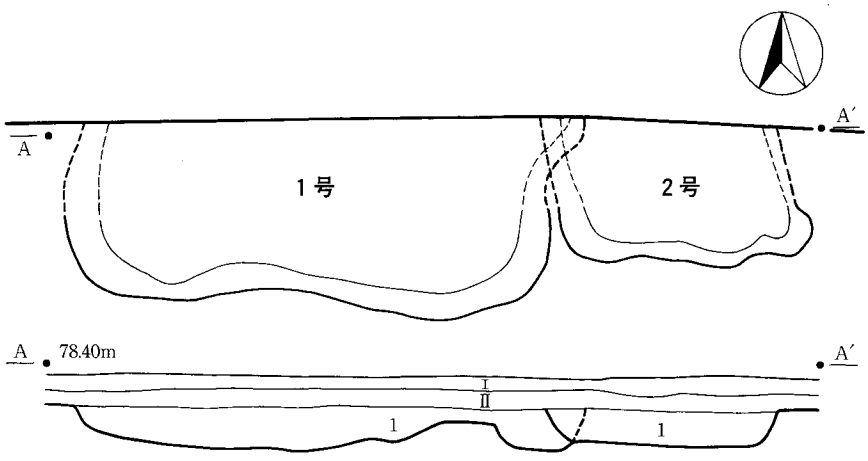
9号住居跡



10号住居跡

0　1m
（1：20）
0　3m
（1：60）

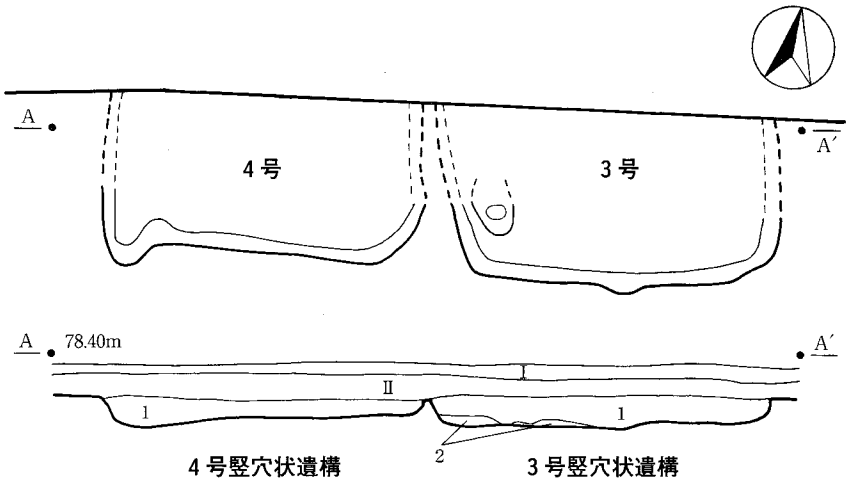
第17図　5・9・10号住居跡実測図



1号竪穴状遺構　　2号竪穴状遺構

1号竪穴状遺構
Ⅰ層　暗褐色土層　耕作土　締まり、粘性なし
Ⅱ層　暗褐色土層　旧耕作土　締まり、粘性やや有り
1層　黒褐色土層　最下部にローム小ブロックをやや多く含む　炭化物を僅かに含む

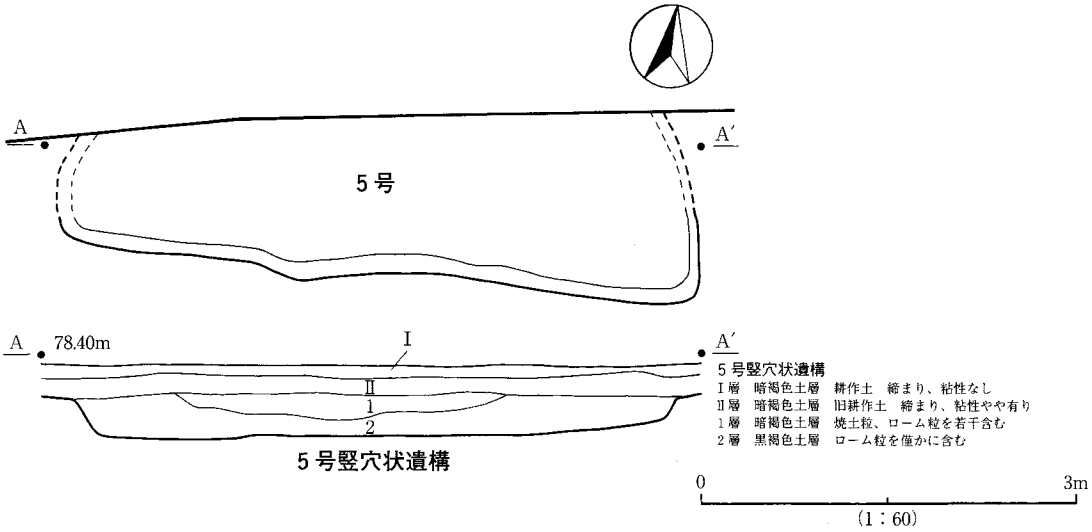
2号竪穴状遺構
Ⅰ層　暗褐色土層　耕作土　締まり、粘性なし
Ⅱ層　暗褐色土層　旧耕作土　締まり、粘性やや有り
1層　黒褐色土層　焼土粒を全体に含む　ローム粒を僅かに含む



4号竪穴状遺構　　3号竪穴状遺構

4号竪穴状遺構
Ⅰ層　暗褐色土層　耕作土　締まり、粘性なし
Ⅱ層　暗褐色土層　旧耕作土　締まり、粘性やや有り
1層　黒褐色土層　最下部に焼土粒を僅かに含む

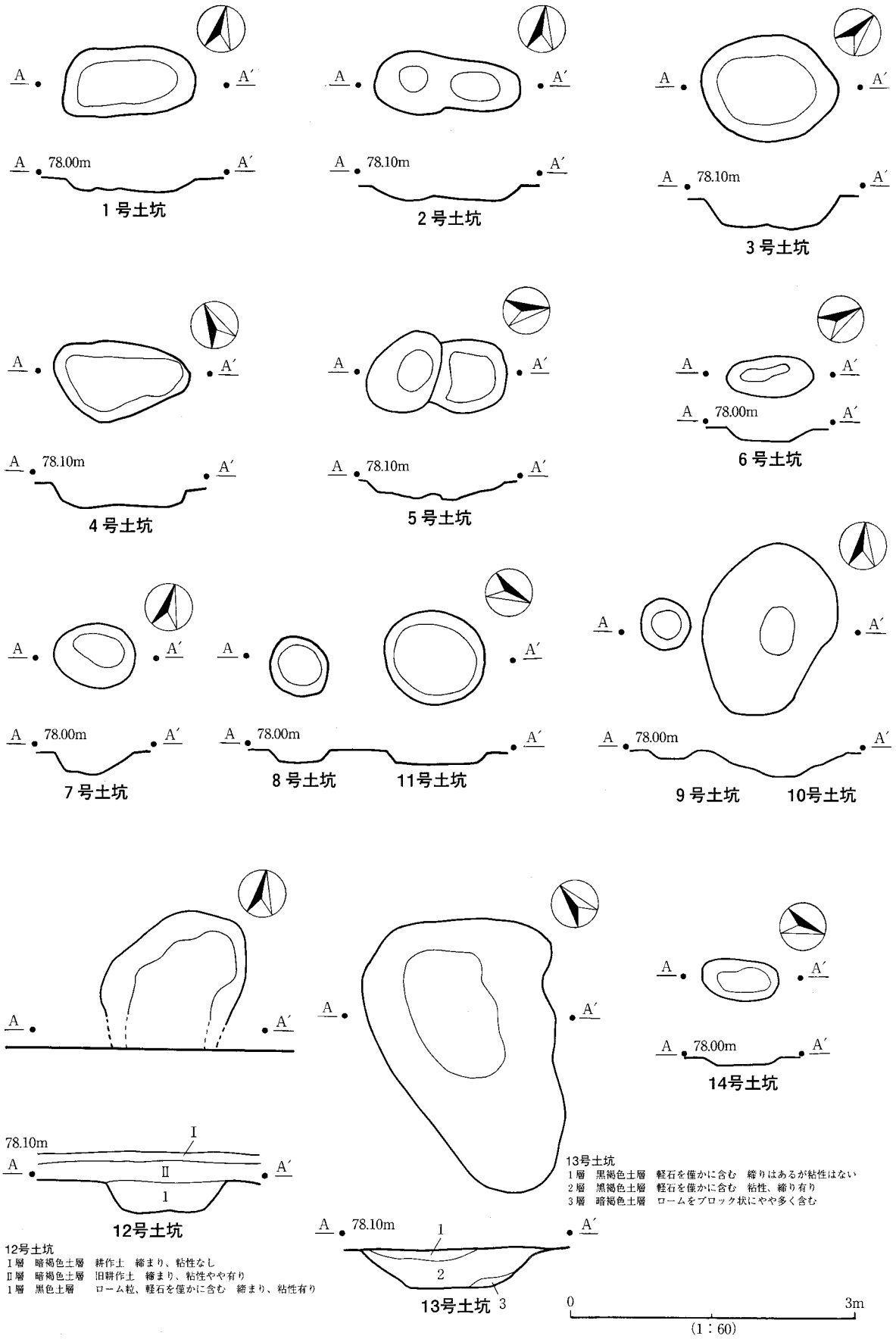
3号竪穴状遺構
Ⅰ層　暗褐色土層　耕作土　締まり、粘性なし
Ⅱ層　暗褐色土層　旧耕作土　締まり、粘性やや有り
1層　黒褐色土層　焼土粒を僅かに含む　ローム小ブロックを若干含む
2層　にぶい黄褐色土層　鉄分とローム小ブロックを若干含む



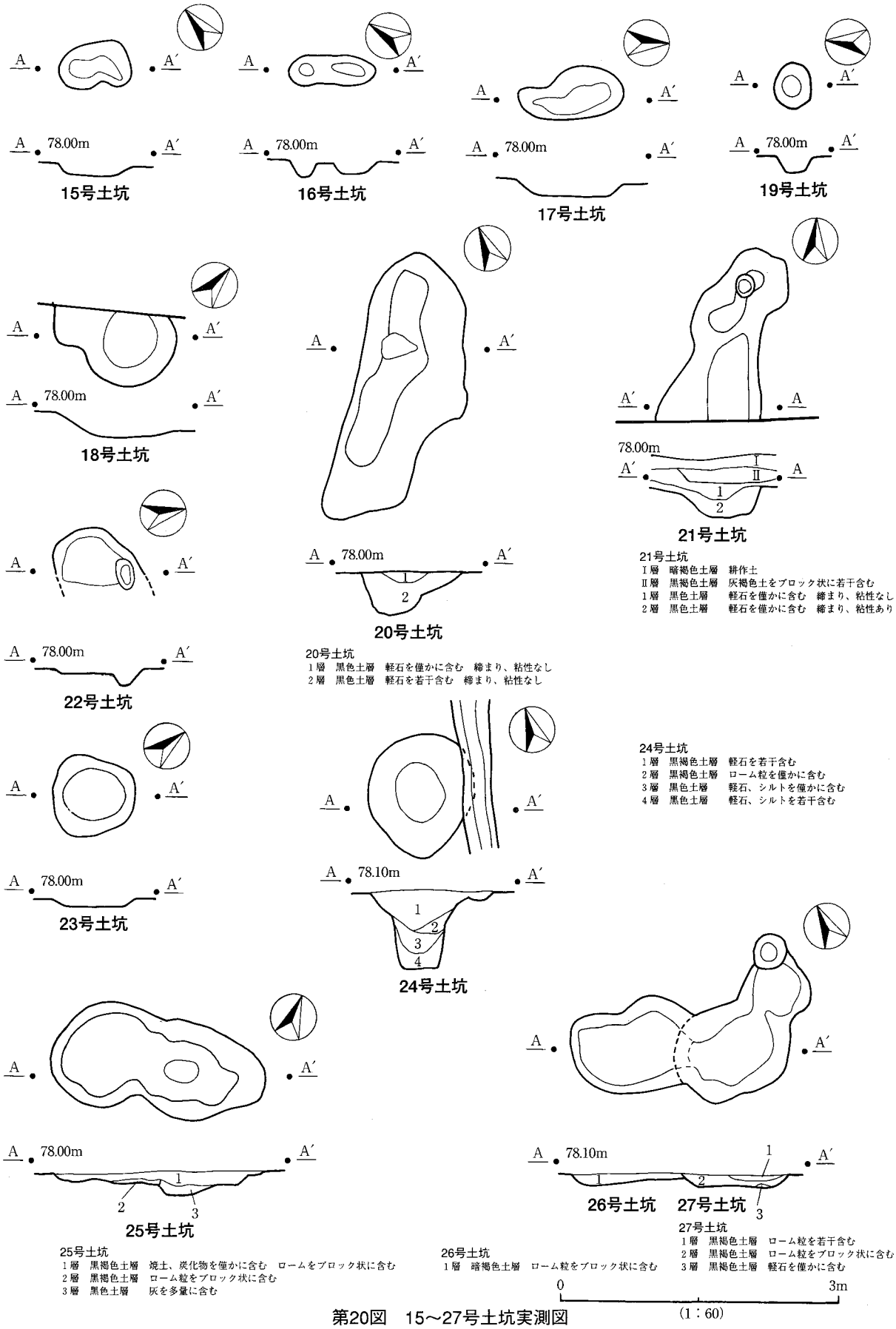
5号竪穴状遺構

5号竪穴状遺構
Ⅰ層　暗褐色土層　耕作土　締まり、粘性なし
Ⅱ層　暗褐色土層　旧耕作土　締まり、粘性やや有り
1層　暗褐色土層　焼土粒、ローム粒を若干含む
2層　黒褐色土層　ローム粒を僅かに含む

第18図　1～5号竪穴状遺構実測図



第19図　1～14号土坑実測図



21号土坑
Ⅰ層　暗褐色土層　耕作土
Ⅱ層　黒褐色土層　灰褐色土をブロック状に若干含む
1層　黒色土層　軽石を僅かに含む　締まり、粘性なし
2層　黒色土層　軽石を僅かに含む　締まり、粘性あり

20号土坑
1層　黒色土層　軽石を僅かに含む　締まり、粘性なし
2層　黒色土層　軽石を若干含む　締まり、粘性なし

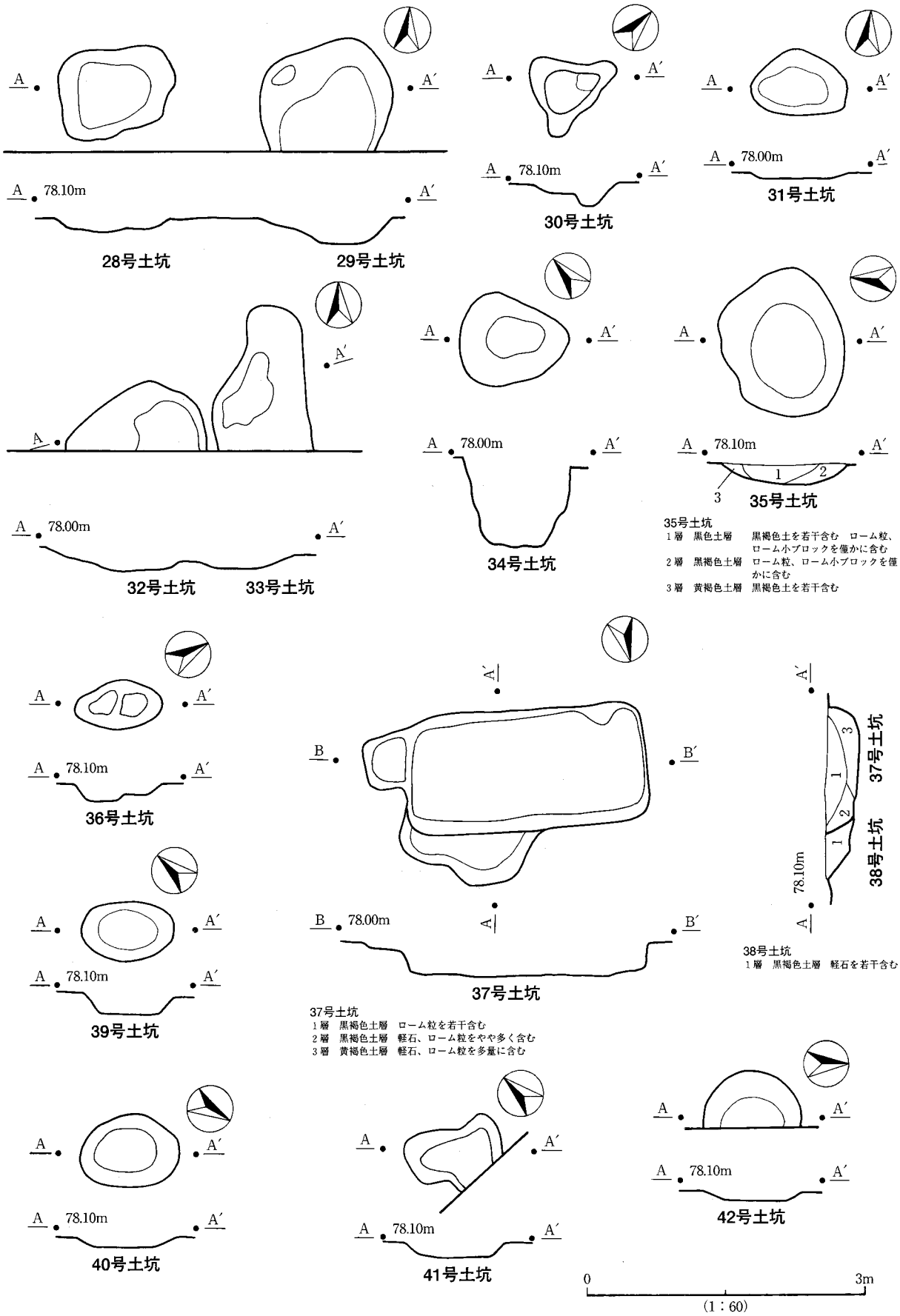
24号土坑
1層　黒褐色土層　軽石を若干含む
2層　黒褐色土層　ローム粒を僅かに含む
3層　黒色土層　軽石、シルトを僅かに含む
4層　黒色土層　軽石、シルトを若干含む

25号土坑
1層　黒褐色土層　焼土、炭化物を僅かに含む　ロームをブロック状に含む
2層　黒褐色土層　ローム粒をブロック状に含む
3層　黒色土層　灰を多量に含む

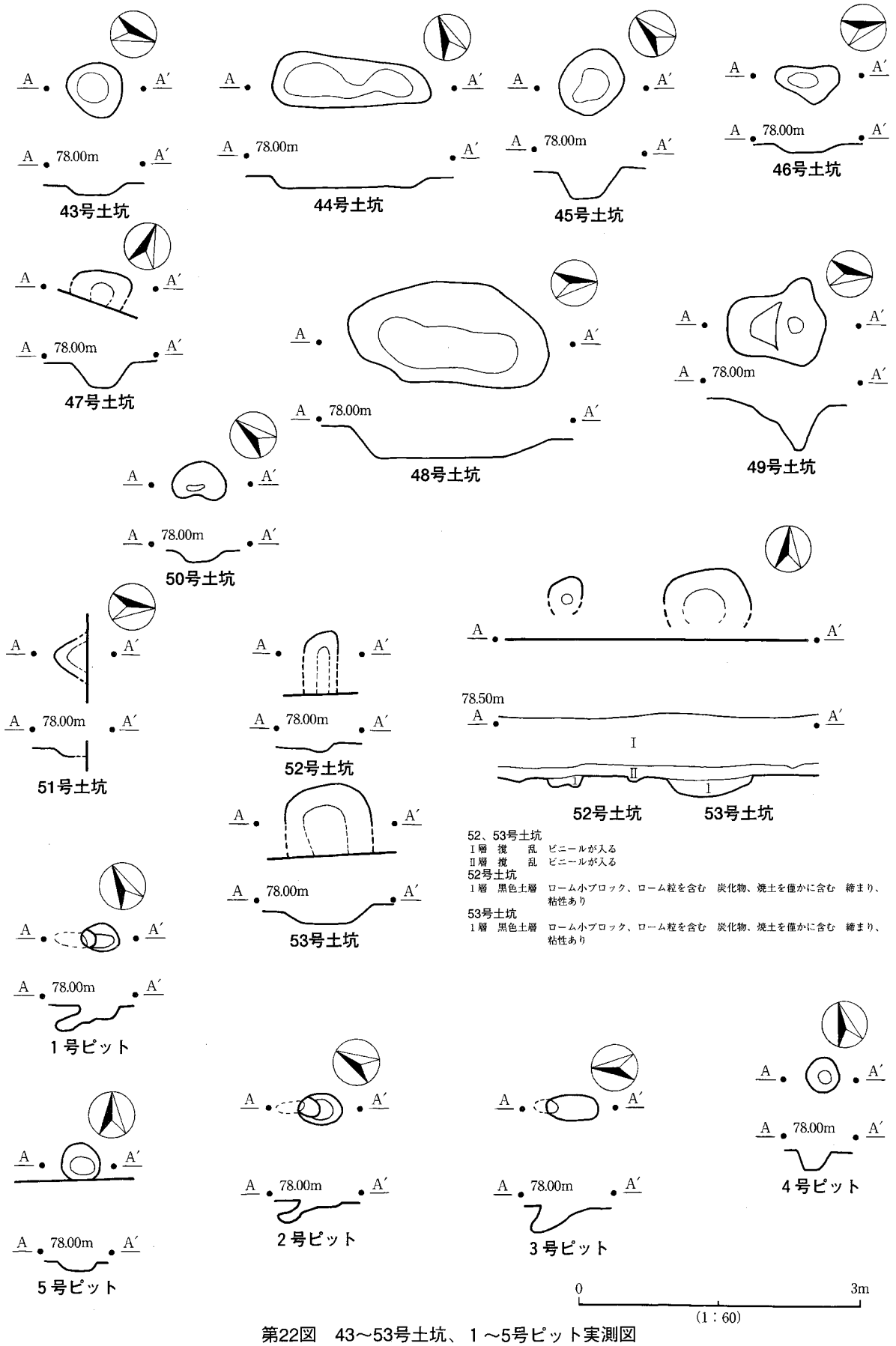
26号土坑
1層　暗褐色土層　ローム粒をブロック状に含む

27号土坑
1層　黒褐色土層　ローム粒を若干含む
2層　黒褐色土層　ローム粒をブロック状に含む
3層　黒褐色土層　軽石を僅かに含む

第20図　15～27号土坑実測図

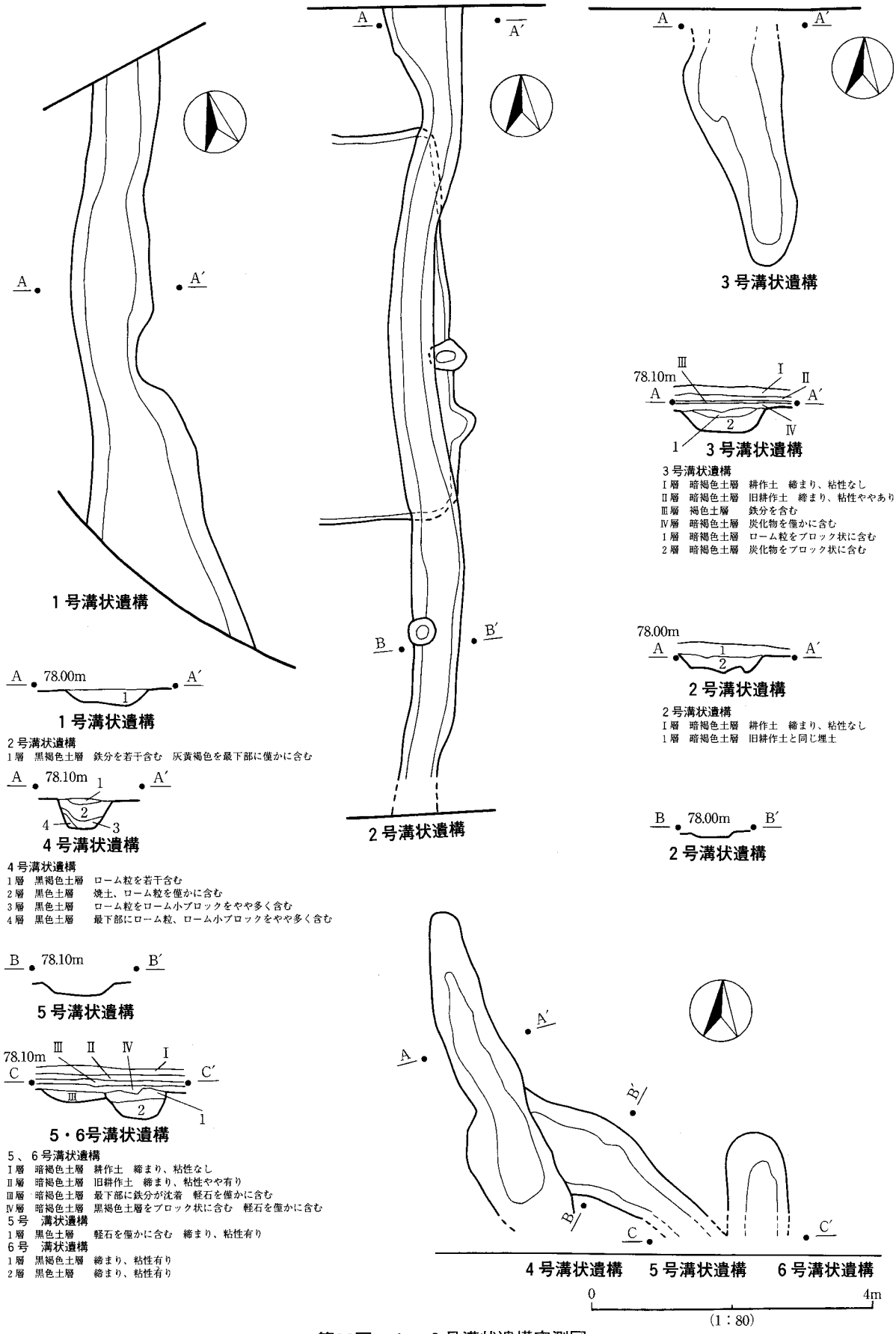


第21図　28～42号土坑実測図

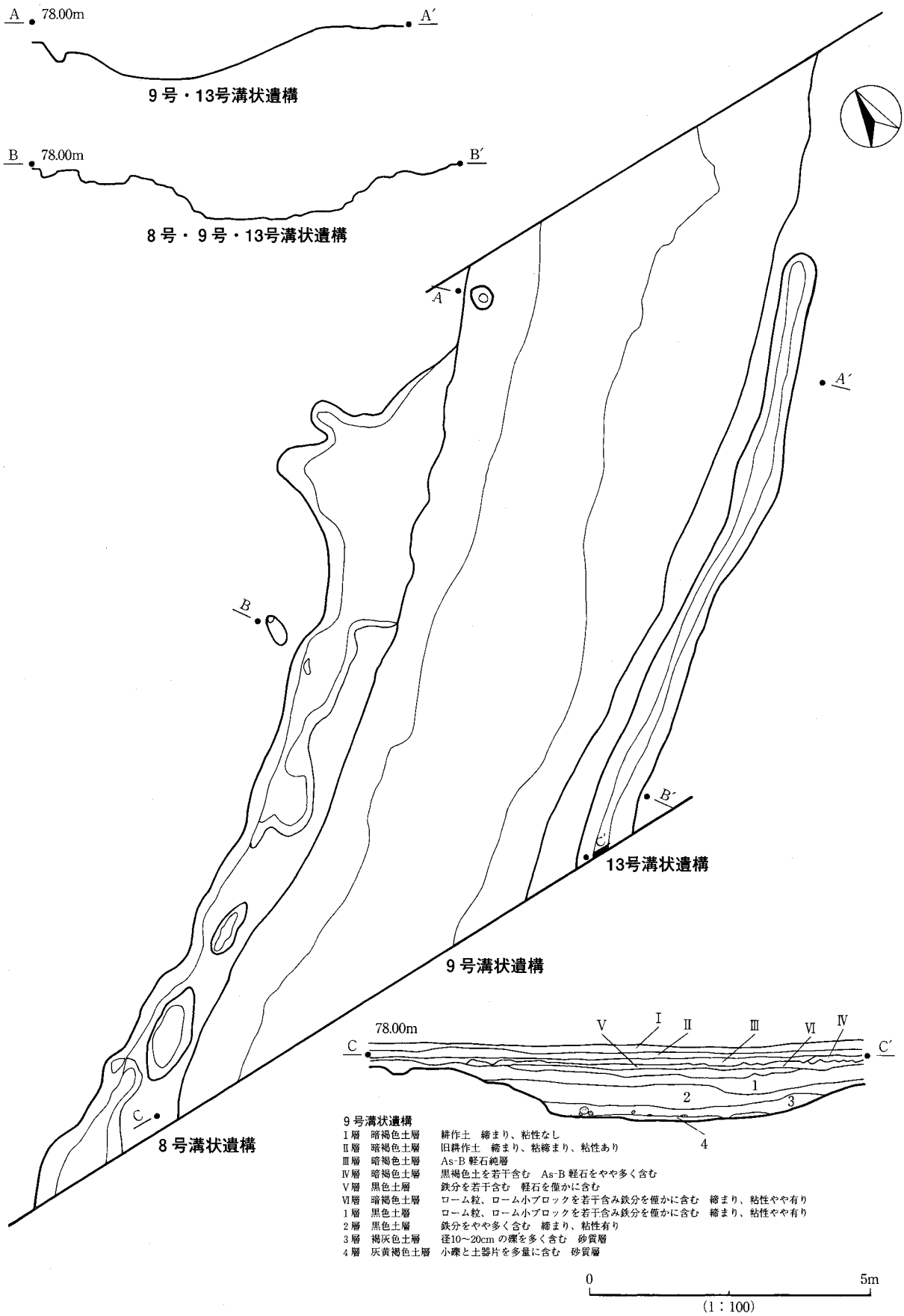


52、53号土坑
Ⅰ層　攪　乱　ビニールが入る
Ⅱ層　攪　乱　ビニールが入る
52号土坑
1層　黒色土層　ローム小ブロック、ローム粒を含む　炭化物、焼土を僅かに含む　締まり、粘性あり
53号土坑
1層　黒色土層　ローム小ブロック、ローム粒を含む　炭化物、焼土を僅かに含む　締まり、粘性あり

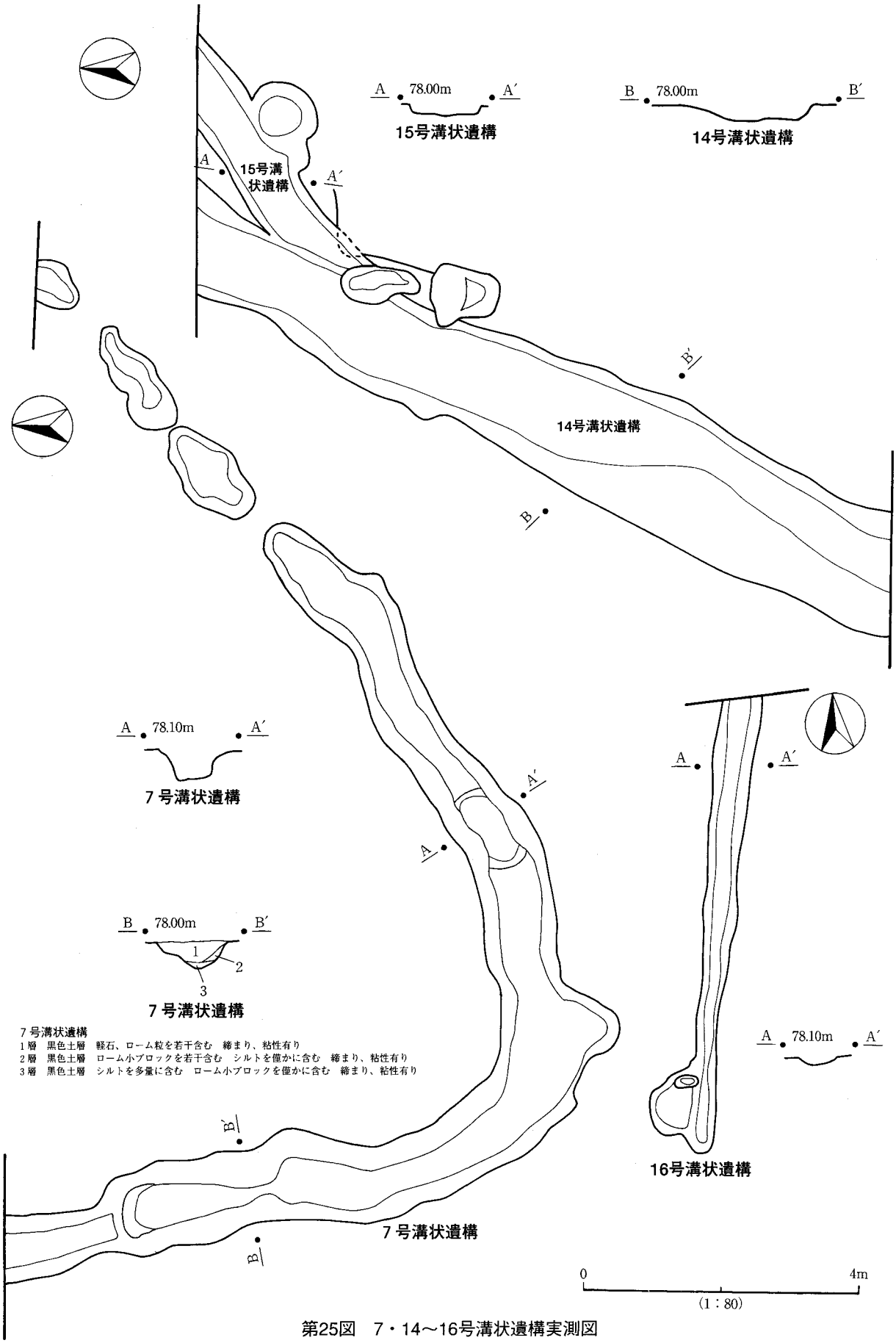
第22図　43～53号土坑、1～5号ピット実測図



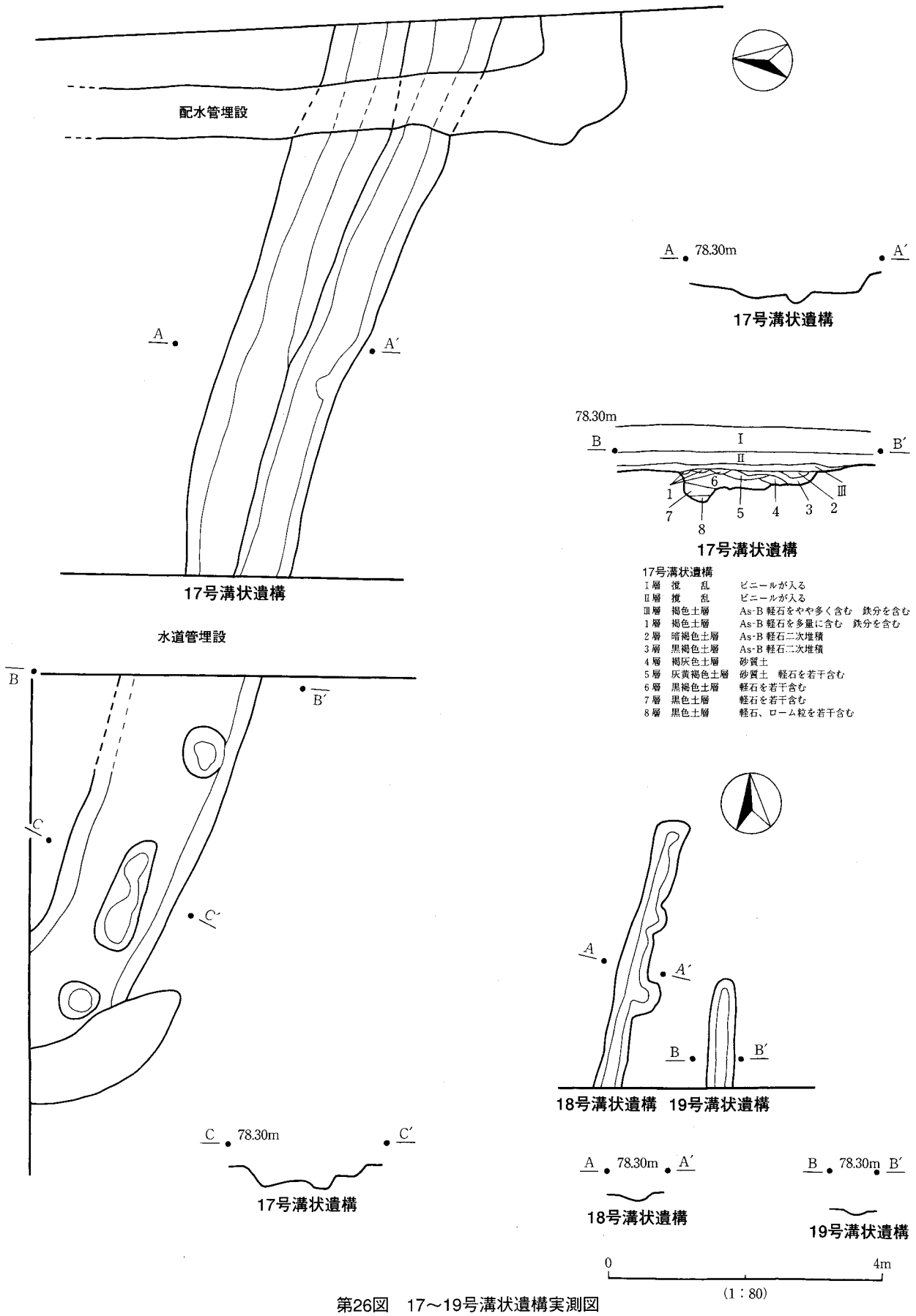
第23図　1～6号溝状遺構実測図



第24図 8・9・13号溝状遺構実測図



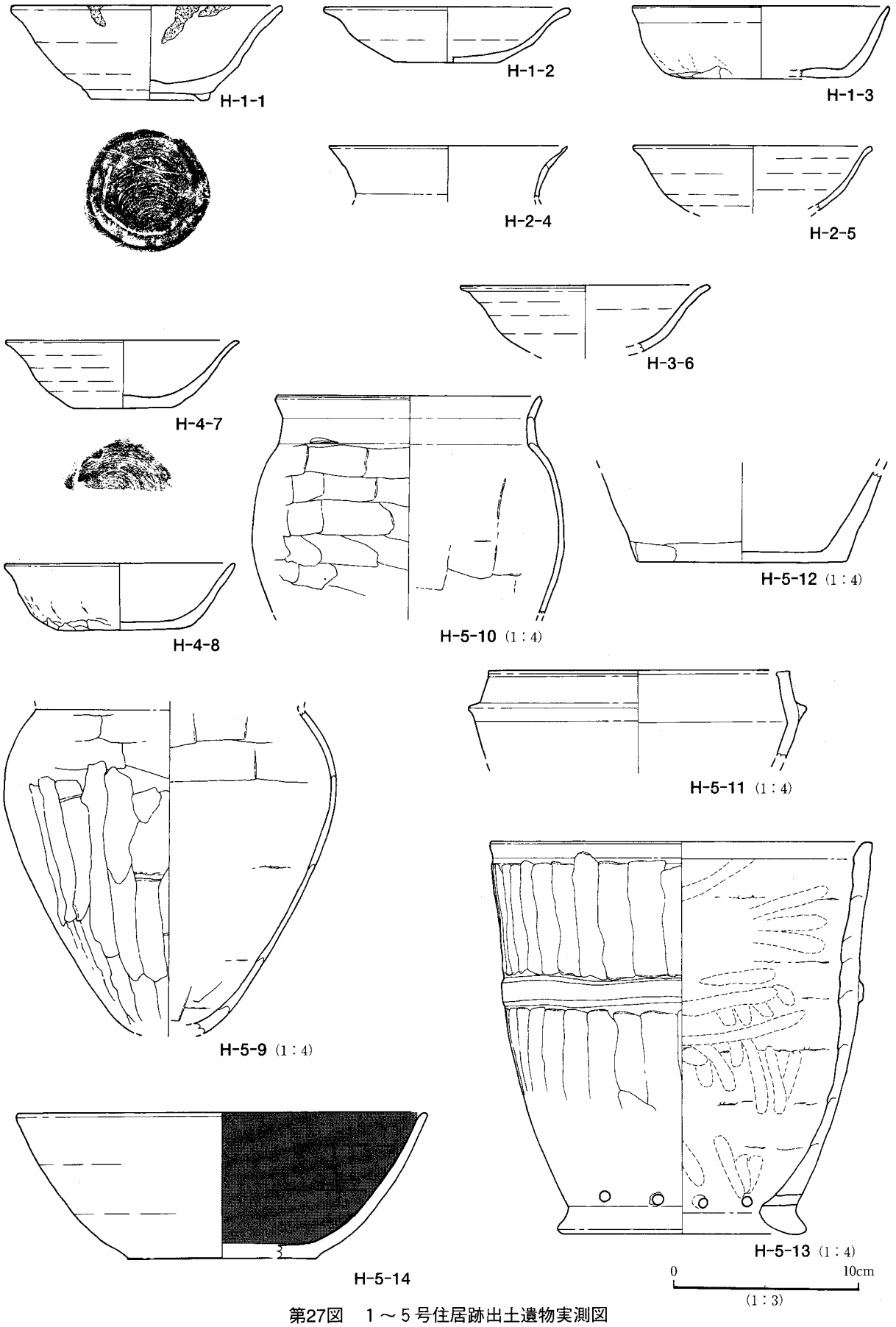
第25図　7・14～16号溝状遺構実測図



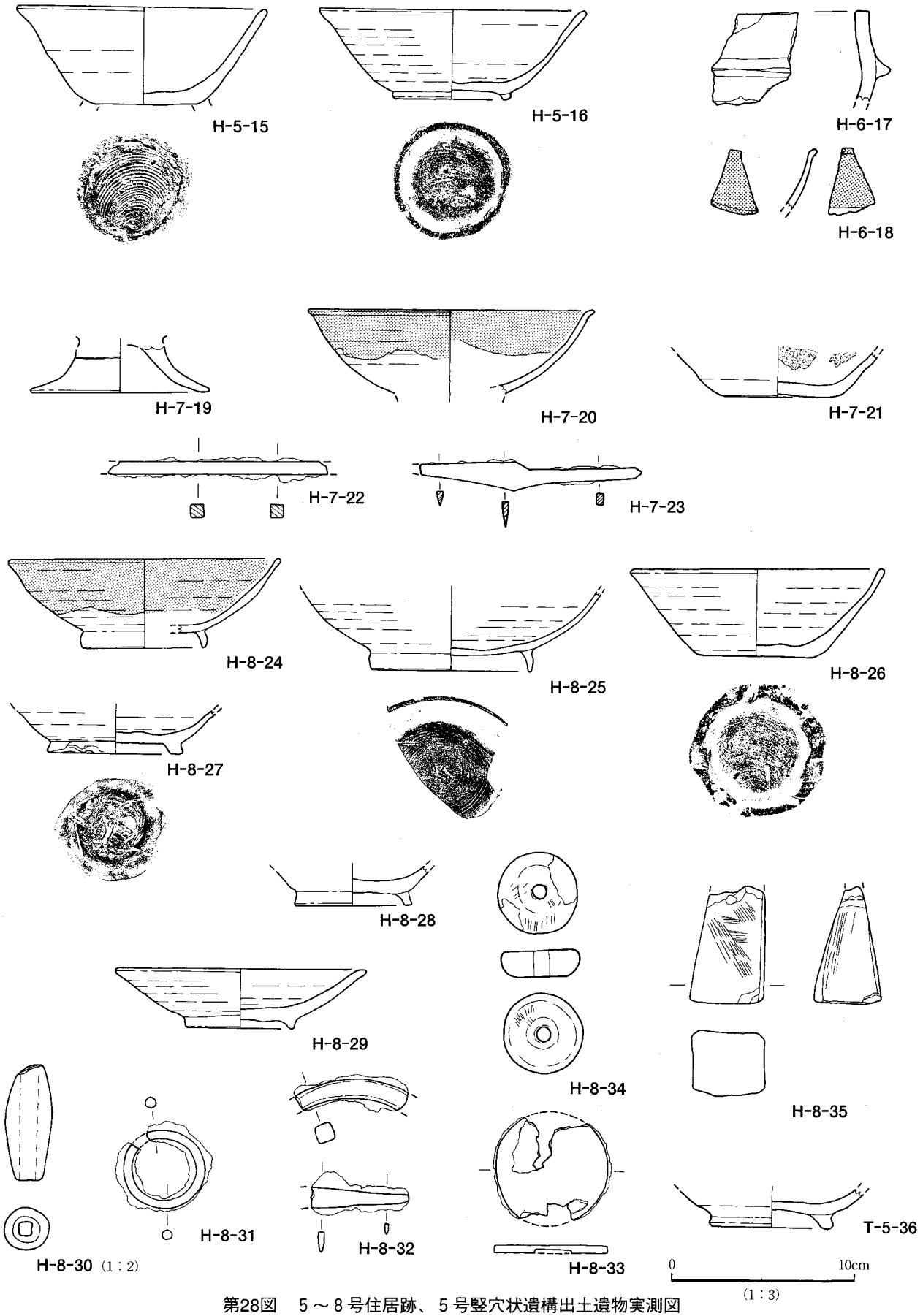
17号溝状遺構

Ⅰ層	撹　乱	ビニールが入る
Ⅱ層	撹　乱	ビニールが入る
Ⅲ層	褐色土層	As-B 軽石をやや多く含む　鉄分を含む
1層	褐色土層	As-B 軽石を多量に含む　鉄分を含む
2層	暗褐色土層	As-B 軽石二次堆積
3層	黒褐色土層	As-B 軽石二次堆積
4層	褐灰色土層	砂質土
5層	灰黄褐色土層	砂質土　軽石を若干含む
6層	黒褐色土層	軽石を若干含む
7層	黒色土層	軽石を若干含む
8層	黒色土層	軽石、ローム粒を若干含む

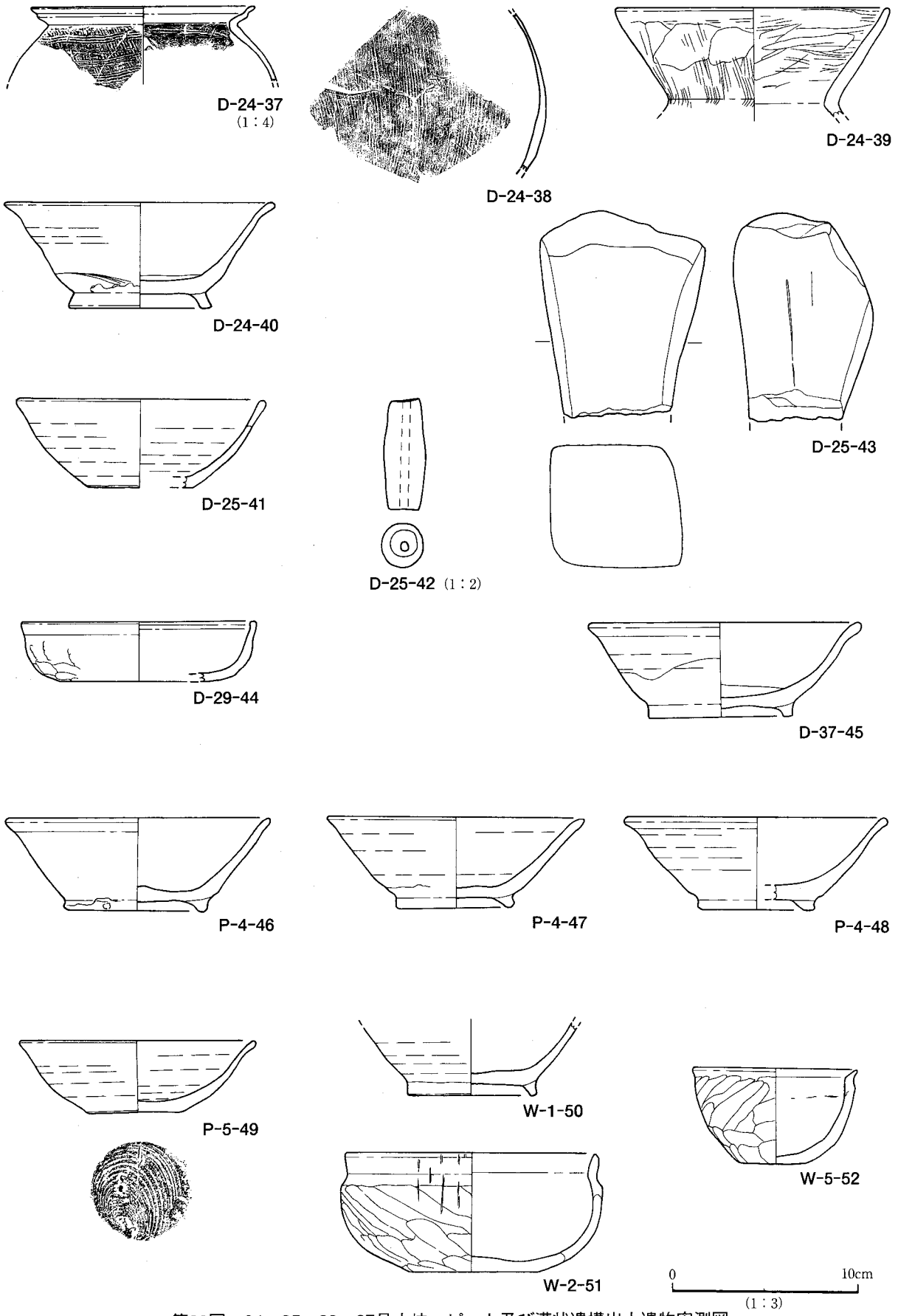
第26図　17～19号溝状遺構実測図



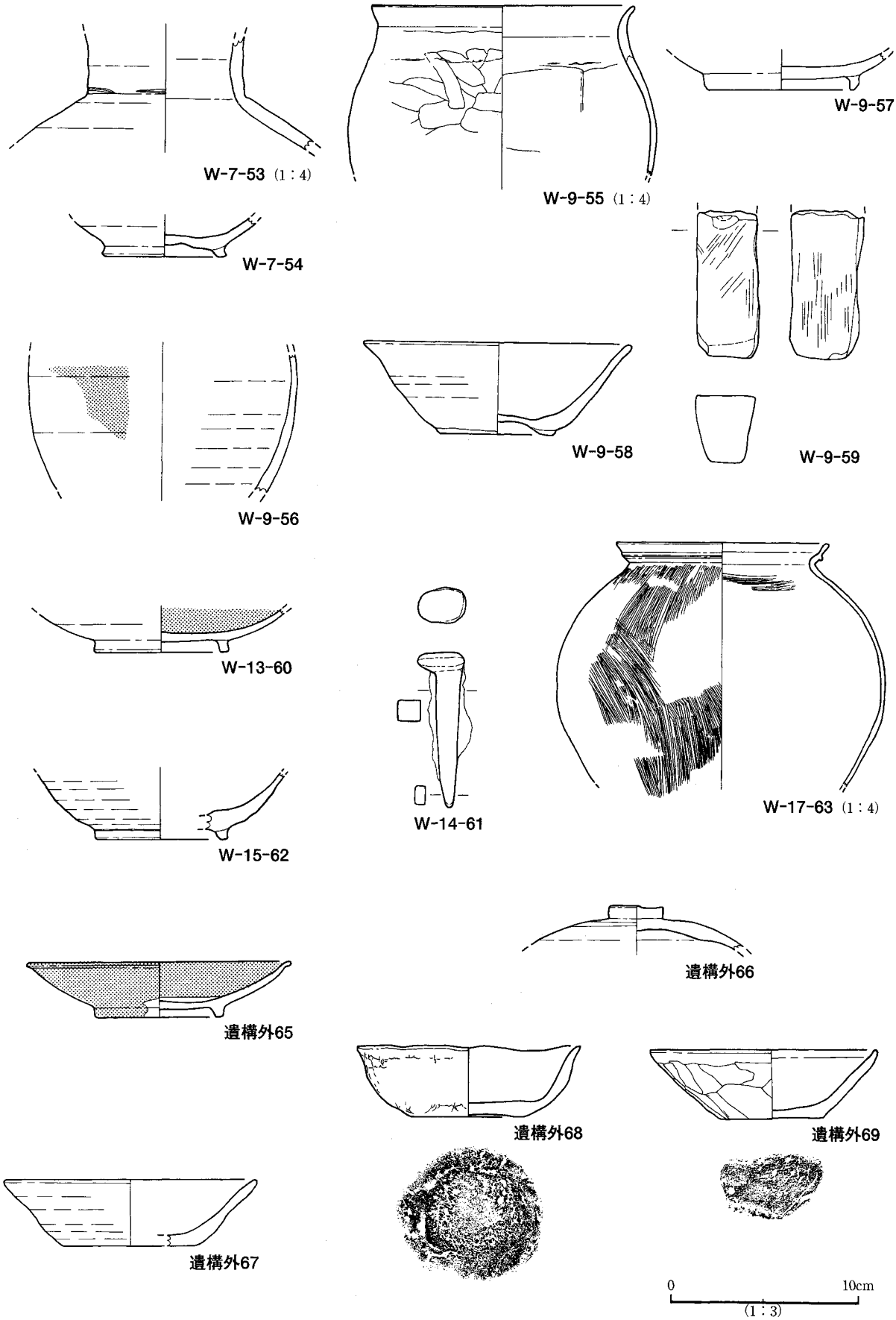
第27図　1～5号住居跡出土遺物実測図



第28図　5～8号住居跡、5号竪穴状遺構出土遺物実測図



第29図　24・25・29・37号土坑、ピット及び溝状遺構出土遺物実測図

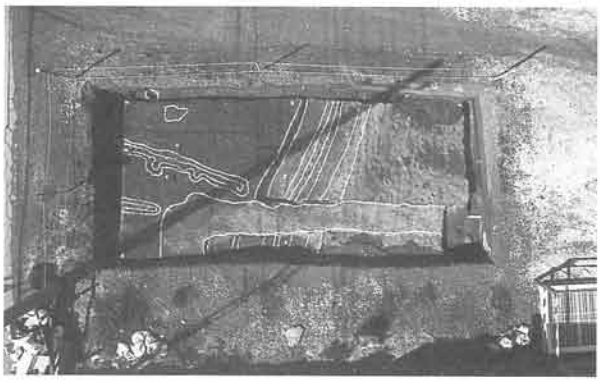


第30図　溝状遺構及び遺構外出土遺物実測図

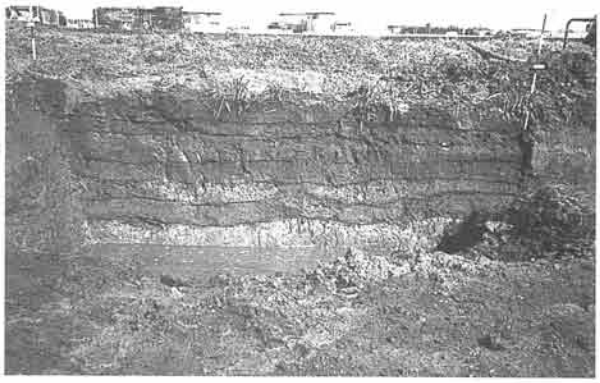
1．遺跡全景（上方から望む）

2．遺跡全景（上方から望む）

図版4　遺構写真

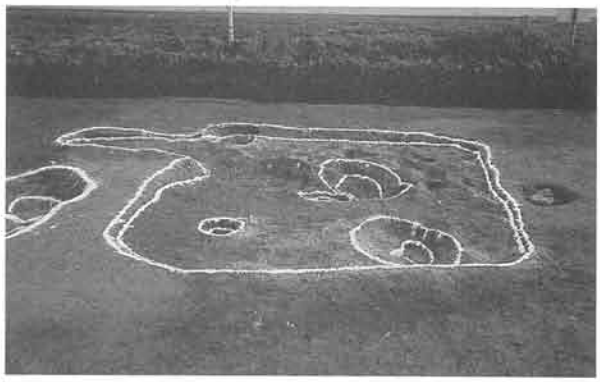


1．遺跡全景（上方から望む）

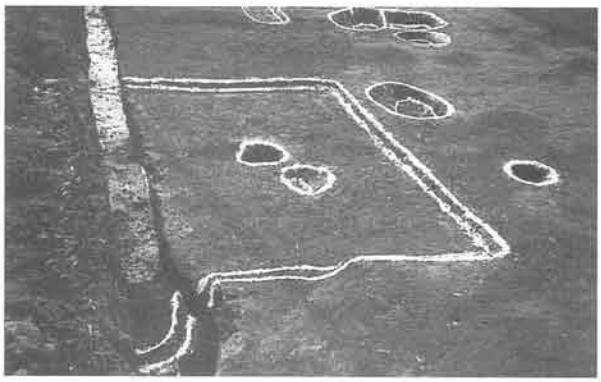


2．標準堆積土層断面（調査区西側）

3．標準堆積土層断面（調査区東側）



4．1号住居跡全景（北から望む）



5．2号住居跡全景（東から望む）

6．3・4・5号住居跡全景（南から望む）

7．5号住居跡カマド出土状況（南から望む）

8．5号住居跡カマド出土状況（西から望む）

1．6・7・8号住居跡全景（北から望む）

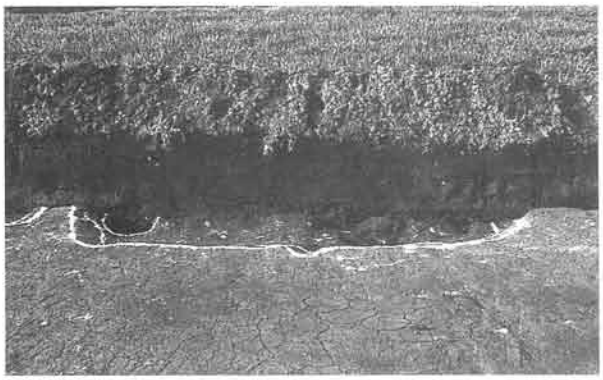
2．6・7・8号住居跡全景（南から望む）

3．9号住居跡全景（南から望む）

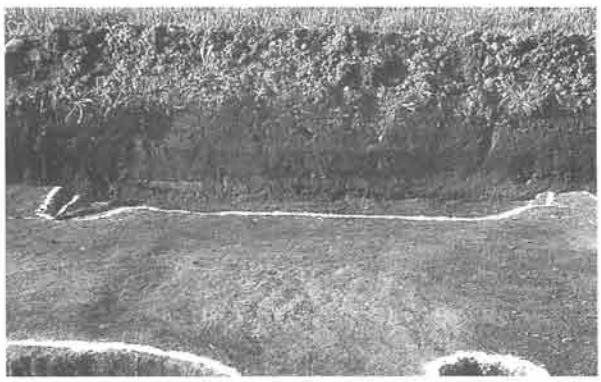
4．9・10号住居跡全景（東から望む）

5．1号竪穴状遺構検出状況（南から望む）

6．2号竪穴状遺構検出状況（南から望む）



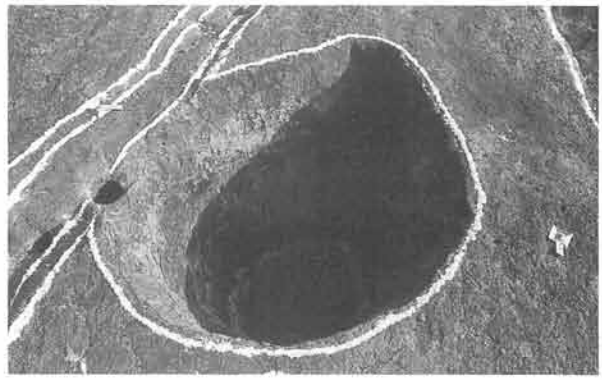
7．3号竪穴状遺構検出状況（南から望む）



8．4号竪穴状遺構検出状況（南から望む）

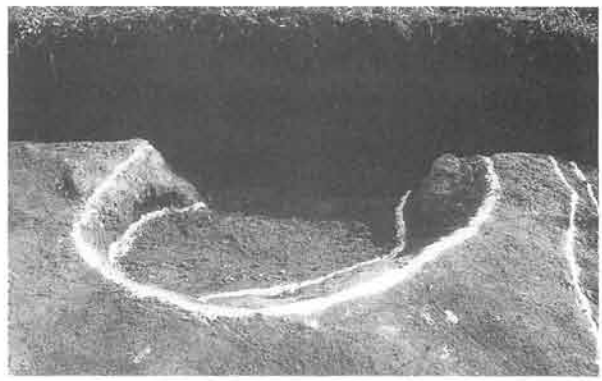
図版6　遺構写真

1．5号竪穴状遺構検出状況（南から望む）



2．24号土坑全景（北から望む）

3．25号土坑遺物出土状況（南から望む）



4．12号土坑全景（北から望む）

5．37号土坑遺物出土状況（南から望む）

6．1号溝状遺構全景（北から望む）

7．3号溝状遺構全景（北から望む）

8．4号溝状遺構全景（北から望む）

1．7号溝状遺構全景（南から望む）

2．9号溝状遺構全景（東から望む）

3．9号溝状遺構全景（北から望む）

4．9号溝状遺構全景（北から望む）

5．9号溝状遺構全景（南から望む）

6．9号溝状遺構遺物出土状況（北から望む）

7．17号溝状遺構全景（東から望む）

8．4号ピット遺物出土状況（南から望む）

H-1-1

H-1-2

H-1-3

H-2-4

H-2-5

H-3-6

H-4-7

H-5-9

H-5-10

H-5-11

H-4-8

H-5-12

H-5-14

H-5-13

H-5-15

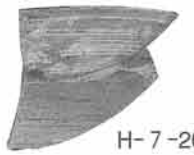
H-5-16

H-6-17

H-6-18

H-7-22

H-7-19


H-7-20

H-7-21

H-7-23

1号～7号住居跡出土遺物

H-8-24

H-8-26

H-8-30

H-8-34

H-8-25

H-8-29

H-8-27

H-8-28

H-8-31

H-8-32

H-8-33

H-8-35

T-5-36

D-24-39

D-24-40

D-24-37

D-24-38

D-29-44

D-37-45

D-25-41

P-4-46

P-4-47

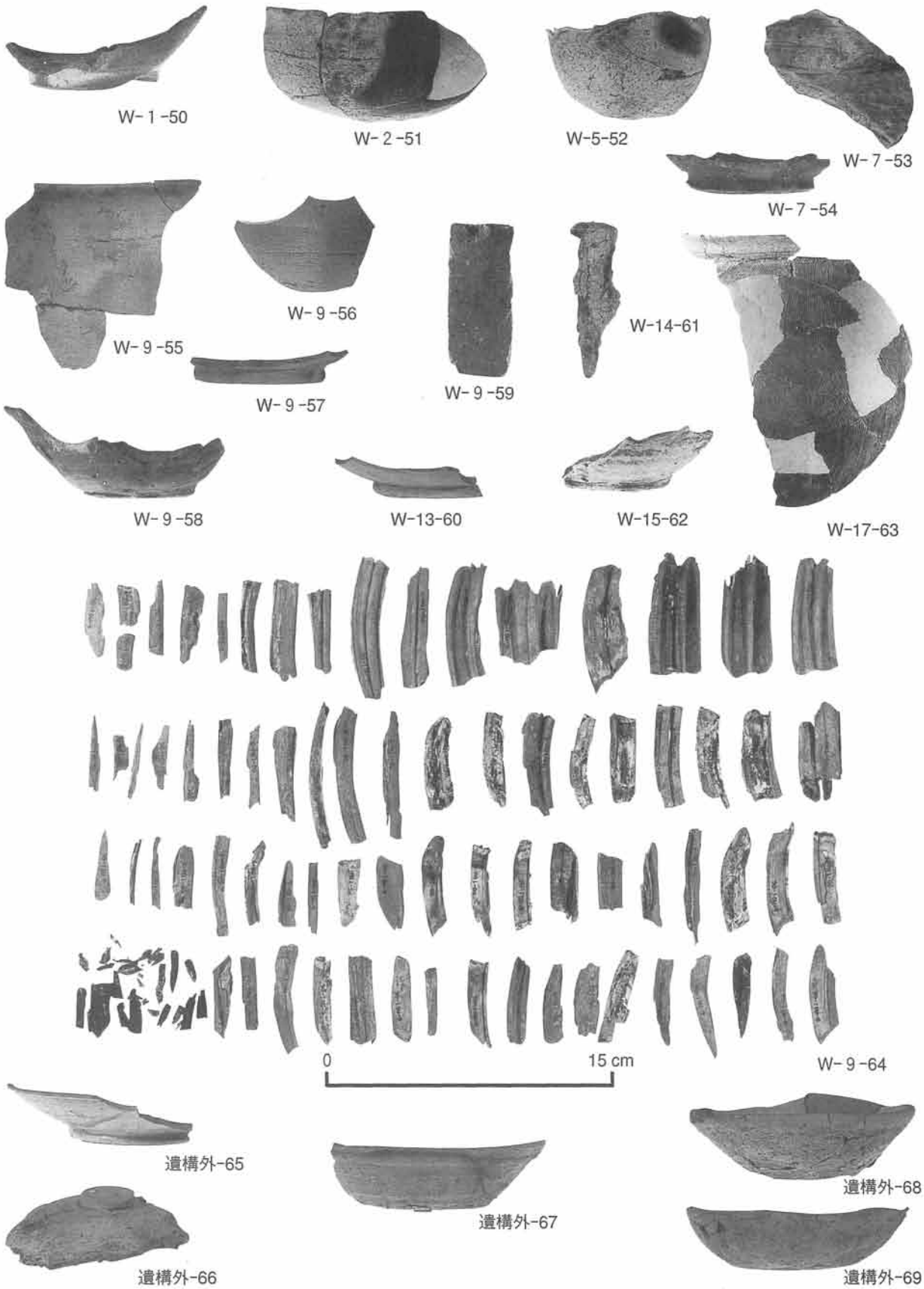
D-25-42

D-25-43

P-4-48

P-5-49

8号住居跡、竪穴状遺構、24・25・29・37号土坑、ピット出土遺物



溝状遺構・遺構外出土遺物

抄　　録

フリガナ	ヨコテユデンニイセキ　ハックツチョウサホウコクショ
書　　名	横手湯田Ⅱ遺跡　発掘調査報告書
副 書 名	都市計画道路横手鶴光路線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	井野誠一・宮内毅（前橋市教育委員会文化財保護課）高階敏昭（山武考古学研究所）
編集機関	山武考古学研究所／〒286－0045　千葉県成田市並木町221　☎0476（24）0536㈹
発行機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団　〒371－0007　群馬県前橋市上泉町664－4
発行年月日	西暦1998年3月25日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ヨコテユデンニ 横手湯田Ⅱ	群馬県前橋市 亀里町921　他	10201	9 G－19	36° 19′ 50″	139° 06′ 40″	19971201 19980325	1,605㎡	都市計画 道路改良 事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
横手湯田Ⅱ	水田跡	平安時代後期	As－B軽石下水田跡	石鏃・すり鉢など小型収納箱に１箱分

フリガナ	ニシダニイセキ　ハックツチョウサホウコクショ
書　　名	西田Ⅱ遺跡　発掘調査報告書
副 書 名	都市計画道路横手鶴光路線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	井野誠一・宮内毅（前橋市教育委員会文化財保護課）高階敏昭（山武考古学研究所）
編集機関	山武考古学研究所／〒286－0045　千葉県成田市並木町221　☎0476（24）0536㈹
発行機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団　〒371－0007　群馬県前橋市上泉町664－4
発行年月日	西暦1998年3月25日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ニシダニ 西田Ⅱ	群馬県前橋市鶴 光路町255－1　他	10201	9 G－10	36° 19′ 55″	139° 07′ 10″	19971201 19980325	1,135㎡	都市計画 道路改良 事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西田Ⅱ	水田跡 集落跡	平安時代後期 平安時代後期	竪穴住居跡　10軒 竪穴状遺構　5基 土坑　53基 溝状遺構　19条 ピット　多数	遺物総量は大型収納箱に20箱分。 古墳時代前期：（石田川式期）甕 平安時代後期：土師器甕・坏、須恵器甕・羽釜・甑・坏・灰釉陶器坏 石製紡錘車・刀子	

都市計画道路横手鶴光路線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

横手湯田Ⅱ遺跡・西田Ⅱ遺跡

平成10年3月25日　発行

編　集　山武考古学研究所　☎0476－24－0536

発　行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団　☎027－231－9531

印　刷　㈱文化総合企画　☎0476－93－0593